

板付周辺遺跡調査報告書

(4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集



1977

福岡市教育委員会

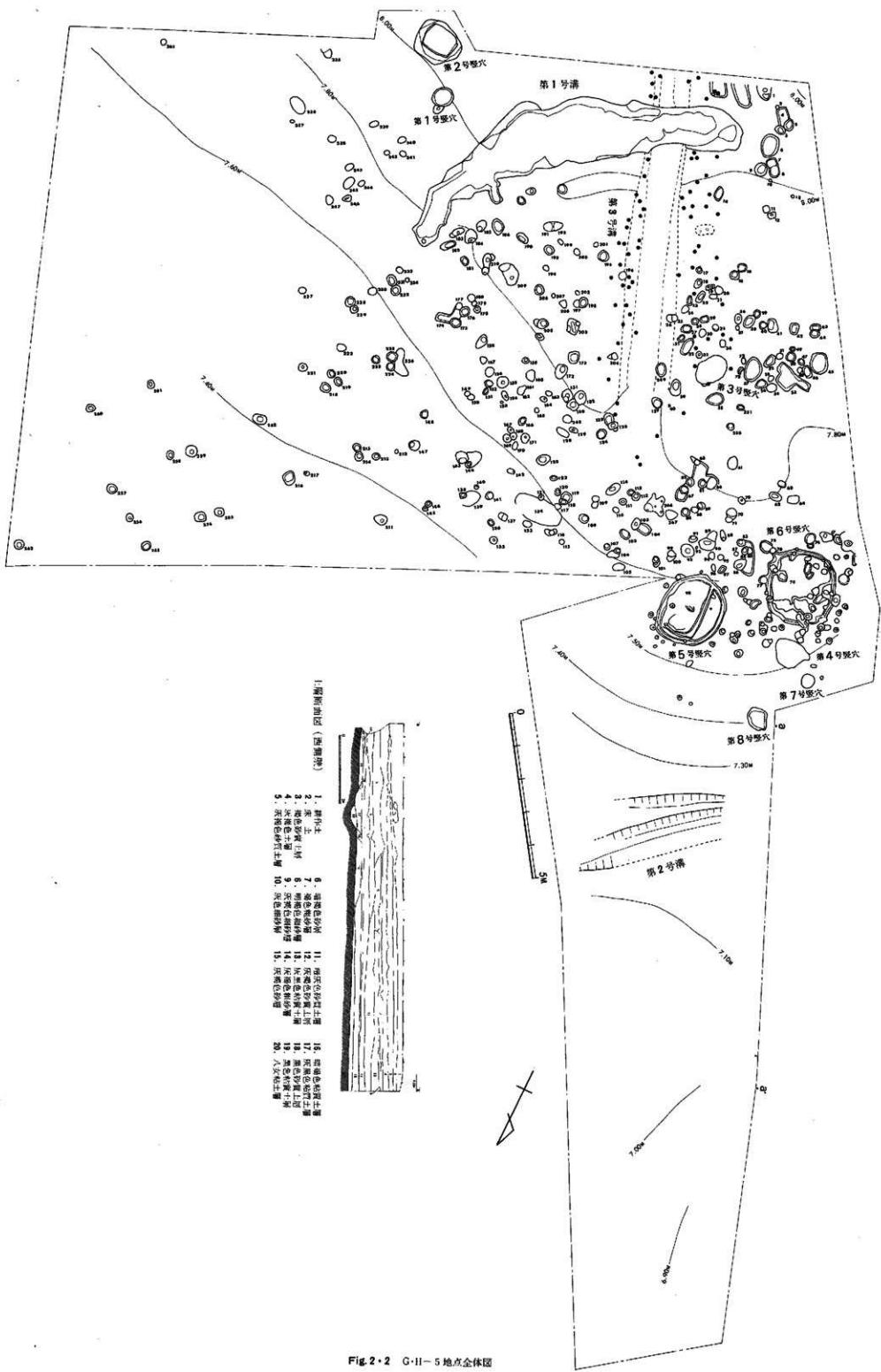


Fig. 2·2 G-II-5 地点全地图

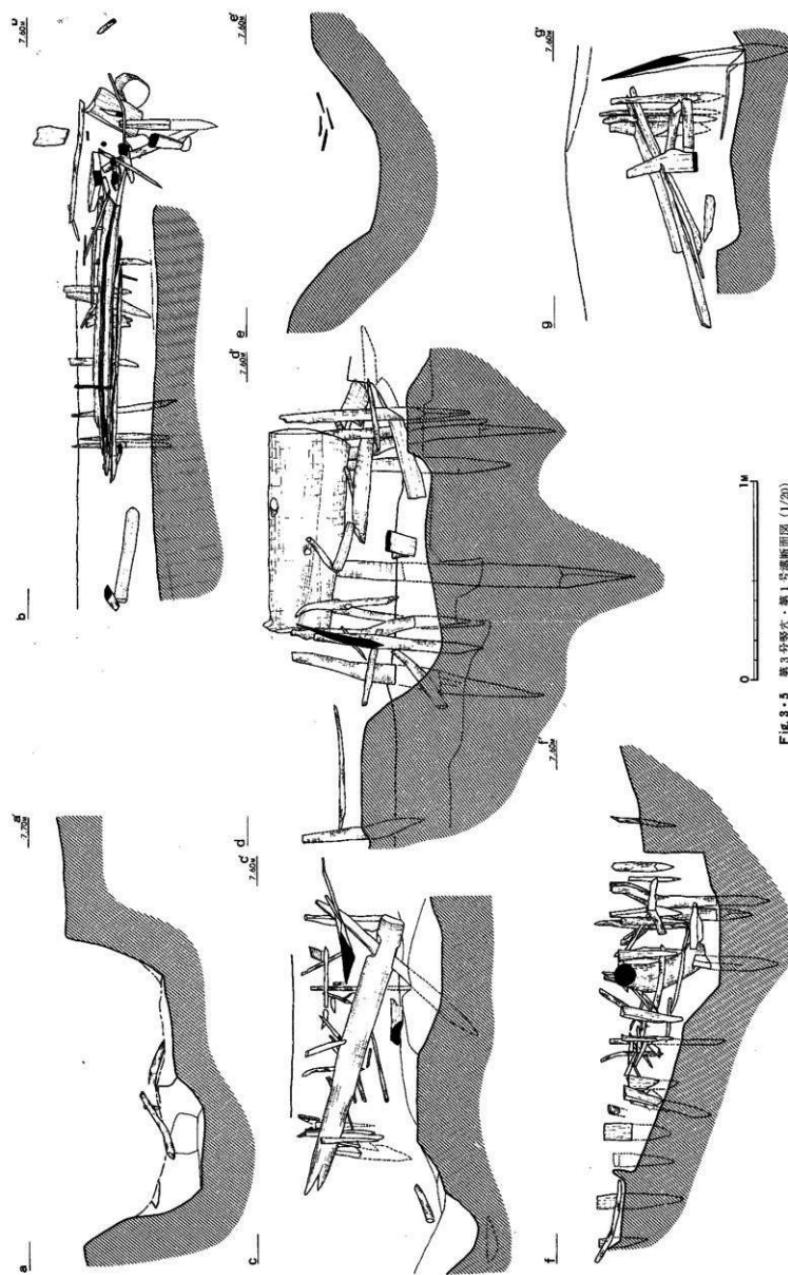


Fig. 3-5 第3分室六、第1号断面图 (1/20)

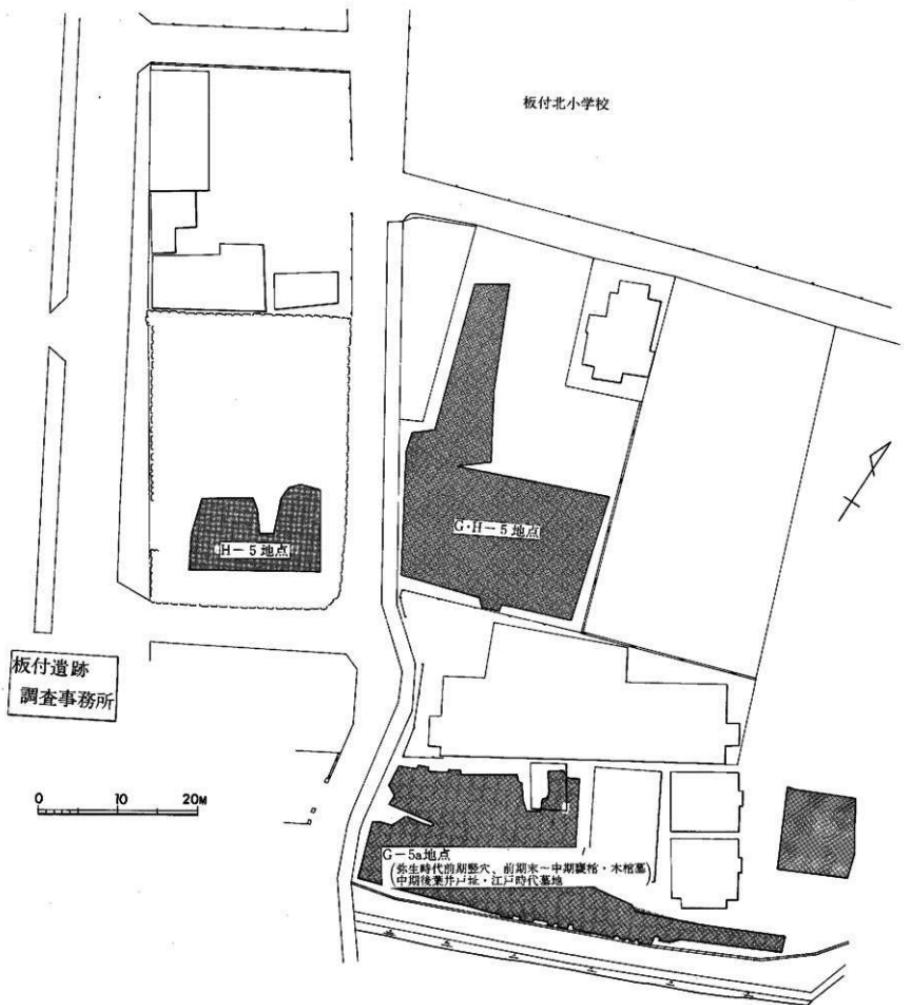


Fig. 2・1 G・H-5、H-5 地点地形図

正 読 表

	誤	正		誤	正
2頁 9行目	某場所一	某場所一	97頁 34行目	廢 廃	廢 滅
9頁 20行目	同器形	同器形	97頁 30行目	内腔状	内腔狀
17頁 33行目	しがし	しがち	102頁 29行目	台形型式をすな	台形型式すな
18頁 1行目 被革	盛り込まれ	掲込込まれ	106頁 7行目	1.1倍	1.1倍
19頁 12行目	あち方。此西	あち方。甚能原此西	108頁 4行目	細加工	細部加工
21頁 2行目	船子目立	船子目印立		注1	木灰・小林
31頁 22行目	2の	第2号	109頁参考文献	未承認題	未承認題
	深緑色點	深綠色點			
35頁 23行目	焼成時	燒成的			
56頁 11行目	15cm.	1.5cm.			
13行目	石英質中硬度	石英質硬質			
20行目	縁 部	縁 辺			
59頁 5行目	快りが入り	快りが入り			
32行目	繁 繁	堅 機			
62頁 4行目	ク	ク			
16行目	細葉部	細葉部			
25行目	搬出にまれ	運びにまれ			
64頁 1行目		全部トル			
71頁 14行目	潜むため	潜めるため			
15行目	上 端	上 端			
25行目	ク	ク			
72頁 3行目	ル	ル			

板付周辺遺跡調査報告書

(4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集

1977

福岡市教育委員会

序 文

板付遺跡保存整備事業の一環として、福岡市教育委員会では、板付周辺地域の開発に伴う緊急調査を、国庫補助事業により昭和48年度から継続して実施しております。

この報告書は、昭和51年度に実施した板付台地の北西部における、弥生時代中期を主体とする調査報告であり、竪穴、溝等を検出し、包含層を確認するなど多くの成果をあげることができました。

本報告書が市民各位の文化財に対する関心を深めるために役立ち、学術研究の分野で活用されることを願うものであります。

なお、調査に当たり助言をいただきました調査指導員の先生方をはじめ、関係者各位の寄せられました多大のご協力とご理解に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和52年3月

福岡市教育委員会

教育長 戸田成一

本文目次

序 本年度調査地と調査経過.....	(沢・山口).....	1
第1章 G-6a地点.....		3
I 調査概要.....	(沢)	3
II 遺物.....	(沢・山口謙治).....	5
III まとめ.....	(沢)	17
第2章 G・H-5 地点.....		
I 調査概要.....	(横山邦繼).....	19
II 竪穴造構.....	(横山・吉田悟).....	19
III 溝状造構.....	(沢・横山).....	27
IV 小竪穴群.....	(横山・吉田・原俊一)	32
V 出土遺物.....	(沢・山口).....	35
VI まとめ.....	(横山)	65
第3章 H-5 地点.....		
I 調査概要.....	(山口).....	66
II 遺構と出土遺物.....	(山口・原)	66
III 包含層出土遺物.....	(山口・原)	76
IV まとめ.....	(山口)	109
あとがき.....	(沢)	110
付編第1 福岡市板付遺跡H-5 地点から出土した木質品の樹種について(鳴倉巳三郎).....	111	
付編第2 諸岡遺跡14号甕棺近傍出土の炭化様子について(粉川昭平)	(粉川昭平)	115

図版目次

PL. I 1 板付遺跡全景.....	
2 G・H-5、H-5 地点全景.....	
PL. II G-6a地点.....	
PL. III G-6a地点出土器.....	
PL. IV 1 G-6a地点出土土器.....	
2 G-6a地点出土石器.....	
PL. V G・H-5 地点遺構出土状態.....	
PL. VI G・H-5 地点出土石器・石製品・土製品.....	
PL. VII H-5 地点 (1)	
PL. VIII H-5 地点第1号溝状遺構 (2)	
PL. IX H-5 地点木器出土状態 (3)	
PL. X H-5 地点遺物出土状態 (4)	

PL. XI	H-5地点(5)
PL. XII	H-5地点出土土器・石製品・土製品.....
PL. XIII	H-5地点出土石器.....
PL. XIV	H-5地点出土木器.....
PL. IV	H-5地点出土木器・杭・檻板.....

插 図 目 次

一序一

Fig 1 緊急調査地点と板付地区の遺跡

一第1章一

Fig 1・1	G-6a地点地形図.....
Fig 1・2	G-6a地点トレンチ平面図および上層断面図.....
Fig 1・3	G-6a地点客土層出土の土器(1)
Fig 1・4	G-6a地点客土層出土の土器(2)
Fig 1・5	G-6a地点客土層出土の土器(3)
Fig 1・6	G-6a地点粗砂層出土の土器(1)
Fig 1・7	G-6a地点粗砂層出土の土器(2)
Fig 1・8	G-6a地点粗砂層出土の土器(3)
Fig 1・9	G-6a地点粗砂層出土の土器(4)
Fig 1・10	G-6a地点粗砂層出土の土器(5)
Fig 1・11	G-6a地点出土の石器(1)
Fig 1・12	G-6a地点出土の石器(2)

一第2章一

Fig 2・1	G・H-5地点・H-5地点地形図.....
Fig 2・2	G・H-5地点全体図および土解断面図.....
Fig 2・3	第1号竪穴実測図および出土遺物実測図.....
Fig 2・4	第2号竪穴実測図および出土遺物実測図.....
Fig 2・5	第3号竪穴実測図および出土遺物実測図.....
Fig 2・6	第4・7号竪穴実測図および出土遺物実測図.....
Fig 2・7	第5号竪穴実測図.....
Fig 2・8	第6号竪穴実測図.....
Fig 2・9	第8号竪穴実測図および出土遺物実測図.....
Fig 2・10	第1号溝実測図.....
Fig 2・11	第1号溝出土遺物実測図.....
Fig 2・12	第2・3号溝出土遺物実測図.....
Fig 2・13	第3号溝内出土弦生式土器実測図.....
Fig 2・14	小竪穴出土遺物実測図.....
Fig 2・15	灰褐色粘質土層出土土器実測図.....
Fig 2・16	灰褐色砂質土層出土土器実測図(1)
Fig 2・17	灰褐色砂質土層出土土器実測図(2)
Fig 2・18	灰褐色砂質土層出土土器実測図(3)
Fig 2・19	灰褐色砂質土層出土土器実測図(4)
Fig 2・20	灰褐色砂質土層出土土器実測図(5)
Fig 2・21	黒色粘質土層出土土器実測図(1)
Fig 2・22	黒色粘質土層出土土器実測図(2)
Fig 2・23	黒色粘質土層出土土器実測図(3)
Fig 2・24	黒色粘質土層出土土器実測図(4)
Fig 2・25	包含層出土土器実測図(1)
Fig 2・26	包含層出土土器実測図(2)
Fig 2・27	包含層出土土器実測図(3)
Fig 2・28	包含層出土土器実測図(4)
Fig 2・29	包含層出土土器実測図(5)
Fig 2・30	包含層出土土器実測図(6)

Fig 2・31	G・H-5地点出土石器実測図(1)	57
Fig 2・32	G・H-5地点出土石器実測図(2)	58
Fig 2・33	G・H-5地点出土石器実測図(3)	60
Fig 2・34	G・H-5地点出土石器実測図(4)	61
Fig 2・35	G・H-5地点出土石器・石製品・土製品実測図.....	63
-第3章-		
Fig 3・1	H-5地点全体図.....	67
Fig 3・2	H-5地点土層断面図.....	68
Fig 3・3	遺構出土土器実測図.....	69
Fig 3・4	第3号竪穴・第1号溝実測図.....	(別添)
Fig 3・5	第3号竪穴・第1号溝断面図.....	(別添)
Fig 3・6	包含層出土土器実測図(1)	77
Fig 3・7	包含層出土土器実測図(2)	78
Fig 3・8	包含層出土土器実測図(3)	79
Fig 3・9	包含層出土土器実測図(4)	80
Fig 3・10	包含層出土土器実測図(5)	82
Fig 3・11	包含層出土土器実測図(6)	83
Fig 3・12	包含層出土土器実測図(7)	84
Fig 3・13	包含層出土土器実測図(8)	86
Fig 3・14	包含層出土土器実測図(9)	87
Fig 3・15	ナイフ形石器実測図.....	89
Fig 3・16	包含層出土石斧実測図(1)	91
Fig 3・17	包含層出土石斧実測図(2)	92
Fig 3・18	包含層出土石包丁・石鎌・石剣実測図.....	93
Fig 3・19	包含層出土石鏃等実測図.....	95
Fig 3・20	包含層出土劍片石器実測図.....	96
Fig 3・21	包含層出土劍片・石核・磨石等実測図.....	98
Fig 3・22	包含層出土石製品・土製品実測図.....	99
Fig 3・23	出土鰐実測図.....	103
Fig 3・24	出土鰐・獸実測図.....	104
Fig 3・25	出土容器・臼状木器・槌実測図	105
Fig 3・26	枕実測図.....	107

表 目 次

-第1章-

Tab 2・1	G・H-5地点小竪穴一覧表.....	33
Tab 2・2	G・H-5地点出土石器・石製品・土製品一覧表.....	64
-第3章-		
Tab 3・1	H-5地点出土木製品・木材一覧表.....	73
Tab 3・2	H-5地点出土石器・石製品・土製品一覧表.....	101

—れいげん—

- 本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、1976年度に実施した福岡市博多区板付周辺地区の民間宅地造成・建築にともなう緊急発掘調査報告書である。
- 実測図は調査担当者、参加学生により、製図は、各項目担当者が当ったが、吉田が主に行なった。
- 木器・木材の識別を、曉学園短期大学島倉巳三郎教授に、種子の鑑定を大阪市立大学粉川昭平教授に、石器の石材鑑定を秋吉台科学博物館太田正道博士にお願いした。
- 写真は、遺構を沢・横山・山口・原・遺物を沢が担当し、石器は宮島成昭氏にお願いした。
- 本報告書は沢・横山・山口・原・吉田が執筆し、付録を、島倉・粉川両先生にお願いし、編集は沢・山口・原が行った。



Fig. 1 板付遺跡と周辺調査地点

0 板付遺跡(塗溝)、1 板付遺跡(市営住宅建設にともなう調査1971~74)、2 諸箇遺跡
 (A地点: 1973年調査、B-D地点: 1974年調査、E-F地点: 1975年調査)、3 H-12-
 13地点、4 G-9-10地点(以上1972年調査)、5 板付第2市営住宅建設地、6 H-8地点
 7 D-6-7地点、8 D-9-10地点、9 A-B-13地点(以上1973年調査)、10F-9 a
 地点、11D-E-9地点(以上1974年調査)、12G-5 a地点、13F-8 a地点、14H-12
 地点(以上1975年調査)、15G-6 a地点、16G-H-5地点、17H-5地点

序 本年度調査地と調査経過

昭和48年以来、国庫補助事業として、板付周辺地域の緊急調査が実施されて来た。本年度もひきつづき3ヶ所の調査を行ったが、いずれも宅地造成、住宅建設に伴うものである。

1. G-6a地点 福岡市博多区板付2丁目11-13。鯨島澄香氏所有地384m²。発掘面積90m²。
2. G・H-5地点 福岡市博多区板付2丁目9-1。山浦盛雄氏所有地1172m²。発掘面積530m²。

3. H-5地点 福岡市博多区板付2丁目10-4。稻永定雄氏所有地940m²。発掘面積140m²。

この他に、板付地区、諸岡地区など数ヶ所の試掘を行ったが、いずれも遺構・遺物とも出土しなかった。

G-6a地点は、環溝の西側、水田保存地域の南側にあたり、台地端に接するところから遺構、遺物の存在が予想されていた。しかしながら期待されていた台地端も当地域までは延びていず、また何らの遺構も発見できなかった。ただ、最下層の粗砂層から、夜臼式～板付II式の完形品あるいはそれに近い大きな破片が出た。またそれが丹塗りの壺や、口縁部打ち欠きの壺などが多いことから、弥生時代前期の生活を知る上での重要な資料を提供した。

G・H-5地点は、裴棺墓地であるG-5a地点(山口1976)、板付北小学校校庭(後藤・沢1976)にはさまれた地点で、墓地の可能性が考えられていたが、墓地は存在せず、前記の両地点の鞍部に相当することが判明した。しかし、弥生時代中期の弧状溝や弥生時代前期と思われる遺構などとともに包含層から多量の土器・石器が出上した。

H-5地点は1m以上もある盛土のため調査範囲はせまかったが、古地端を走る弥生時代中期後葉と後期前葉の溝2本と、前者に伴う壘状遺構や暗渠とも思われる橋状遺構、鋤などの木器や、多量の丹塗り土器、石器を出土した。また溝中からイノシシの歯も出土している。

以上、本年度の調査は、当該地がほとんど盛土されているためと堆土の置場に苦心したため調査範囲がせまく、しかも当初の予想に反した結果がでたが、板付遺跡の性格を考える上では重要な地点であり、そのことに関しては貴重な資料を提供したと言える。

調査期間は4月から11月までの間に行った。

調査を担当したのは福岡市教育委員会社会教育部文化課板付遺跡調査事務所で、現場作業は、沢皇臣・横山邦繼・山口謙治がそれぞれ責任者となって行った。事務は橋崎幸利・草場九男・安田正義が担当した。

なお、石器の石材については、秋吉台科学博物館の太田正道理学博士、H-5地点の木器・木材については曉学園短期大学鳴倉巳三郎教授の鑑定をうけた。また、昭和48年度調査の諸岡14号裴棺近傍出土の炭化種子について、大阪市立大学船川昭平教授の鑑定をうけたので、付録として掲載した。

調査にあたっては下記の方々から多くの援助を受けた。記して感謝する(敬称略)。

中原志外顕、田中幸夫、下條信行（九州大学考古学研究室助手）、高倉洋彰（九州歴史資料館）、後藤直（福岡市立歴史資料館）、江浜明徳（市立博多工業高校教諭）。

地主・鯨島澄香、山浦盛雄、稻永定雄。

調査作業員・大部茂久、広田熊雄、中牟田頸歎、岸原藤雄、屋山利久、副島三好、川畠淳二、
舍川キチエ、岸原松枝、菅谷初子、江島光子、安高久子、金沢淑子、木下君子、永松伊都子、
山本敏子、岸原春子。

調査員・岩崎二郎（九州大学大学院生）、原俊一、吉田悟。

参加学生・松村明子（明治大学大学院生）、小林義彦、橋本寛史、河本ひとみ（以上明治大学生）、草場敬一、吉留秀敏、清水聖子（以上別府大学生）、森瀬圭子（奈良女子大学生）、
森山栄治、中垣治夫、森田雅博（以上福岡大学生）、平田正（九州産業大学生）、上田茂利
(東福岡高校生)、市立博多工業高校生。

整理作業・木村良子、田村キミ子、稻富和裕（現福岡県文化課調査員）。

文献

後藤直・沢賀臣編（1976）板付市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971～1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集

山口謙治編（1976）板付周辺遺跡調査報告書（3）福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集

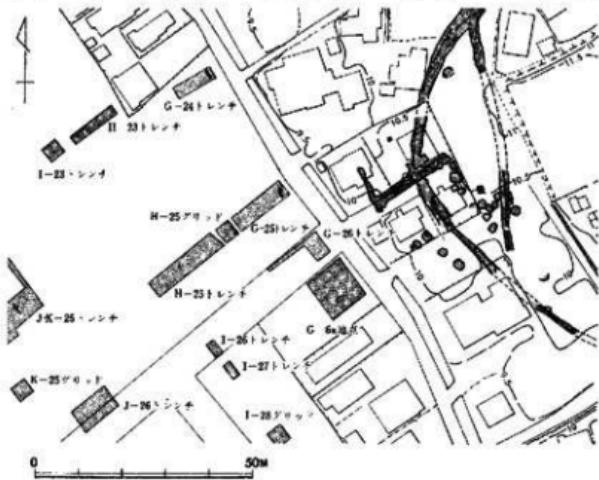
第1章 G-6a地点

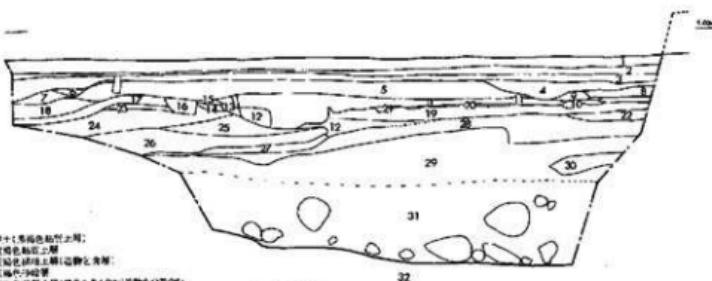
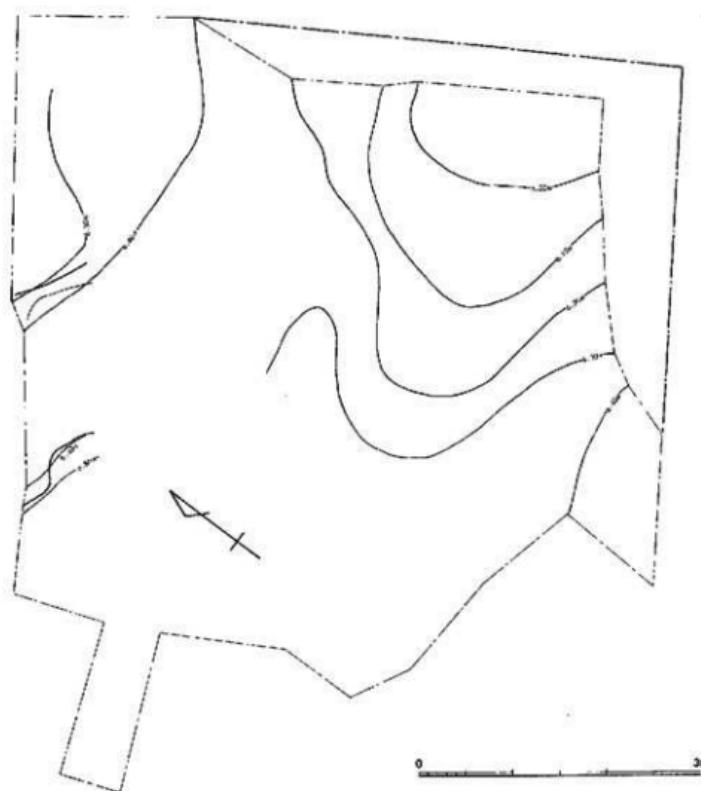
I 調査概要

G-6a地点は板付丘陵の西側の水田部にある。東側は約80mで、環溝の中心に近い通津寺に至る。また幅5mの道路を隔てた東側地点は、かつて日本考古学協会農業部会が昭和26年から数年にわたって調査し、環溝の一部、弦状溝、袋状竖穴、井戸状遺構、甕棺墓などが検出された1~3区にあたる（森・岡崎1961）。福岡市教育委員会が調査を行い、弥生時代中期中葉~後葉の木器類などを出土し、現在保存地となっているG-24・25トレンチはそれぞれ北西へ約60m、30mであり、現在道路下となっている木器や銅鉢鋳型を出土したG-26トレンチからは南東へ10m未満の近きである（後藤・沢1976）。このため、この地点は早くから遺構、遺物の存在が予想されていた（Fig. 1・1）。

昭和51年春、この地点に株式会社鷲島組が住宅付店舗を建築することになり、それに先立つて緊急調査を実施することにした。

現地は、数年前までは水田として利用されており、その後に宅地化のため約50cm~60cmの盛土がなされていた。そのために耕土量が多くなることと、前記G-24~26トレンチの調査結果から、深さは約3m前後になること、道路端から10mも離れれば遺構、遺物の影が薄くなることから、調査区域を東側の9×10mに決めて、ユンボで盛土および水田耕作土層、床土層を除去した。床土層の下にはG-24~26トレンチでもみられた、他から持つて来られた多量の遺物を含む灰褐色粘質土層（客土層）（後藤・沢1976）となっている。その下部は粘質土層や砂層、砂質土層などが自然堆積状態を示しており、最下部では約1.7mにもおよぶ粗砂層が堆積している。この粗砂層は一部に細砂層や、ローム塊が混じ肉眼では色の違いから2層に分けられるが、





1. 黄土；多雨色粘性土層
2. 黄褐色粘性土層
3. 黄褐色粘性土層(透徹と充満)
4. 黄褐色砂質土層
5. 黄褐色砂質土層(透徹と少満)
6. 土質化植物土層(透徹と少満)
7. 黄褐色砂質土層
8. 黄褐色粘性土層(透徹を含む)
9. 黄褐色粘性土層
10. 黄褐色粘性土層
11. 黄褐色砂質
12. 黄褐色粘性土層
13. 黄褐色砂質
14. 黄褐色粘性土層(透徹を含む)
15. 黄褐色粘性土層
16. 黄褐色粘性土層
17. 黄褐色粘性土層
18. 黄褐色粘性土層
19. 黄褐色粘性土層
20. 黄褐色粘性土層(透徹を含む)
21. 黄褐色粘性土層
22. 黄褐色粘性土層
23. 黄褐色粘性土層
24. 黄褐色粘性土層
25. 黄褐色粘性土層
26. 黄褐色粘性土層
27. 黄褐色粘性土層
28. 黄褐色粘性土層(透徹を含む)
29. 黄褐色粘性土層
30. 黄褐色粘性土層
31. 黄褐色粘性土層(透徹を含む)
32. 黄褐色粘性土層

Fig. 1・2 C-6a地点トレンチ平面図および土層断面図

これは下部に鉄分が沈澱して暗黄褐色を呈するもので、本来は同一の層である。この粗砂層からは夜白式～板付II式の土器が完形あるいはそれに近い状態で出土している。粗砂層の下は八女粘土層となる。この八女粘土層は北隅や、南隅では標高6.40mであるが東隅に向かって低くなり、最深部では標高5.9mとなる。

G-6a地点は台地に非常に近い所にあるが、台地端は検出されず、また造構も存在せず、当初予想された木器の出土もなかった。以下出土遺物について述べる。

II 遺物

〔出土遺物〕 出土した遺物は上器・石器・自然遺物であるが、自然遺物は客土層と弥生時代前期の包含層である粗砂層との間の自然堆積層中からの出土であり、時期の判定も出来ないところから、ここでは述べない。

〔客土層の土器〕 (Fig 1・3～5)

前述したように、板付台地のどこからか持つて来た土層である。G-24～26トレンチでは若干の弥生前期上器が出土したが、本地点では出土せず、若干の須恵器、土師器、磁器、瓦を除いては、ほとんどが弥生中期～後期前葉の土器である。

甕 (Fig 1・3) 1～4・6～8・10は逆「L」字状口縁をもつ。1は内端が下がり、外側への張り出しもあり強くなく、ここでは一番古く、あるいは弥生時代中期前葉までさかのばる可能性もある。2・3は外面に縱の刷毛目調整。3・4は口縁外端が下がり、口縁下に一条の「M」字状突帯をもつ。3の口縁内面と、4の外面は丹塗り。6・7は口縁下に三角突帯一条を巡らす。これらの土器は口縁部および、突帯付近は横なで調整を行う。5は甕棺の口縁部であろう。8は口縁内唇に割口を施す。4を除いては胎土に石英粒砂を含む。これらの土器は中期中葉のものであろう。11～18はいわゆる「く」の字状口縁をもつ。12は口縁外唇が、沈線状に凹み、口縁下に一条の三角突帯をもつ。14は外面の口縁部から、15は胴部外面に縱の刷毛目調整。18も口縁下に一条の三角突帯を巡らす。これらの土器は11～13が弥生時代中期後葉、14～18は後期前葉のものと思われる。

壺 (Fig 1・4, 1～15) 1はいわゆる単純に開く口縁部をもつ。口縁外唇および、内面上部に丹痕あり。2は口縁外端の発達が弱い。3～6はいわゆる鋤状口縁をもつが、4・5の口縁外端が水平に張り出すのに比べ、3・6は外端が下がるが、3は特に強い。7は小型の壺の胴部である。8～11は袋状口縁の壺である。12～15は無頸壺の口縁であろう。破片中には口縁部の小孔は見あたらない。12は大型のものである。13は全形をうかがえるものである。内、外とも口縁下に丹の痕跡を有する。底部は若干上げ底となる。推定口縁径約16cm。推定器高15.6cm。14・15も外面口縁下に丹塗りの痕跡がある。いずれも弥生時代中期～後期前葉のものである。

蓋 (Fig 1・4, 16) 無頸壺の蓋であり、外面丹塗り。小孔の対角線上に2個づつ、計4個あり、焼成前の穿孔のためか内部に丹痕が残る。小孔の幅は4cm。中期後葉のものであろう。

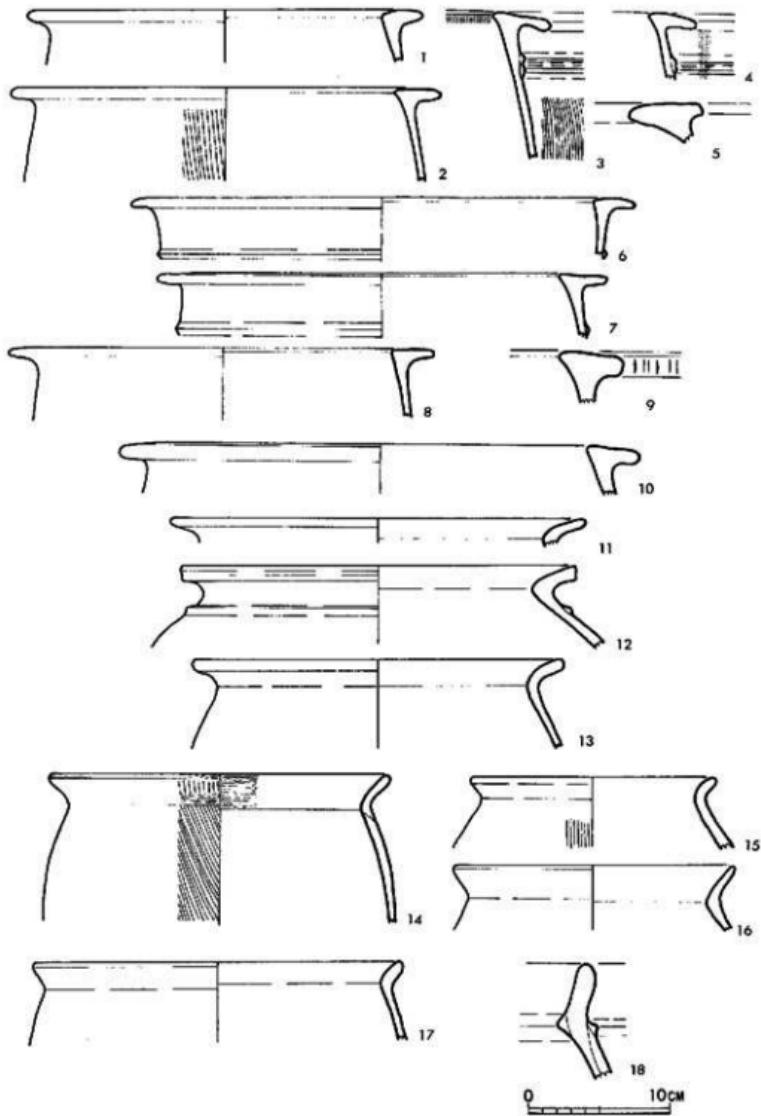
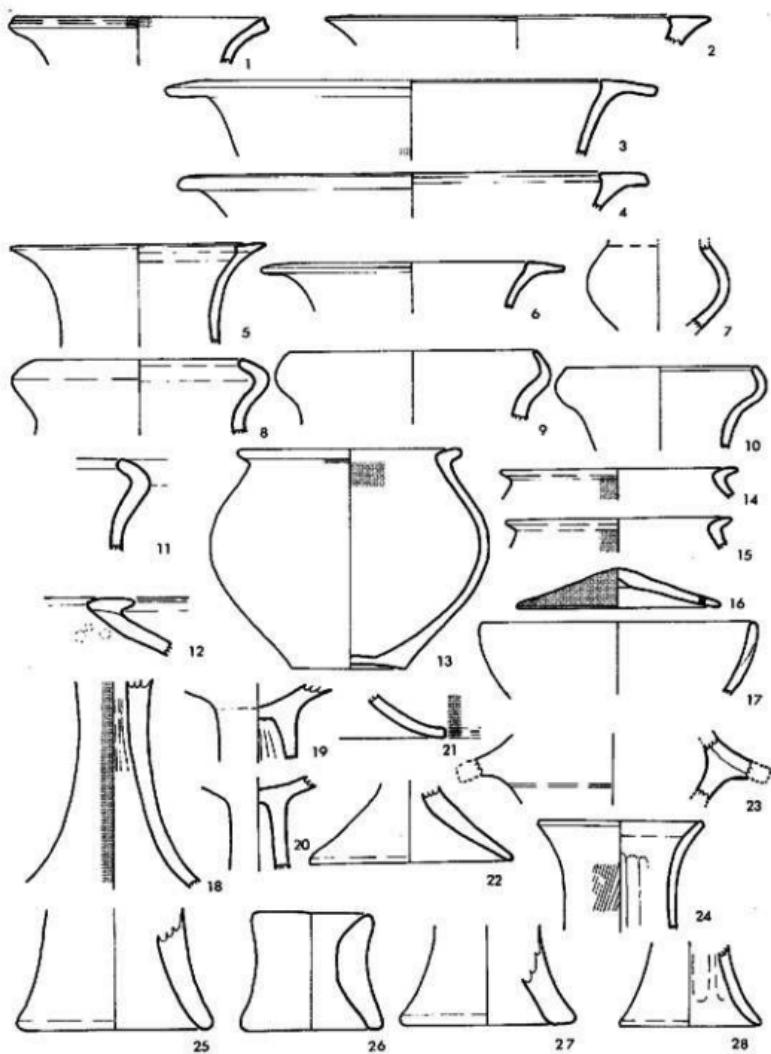


Fig. 1・3 G-6a地点客土層出土の土器 (1)



0 10CM

Fig. 1・4 G-6a地点客土層出土の土器 (2)

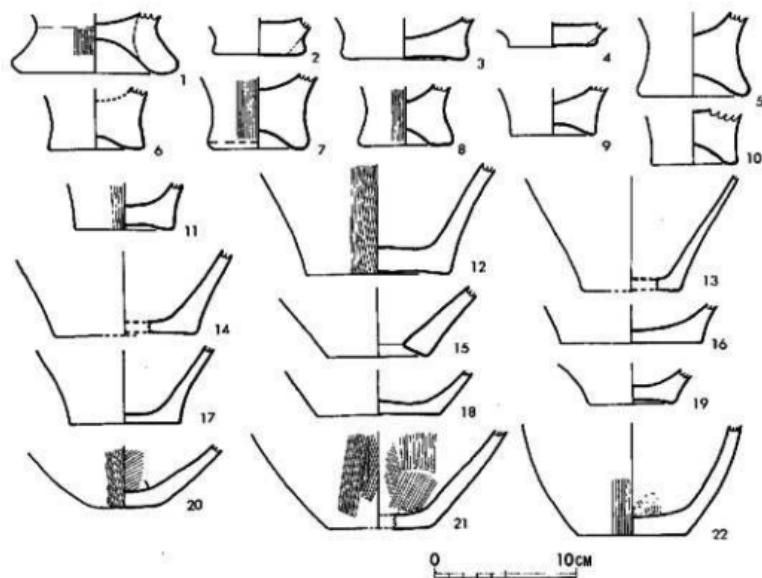


Fig. 1・5 G-6a地点客土層出土の土器 (3)

鉢 (Fig. 1・4, 17) 最大径を口縁部にもち、内肩しながら単純にすぼまる鉢である。中期後葉のものか。

高环 (Fig. 1・4, 18~22) すべて脚および环と脚の接合部破片であるが22はあるいは高环というより、脚付鉢の脚部かも知れない。18・21は外面丹塗り。18~19には内面にしづら痕がみられる。いずれも弥生時代中期~後期前葉のものであろう。

大型器台 (Fig. 1・4, 23) 口縁部および、鉢の外端を欠く。器面の磨滅が激しいために整形、調整は良くわからない。中期後葉のものであろう。

器台 (Fig. 1・4, 24~28) 24はくびれ部が、中位以上にあり、外面斜めの崩毛目調整。内面は指のなであげ調整。薄子の器壁をもつ弥生時代中期の器台である。25~28は、若干器壁が厚くなり、はってりとした印象を与える。28は小型のもので、全形をうかがえる。推定口径8.2cm、脚裾部径9.6cm、高8.5cm。28は両面に指のなであげがある。弥生時代中期後葉~後期のものである。

底部 (Fig. 1・5) 18~20は壺、他は甕の底部であろう。1は高台状になる底部であり、外面は継刷毛目調整。2~4はあるいは弥生時代前期のものであろう。5~10は特徴ある上げ

底の分厚い底部で弥生時代中期初頭のものであろう。7・8は外面縦刷毛目調整。11・12・14・19は上げ底を呈する。11・12は外面縦刷毛目調整、15は顎であろう。20~22も外面に縦あるいは斜めの刷毛目調整。内面底部近くにも刷毛目調整がある。22は底部の接合部付近に指で押された痕がある。弥生時代中期~後期のものであろう。

(粗砂層の土器) (Fig 1・6~10)

甕 (Fig 1・6・1~15、1・9・4~7) 1・6・1~14、1・9・4~8はいわゆる夜臼式土器である。いずれも胎土に石英粒砂を混入し、焼成は良いが、大部分は暗褐色を呈する。1・6・1は内外面とも条痕調整で、突帯の刻目は貝か籠状の工具で施している。1・6・3は口縁下に補修孔と思われる穿孔がある。この穿孔は内外両面から行なわれるが、特に内面からのものは一度位置を失敗している。1・6・13は刻目突帯はないが、内外面とも沈線様の条痕が施されている。1・6・14は甕というより鉢に近い。1・9・4は内面口縁下に指の押圧調整痕がつき、胴部の接合反転部の内部に条痕調整。1・9・5は口縁部から単純に胴部へとすばまる。底部外面に指の押圧調整痕が残り、底部は上げ底を呈す。器型的には夜臼式でも新しい方であろう。なお1・6・11は刻目突帯直下に粗底1個がついている。1・6・15、1・9・7は板付I式である。1・6・15は内外面とも、1・9・7は内面に刷毛目調整。1・6・15は内面口縁下に指の押圧調整痕。

鉢 (Fig 1・6・16、1・9・8、1・10・1~4) すべて弥生前期のものであろう。1・6・16は単純に開く鉢で外面条痕調整。1・9・8は大型の鉢で、外反する口縁下に一条の三角突帯を巡らし、そこから以下は内窓しながら、底部へとすばまる。1・10・1も大型のもので外反する口縁部が胴部でゆるく「く」の字状に屈折する。1・10・3、4は同器型のもので外反する口縁部が胴部で強く「く」の字状に屈折して底部へとすばまる。1・10・5は口縁部が内傾しながら外反し、胴部の屈折も強い。

壺 (Fig 1・6・17~19、1・7・1・8、1・9・1~3) 1・7・1~4は夜臼式であろう。1・7・1は外面および内部の口縁下まで丹塗り磨研。1・7・2、3は小型の上器である。1・7・4は、内面に条痕調整で、指の調整痕もみられる。1・7・5は内外面とも丹塗りで、外面には一部に細かい刷毛目調整、内面は粗い刷毛目調整。1・7・6~8は口縁部外側が肥厚する。1・7・7は、外面および内面の口縁下は丹塗り磨研。内面のそれ以下は横刷毛目調整で、指の押圧痕もみられる。1・7・8も内外面ともに丹塗り磨研。口縁下外面に斜めに二条の沈線様のものがある。1・7・9は大型の壺で、口縁部を大きく、口縁下に一条、肩部に一条の沈線をもつ。外面は丹塗り磨研。内面は指の押圧調整の後、刷毛目調整。1・7・10は外面丹塗り磨研。内面も丹塗りであるが、指の押圧調整や、刷毛目調整がみられる。1・7・11は肩部に二条の沈線を巡らし、内面は刷毛目調整の後に丹塗り。1・7・12も肩部に一条の沈線。1・8・1は完形品である。外反する口縁部から、段のゆるい肩部へとひろがり、胴部上位に最大径を有する。外面および内面口縁部は丹塗り磨研。外面の底部近くと内面は刷毛目調整。内面には指の押圧調整痕もみられる。外面の胴部下位には一部黒変する部位もみら

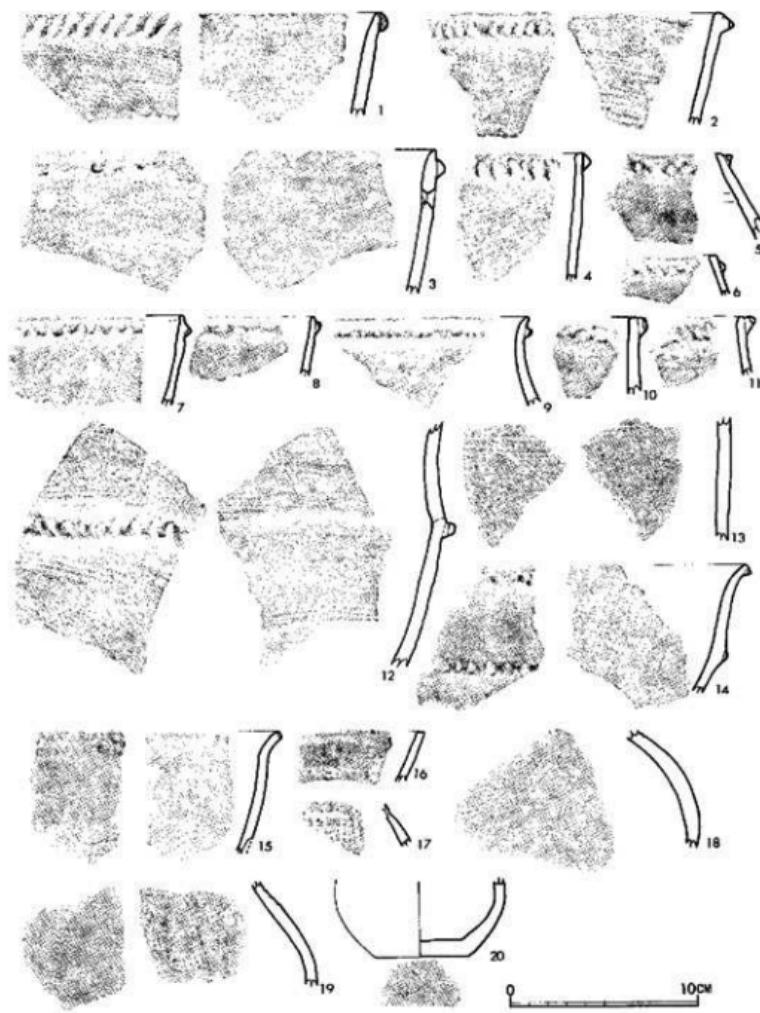


Fig. 1 ~ 6 G-6a地点粗砂層出土の土器(1)

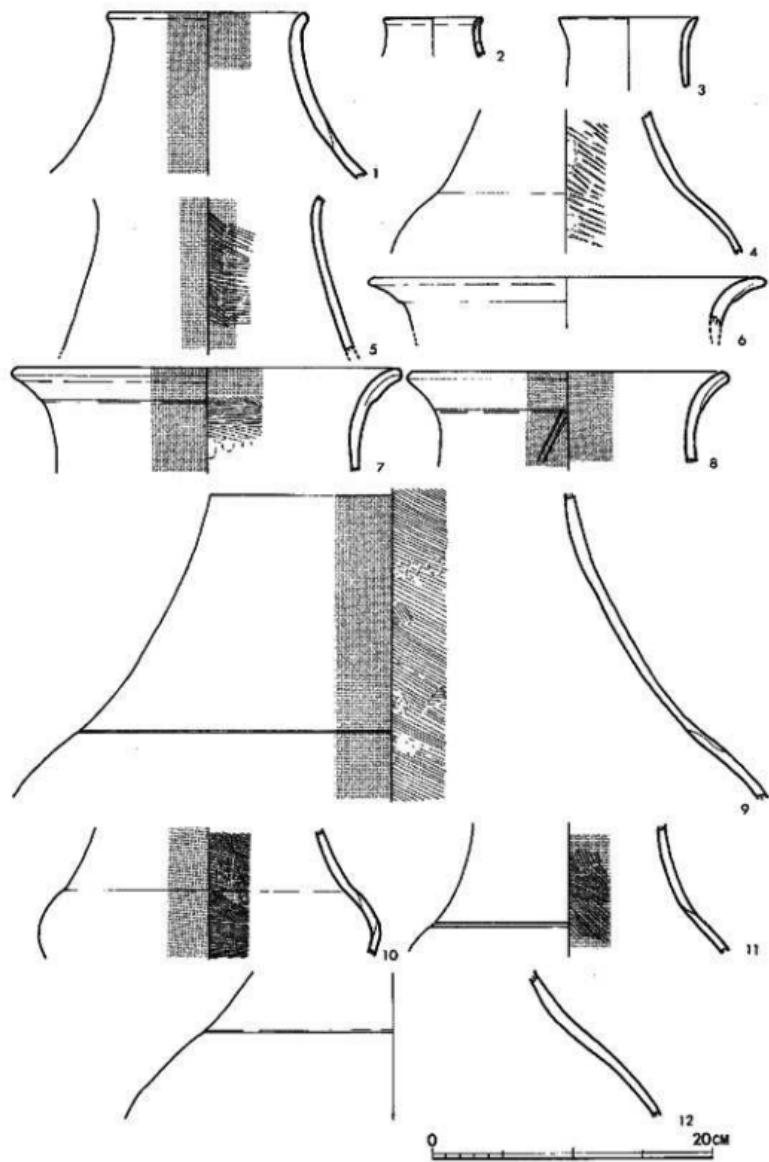


Fig. 1・7 G-6a地点粗砂層出土の土器 (2)

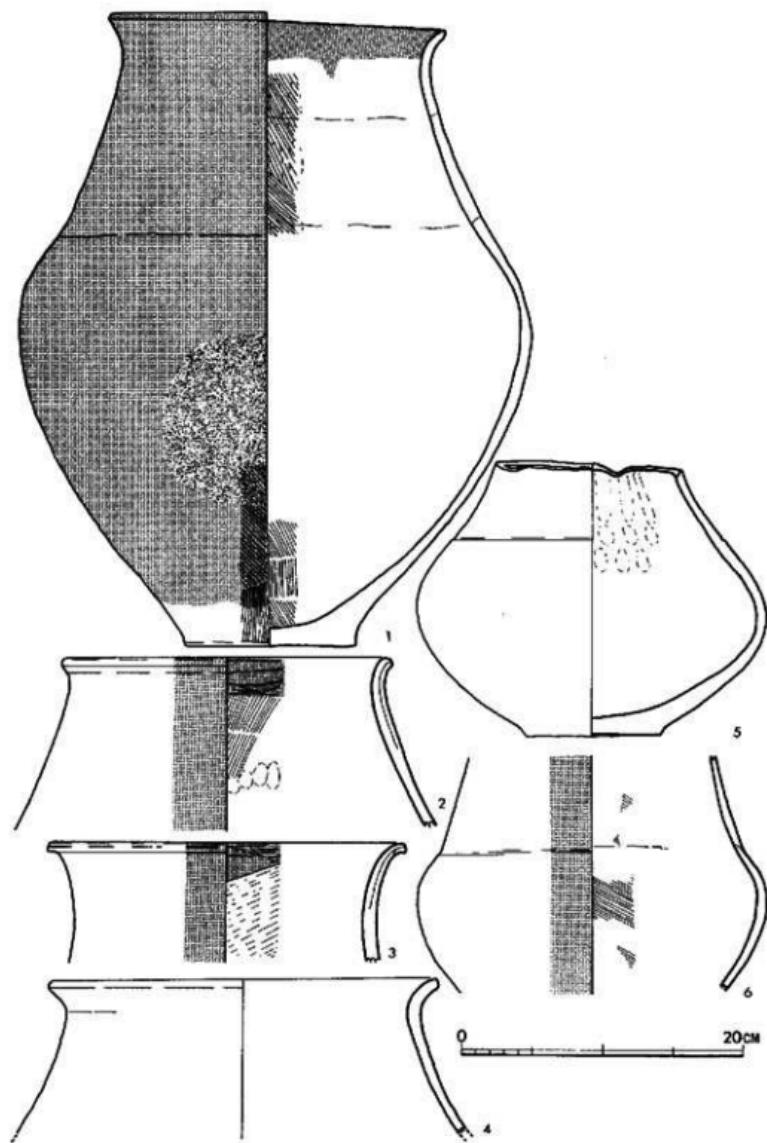


Fig. 1・8 G-6a地点粗砂層出土の土器 (3)

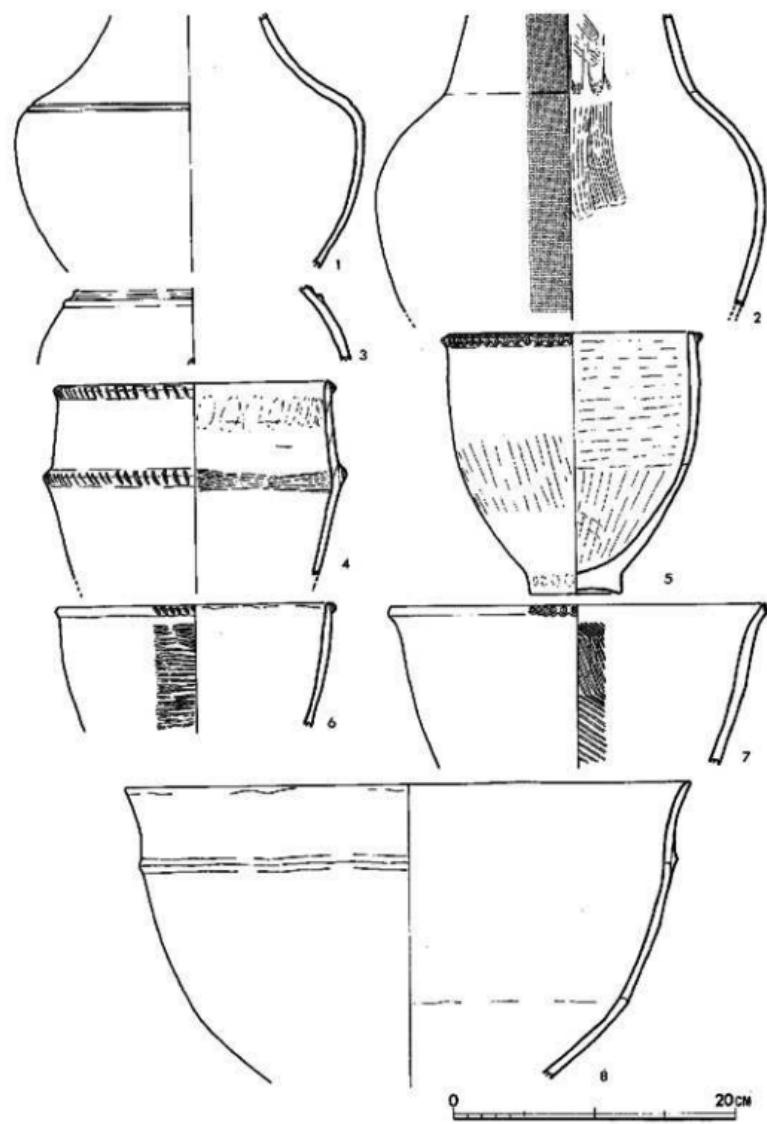


Fig. 1・9 G-6a地点粗砂層出土の土器 (4)

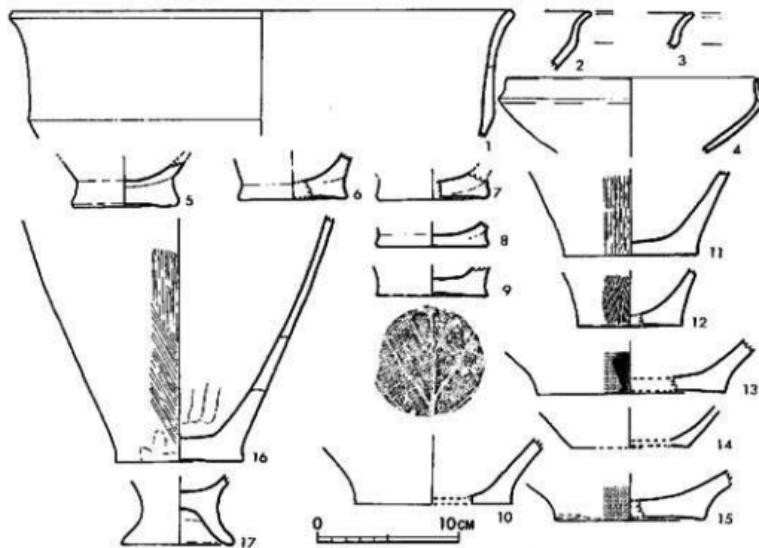


Fig. 1-10 G-6a地点粗砂層出土の土器 (5)

れる。口径23.4cm、若干ゆがんではいるが、最大高45.1cm、1・8、2は、短く外反する口縁部をもつ。外面および内面口縁部は丹塗り磨研。内面は刷毛目調整や指の押圧調整がみられる。1・8、3も外面および、内面口縁部は丹塗り磨研。1・8、4も一部に丹焼がみられる。

1・8、5は、口縁部打ち欠きの壺で、外面は範磨研。内面は指のなで上げ、押圧調整痕がみられる。1・8、6は外面丹塗り磨研。内面胴部には刷毛目調整がみられる。1・8、1は外面範磨研の土器で、黒色を呈する。肩部には二条の沈線がみられる。1・8、2は外面丹塗り磨研。内面は指のなで上げ調整および刷毛目調整。1・8、18は二条の横位沈線の下に三本単位の複線八字形文を施す。1・8、19は三本の横位沈線が肩部を巡る。以上の上器は前期の壺であるが、1・7、6～8、1・8、18が板付I式、他は板付II式であろう。1・8、3は砂層上部の出土で、この層唯一の中前期前葉の土器である。肩部以下の破片であるが二条の三角突帯を巡らしている。

底部 (Fig 1・6, 20, 1・10, 5-17)、1・8, 20, 1・10, 10, 13-15が壺、他は甕の底部であろう。1・8, 20は底部に棒状のもので浅く沈線状のものが描かれる。前期のものであろう。1・10, 5-8は夜臼式の底部か。1・10, 8は木葉痕をもつ。1・10, 13, 16は外面丹塗り。1・10, 13は刷毛目調整。1・10, 11, 16にも外面に刷毛目調整。1・10, 17は高台状の脚がつく。いずれも前期のものであろう。

(沢草匠)

出土石器 (Fig 1・11, 12)

蛤刃石斧 (Fig 1・11, 1-3) 1は玄武岩製で敲打整形されており、部分的に研磨痕がみ

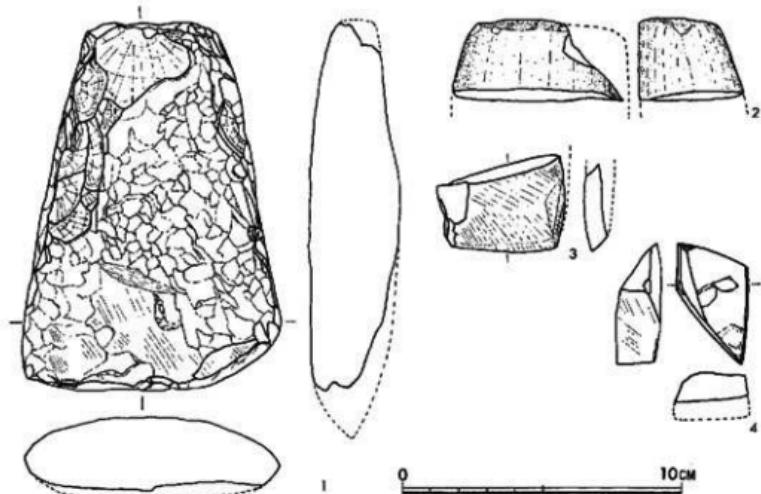


Fig. 1-11 G-6a地点出土の石器 (I)

られるが、刃部は欠損している。2は今山産出玄武岩製で敲打整形後入念な研磨が加えられている。大型峪刀石斧の頭部である。3も玄武岩製であるが、前記の2点とは石質が異なっている。刃部片。1・3は客土層。2は粗砂層出土。

柱状片刃石斧 (Fig. 1-11, 4) 客土層出土で、灰白色泥岩を素材として、方柱状に整形し、入念に研磨が加えられている。50°の角度をもつ刃部片である。

石庖丁 (Fig. 1・12, 12-16) 12は雲母片岩製で、背部がほぼ直線的な半月形石庖丁である。裏は節理のままであるが、刃部は表裏から研磨しており、表面背部も研磨されている。完形ではないが未穿孔と考えられる。13は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の半月形石庖丁で、表面は剥落しているが、背部・裏面は研磨されている。14は石英質シルト岩製で、両刃の分厚い石庖丁で、表裏・刃部・背部とも研磨されており、穿孔は表裏から行なわれている。15は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で、表から穿孔が試みられているが貫通していない。風化が激しく研磨が不明瞭であり未製品と考えられる。16は剥落が激しく形状は分らない。13-16は客土層、12は粗砂層出土。

石鏃 (Fig. 1・12, 5-7) 5・6とも良質の黒曜石製剝片を素材として、表裏とも入念な剥離加工が加えられており、基部はやや内湾している。5は重さ0.3gで右脚部が、6は1.7gで先端部がそれぞれ欠損している。7は良質の黒曜石製剝片を素材として入念に剥離加工が加えられ台形に整えられている異形石鏃で、基部の一部が欠損している。重さ0.72g。いずれも粗砂層出土である。

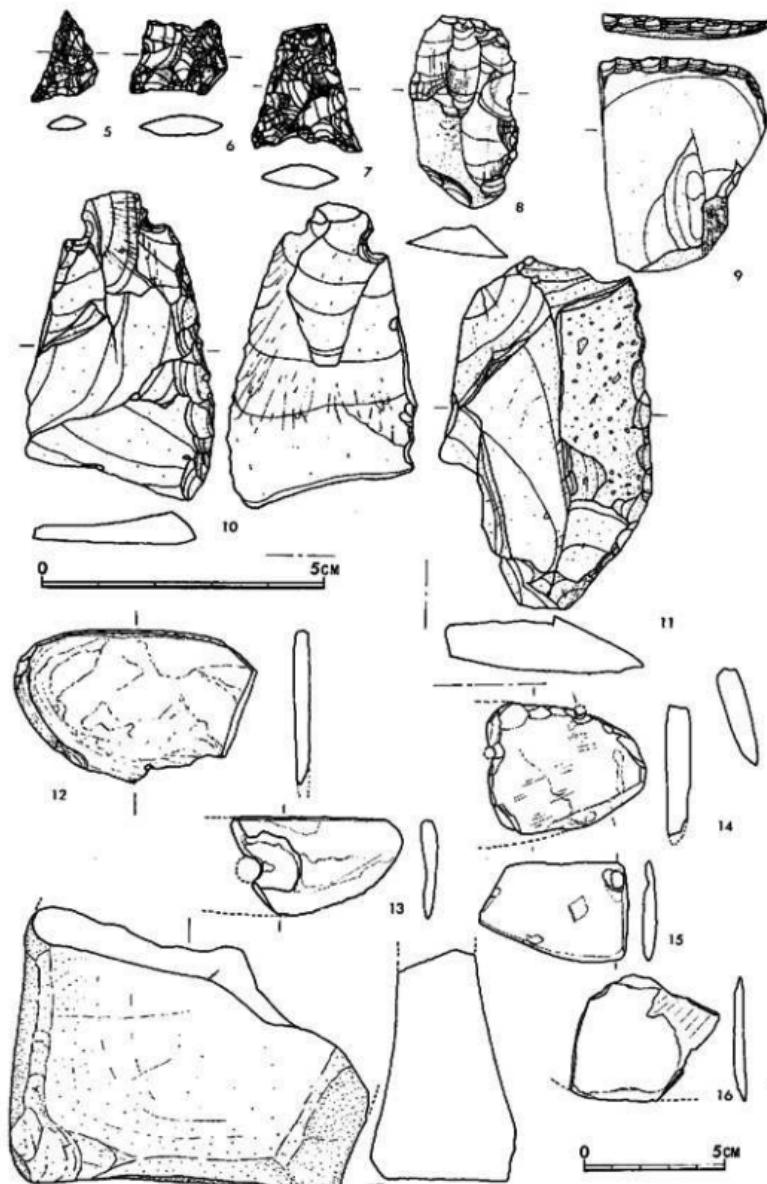


Fig. 1-12 G-6a地点出土の石器 (2)

スクレイパー (Fig 1・12, 9~11) 8は古銅輝石安山岩製の剥片の先端部に表面から刃渡し状の加工を加え刃部をつくり出している搔器である。10は玄武岩製の縦長剥片を素材として、基部に両縁近から抉りを入れてつまみをつくり出し、片方の縁辺に二次加工を加えている縦形の石匙である。11は古銅輝石安山岩製の剥片を素材として、自然皮が残る縁辺に表裏とも二次加工を加え刃部をつくり出している削器である。8は客土層、10・11は粗砂層出土である。

剥片 (Fig 1・12, 8) 良質の黒曜石製の縦長剥片であるが全体的に磨耗している。粗砂層出土。

石皿 (Fig 1・12, 17) 細粒砂岩製で、表裏とも内弯しており、両面を石皿として使用したと考えられる。褐色粗砂層出土。

他に客土層から玄武岩製の蛤刃石斧の刃部片・体部片・石英粗面岩製の凹石・中粒砂岩性の砥石が出土している。また粗砂層からは玄武岩製の蛤刃石斧の刃部片と石鏃片が出土している。

粗砂層は前期の包含層であり、蛤刃石斧2点、半月形石庵丁1点、石鏃4点、石匙・削器各1点、石皿1点の石器、剥片・石核・削片が出土しており、同一時期のものといえよう。今山産出玄武岩製大型蛤刃石斧の出土や、雲母片岩製の石庵丁の出土は、石器原材利用の面から興味がもたれる。

(山口謙治)

III まとめ

G-6a地点は前述したように当初予想された台地端や溝などの遺構、木器類などは存在せず、弥生時代中期後葉～後期初頭を中心とした上部の客土層と、弥生時代前期の包含層である粗砂層が確認されたにとどまった。この両層のうち上部の客土層は台地西端の水田部ではどこでも存在していると予想され、その中に、土師器、須恵器、青磁器、瓦などを少数ではあるが含むことにより、弥生時代よりかなり遅れる時期に板付台地のどこかから持つて来たものと推定される（後藤・沢1976）。下部の粗砂層は昭和46年以降の調査で、第II区G-25トレンチ、G-26トレンチですでに前期の包含層であることが確認されていた。しかしながら、G-25トレンチはその上部に弥生中期の木器類を包含する溝があり、粗砂層まで調査するに至っていない。G-26トレンチはこの地が道路敷地であるため八女粘土層まで完掘したが、範囲がせまく、粗砂層幅より、口縁内面下に丹塗りの痕跡のある光形の壺1個が出土している（後藤・沢1976）。この壺の今回出土した上器群との距離は10m内外に過ぎない。このことからもG-26トレンチ粗砂層出土の壺と、G-6a地点粗砂層出土の一群の土器の関連が推測される。

この一群の土器の性格であるが、上部出土の中期初頭を除いては、夜臼式から板付II式まで存在するが、前述のG-26トレンチの壺も含めて、完形品3個はいずれも板付II式の壺であり、しかしそのうち2個は丹塗りであり、他の1個は口縁部を打ち欠いている。その他丹塗りの壺が多いこと、台地端近くに位置することなどからまず祭祀的な意味あいが一応考えられる。もし祭祀的なものならば台地端を流れる川に対するものであろうか。ただ、G-26トレンチを含めても調査範囲がせまく、結論は一応保留して置きたい。

板付遺跡の環溝はこれまでの調査で、夜白・板付Ⅰ式の時期に掘り込まれ、板付Ⅱ式の時期に埋まりはじめ、中期の段階ではほとんど埋まっていたことが確認されている（森・岡崎1961、下條1970）。また本年度の環溝南側の県道予定地の調査により中期初頭の住居址が環溝南西側の台地端近くに存在することが確認された（沢・横山1977）。このことから、もし環溝が前期の住居址群を囲んでいると仮定するならば、中期初頭においてはすでに環溝はその用途をなしていないことになる。この前期末～中期初頭の時期に台地近くの小河川が埋没してしまったということは、あるいは何か関連のあることかも知れない。今後の調査の課題でもある。

【参考文献】

- 後藤直・沢賀臣（1976）板付——市宮住宅建設にともなう発掘調査報告書 1971～1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集
下條信行（1970）福岡市板付遺跡調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集
森貞次郎・岡崎敬（1961）福岡県板付遺跡 日本文部文化の生成

第2章 G・H-5 地点

I 調査概要

G・H-5 地点は板付丘陵の北部にあたり、昨年度調査されたG-5a地点（山口1976）の北側約20mに隣接する。同地点では前期末～中期中葉に亘る甕棺墓、木棺墓などの弥生墳墓や前期初頭の土器類を出土する竪穴造構といった生活址が検出されており、特に墓地の拡がりが予想された。また更に北側約10mの地点では小学校建設に伴う事前調査（後藤・沢1976）で前期前葉～末に営まれた袋状竪穴や前期末～中期中葉に亘る甕棺墓・木棺墓が多数見付かっている。調査はこれらの地点との関連を明らかにすべく行なわれた。調査は排上の移動との関連で南北を中心に行ない、北側にはトレンチをのばした。この結果各時期の造構の営まれた赤褐色ローム（鳥栖ローム）の地山は南端部（標高8m）を最高点とし、北西～北東部に緩く傾斜していることが知られ、トレンチ北端部分との間に約1mの比高を有する。土層の堆積はおおむね土層図（Fig. 2・2）の通りであるが、北西～北東部に従って青灰色ロームに漸移している。第19層の黒色粘質土層は弥生前期の包含層であって、多量の豊富な遺物を出土している。

検出した造構は竪穴造構8（第1～8号竪穴）、溝状造構3（第1～3号溝）、小竪穴群などである。竪穴造構では第1・3・4・8号が弥生前期遺物を出土し、第2号はG-5a地点において前期前葉の竪穴造構に切られた1号上塙墓に類似している。また第5・6号は前期の黒色粘質土層下に営まれ、前期のものであろう。第7号は弥生期のものと考えられる。次に溝状造構では第1号が中期中葉の上器類を出土するが性格は不明。第2号は北東から南西に向って走り、台地際を画する感がある。前期包含層を切る前期溝である。第3号は現代まで灌漑用として使用されたもので弥生～近世陶磁器など複雑な遺物が出土した。次に柱穴と考えられる小竪穴群は中央部～東部にかけて多数が検出され、内部より弥生前期～土師質土器の出土があった。これらは各時期の生活空間として利用された可能性は十分であるが具体的な造構としてのまとまりを読み得なかった。以下出土造構・遺物について詳述することにする。

（横山邦総）

II 竪穴造構

1. 第1号竪穴（Fig. 2・3）

造構は本調査区の南側に位置する。造構の北側で一つの竪穴と切り合っているが、平面は長軸0.7m、短軸0.6mの梢円形をなしている。深さ15cmで底はほぼ平坦である。本造構の時期は遺物より弥生時代前期と考えられる。伴出遺物は、土器のみ20片数である。1～3・8は、夜白式甕の口縁部破片で、同一個体と思われる。刻目突帯は口縁部より下につけられる。内外面とも横位の条痕調整がみられる。胎土に石英粒を含み、焼成は悪くない。暗褐色から暗赤褐色を呈す。4も刻目突帯をもつ夜白式甕の口縁部破片である。刻目は幅7mm程で、中央部に棱が通っている。胎土に砂の混入少なく焼成は堅密。黒色を呈する。5は直立ぎみの口縁部で、口

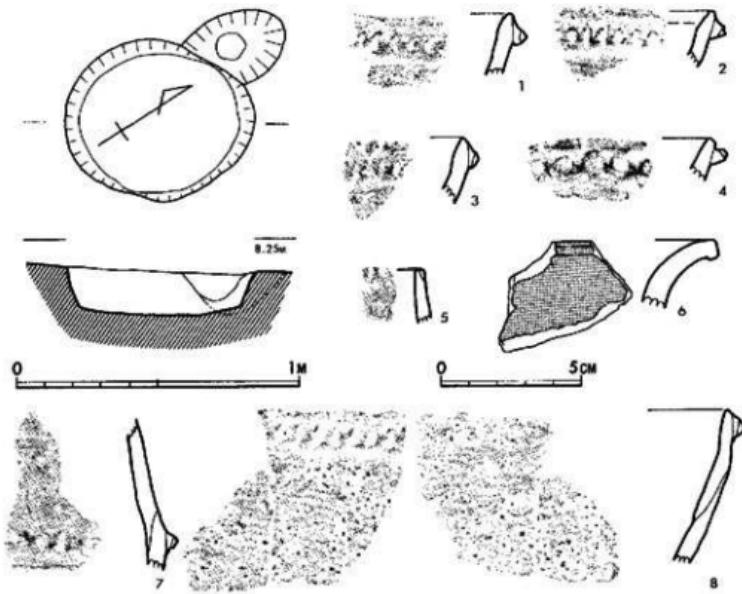


Fig. 2-3 第1号竪穴実測図および出土遺物実測図

唇部に鋭利な工具で刻目を施している。焼成は悪くない。暗褐色を呈する。7は夜臼式壺の胴部破片である。突帯の刻目は、幅広い丸味をもった棒状のもので押えられている。外面に横位条痕がみられる。胎土に砂の混入少なく、焼成は悪くない。色調は外面が暗黄褐色、内面が褐色を呈する。6は弥生式前期の壺の口縁部である、器面は横位の範磨研後に丹が塗られている。胎土に若干の砂粒を含むが、焼成は良い。

2. 第2号竪穴 (Fig. 2-4)

造構は第1号竪穴の南側約1mに位置する。平面図は長軸1.5m、短軸1.2mの不整圓形をなしている。底部では四隅の輪郭が明確で、約0.9m×0.7mの隅丸長方形をなしている。底面は平坦である。深さは約1mである。壁面は特に下部の八女粘土層で剥落が激しく原形を保っていないが、G-5a地点の第1号土器と形状が酷似している（山口1976）。しかし、本造構の性格を上埴器とは明確にできなかった。伴出土器は埋土の上面のみから、夜臼式土器片44、弥生式土器片44、土師器片6、須恵器片1、黒曜石の石核1、剝片3、削片2、頁岩の石器破片1を出土した。中位以下からは全く遺物が出土せず、造構の時期は明らかではない。

出土遺物 1は夜臼式壺の口縁部破片である。刻目突帯は口縁端よりやや下につけられ、刻目は非常に浅い。外面には突帯下に横位条痕がみられるが、器面の荒れが非常にはげしい。

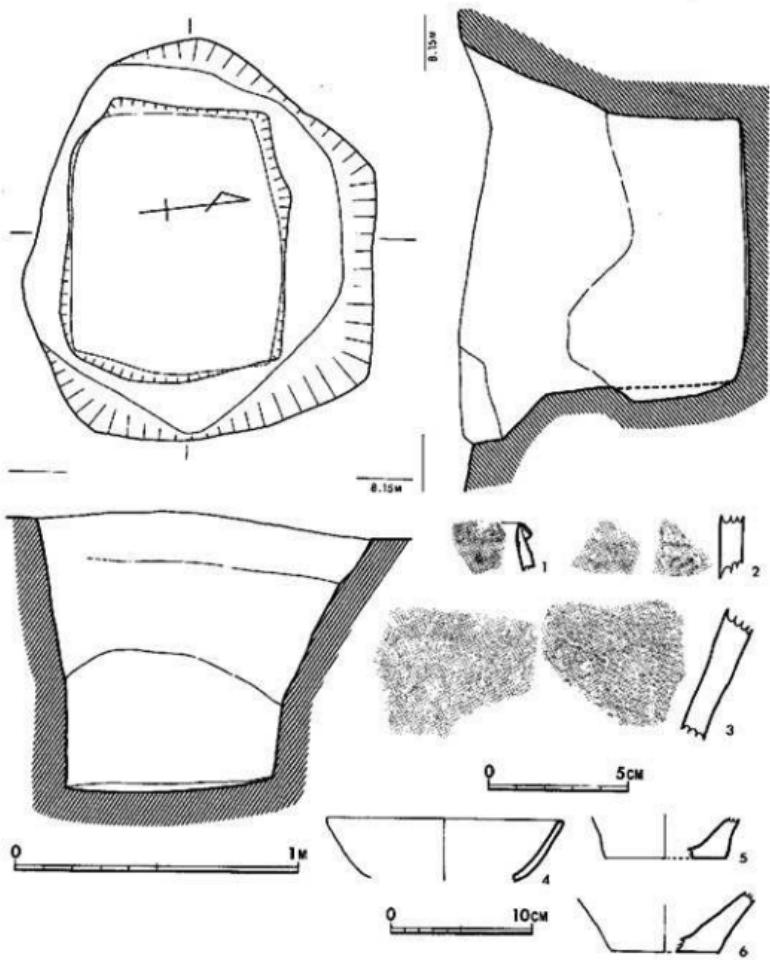


Fig. 2・4 第2号竪穴実測図および出土遺物実測図

胎土に砂を含み、焼成は良くない。色調は、暗褐色を呈する。2は須恵器の胴部破片である。内面は暗灰色を呈し、青海波文がみられる。外面は暗褐色を呈し、正方形格子目文がみられる。胎土・焼成ともに良好である。3は瓦器質土器片で、内面は暗灰色を呈し、幅1.5cm程度の棒状のもので横なで調整を施している。外面は黒褐色を呈し、内面と同様の工具で縫になでている。胎土・焼成ともに良好である。4は楕形上師質土器で、外開きの器壁は、胴下部でやや内へ折れる。器面の荒れが激しいが、内面は若干滑面を保っている。色調は、内外面ともに明灰色を

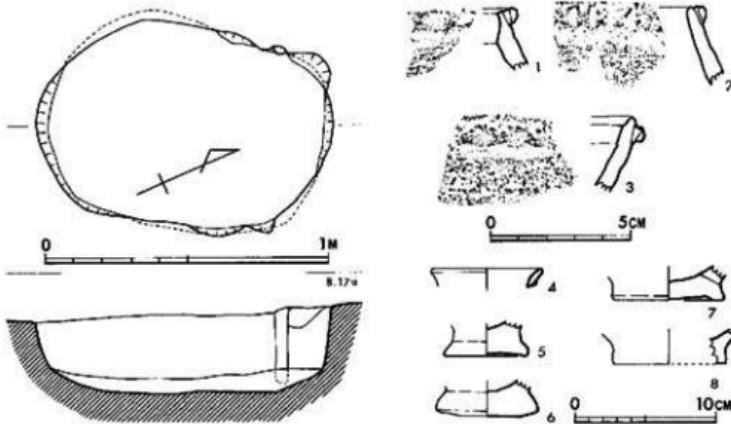


Fig. 2・5 第3号竪穴実測図および出土遺物実測図

呈する。胎土に砂の混入は少なく、焼成はあまり良くない。なお口径は17cmを測る。5・6は弥生式土器の底部破片である。5は褐色を呈し、器面は両面ともに非常に磨滅している。胎土に砂の混入多く、焼成はよくない。6は内面黒～灰黒色、外面褐～赤褐色を呈する。両面ともに器面の荒れが激しい。胎土に砂の混入多く、焼成はあまりよくない。

(吉田悟)

1 第3号竪穴 (Fig. 2・5)

3号は西側小竪穴群中に営まれ、長幅が105×70cm程度の長円形の竪穴で、深さは約30cmを残している。発掘時は袋状を呈していたが乾燥のため剥落した。第19層にあたる黒色粘質土を覆土とする。覆土内からは甕口縁3・底部2、壺口縁1・底部2など小量の遺物が出土した。

出土遺物 1～3は夜白式土器甕である。1は外面灰褐色で条痕あるいは横なで調整。内面は褐色。強い横なでで口縁下が窪んでいる。刻目は幅ひろく深い。2は外面赤褐色で煤付着し、横なで調整。内面褐色を呈する。刻目は深く端正である。3は内外面ともに明褐色で、器面の荒れがはげしい。刻目は斜めに押切る様に付けられる。これらはいずれも胎土に石英砂などの混入物多く、焼成は余り良くない。4は小型壺口縁。内外面ともに暗褐色を呈し、外面横位の窪みがき調整。胎土は非常に精成され、焼成良好。口径8cm。5・6は端部が断面三角状に張り出す特徴を有する底部。夜白式土器である。5は外面胴部赤褐色、同底部暗褐色。やや上げ底となり、指で同心円状になで回して調整。底径6cm。6は端部が反り上る。外面暗褐色、内面黒色を呈する。底径7.2cm。いずれも胎土に石英砂の混入は少なく、焼成は不良。7は内外面ともに褐色を呈し、若干上げ底。器面の荒れが激しい。底径8cm。8は壺底部であろう。円盤

貼付底部であるが、明確な境を有しない。剥落が激しい。内外面ともに褐色、胎上に石英砂の混入多く、焼成は不良。底径 8 cm。

以上の出土遺物には明らかな板付 I 式以降の遺物を含まないが、一応時期的には弥生前期と考えられる。

4. 第4・7号竪穴 (Fig. 2・6)

第4号は調査区西隅に位置し、第6号竪穴に隣接して営まれ長幅が95×80cm程度の長円形竪穴で、深さ35cm前後を残している。発掘時は袋状を呈したが乾燥のため剥落した。覆土は第3

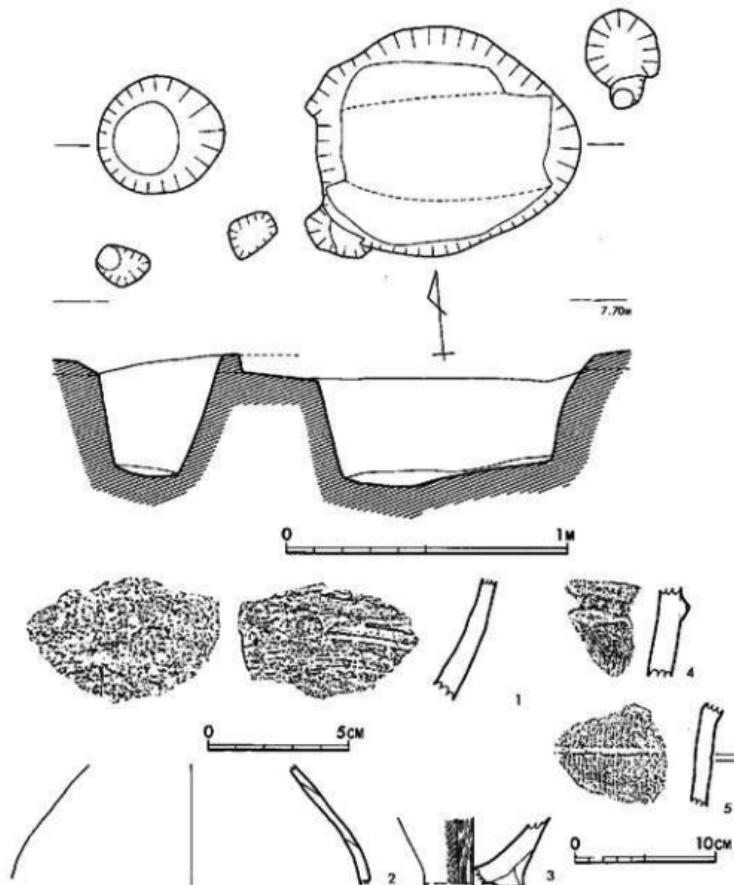


Fig. 2・6 第4・7号 竪穴実測図および出土遺物実測図

号と同様の黒色粘質土である。床面付近には黒色灰層が堆積していたが、壁面その他が火に遭った痕跡はない。また出土遺物は夜白、弥生式土器甕、壺の細片、碟類が出土している。位置の上からは第5あるいは第6号に付設されたかの様である。

出土遺物（1～3） 1は夜白式土器である。内外面ともに暗褐色。外面横位条痕。内面横なで調整で残滓の黒色炭化物が厚く付着。胎土に石英砂の混入なし、焼成不良。2は壺部、外面は黒～黒褐色を呈し、非常に丁寧な横範磨きで光沢を放っている。内面は黒色。甕状のもので何回も横になで調整している。器壁は灰黒色。胎土には石英細砂を若干混入しているが、非常に精成され、焼成は堅緻。夜白式土器か。3は甕底部である。若干上げ底となる。外面全体褐色で同底部は暗褐色を呈する。強い継刷毛目調整。内面は黒色で残滓かと思われる炭化物付着。底径7cm。前期甕であろう。以上出土遺物から本竪穴は弥生前期と考えられる。

第7号は小型の円形竪穴であり、径約45cm、深さ40cmを測る。覆土は灰褐色粗砂で上部に磨滅の激しい夜白、弥生式土器細片が出土した。

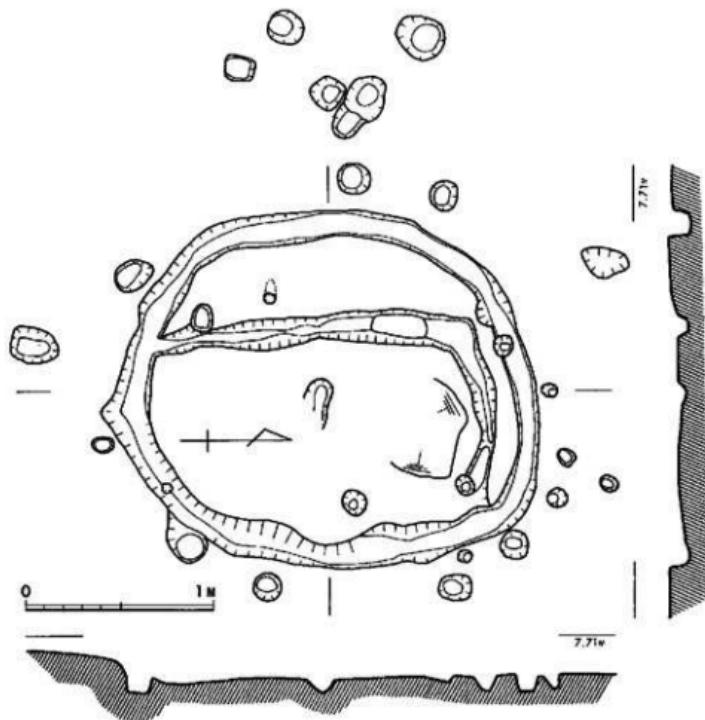


Fig. 2・7 第5号竪穴実測図

出土遺物（4・5） 4は夜白式土器表か。胴肩折部である。外面は褐一淡赤褐色で、突起部の刻目は非常に浅く、約5mm間隔である。内面赤褐色。胎上に石英細砂の混入多く、焼成は良好。5は表破片。口縁下に一条の沈線を付したものであろう。内外面ともに褐色を呈し、外面は粗い縱刷毛目調整。胎土に石英砂の混入多し、焼成良好。板付II式である。

以上出土遺物の状態からこの竪穴は前期後半以降であろう。

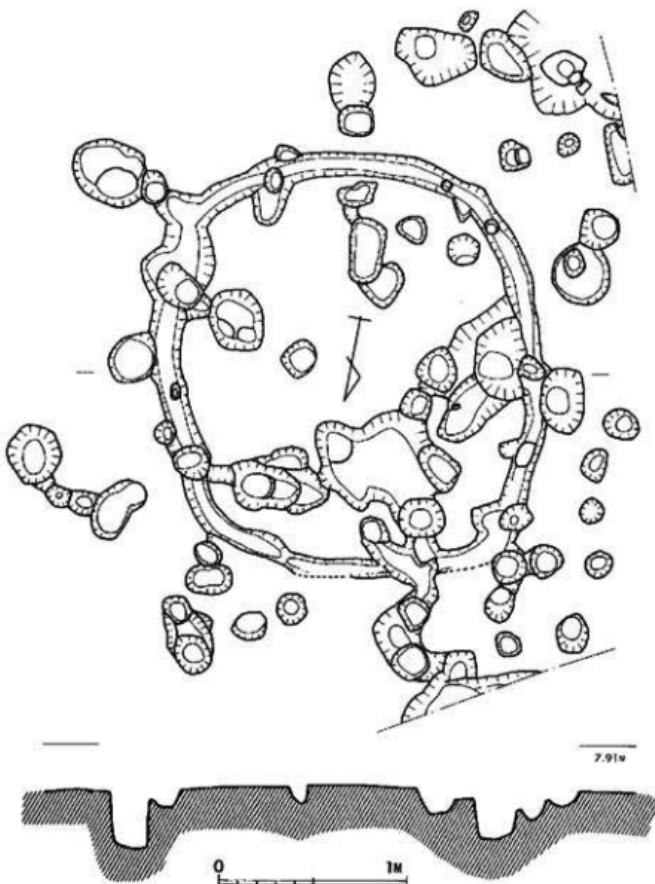


Fig. 2-8 第6号竪穴実測図

5. 第5・6号竪穴 (Fig. 2・7, 8)

5・6号竪穴は西側端に隣接して営まれ、いずれも前期包含層である黒色粘質土層中に存在する。直接共伴する遺物は見出しえなかった。第6号竪穴では白口縁破片が1個見付かったが調査中に粉失した。

第5号は径が 2.3×1.4 mを測る不整円形の竪穴である。幅15~20cm、深さ約10cmの溝が廻っており、周辺部には径10~15cm程度の柱穴と考えられる小竪穴11個が確認できる。また長軸よりやや西側にこの溝と連絡して「コ」字形に幅10~15cm、深さ10cm弱の小溝が付設されている。床面は地山に沿って東、北側に緩く傾斜しており、北側に片寄って浅い窪みがみられる以外は、特に別の施設はない。また灰層などは検出されなかった。

第6号も同様の竪穴である。径 2.3×2.1 mの不整円形竪穴で、幅15~20cm、深さ約10cmの浅い溝が廻る。周辺部には径15~20cmを測る柱穴と考えられる小竪穴が5~6個見出される。内部は不整なピット類が重複しているが、柱穴と考えられるもの以外は別に付属施設を想定させるものはない。床面は地山に従って北側に傾斜している。

以上第5・6号竪穴は規模の点などからすれば倉庫的な性格を有したものかと考えられる。

6. 第8号竪穴 (Fig. 2・9)

8号は5・6号の北側に隣接して営まれており、位置の上からは造構分布の周縁部にあたると考えられ、北側にのばしたトレンチでは溝状造構以外は検出できない。竪穴は平面が長径75、短径60cmの不整形をなし、深さ約20cmを残している。南壁に径10cmの小ピットがあるが、造構とは関連ないだろう。覆土は黒色粘質土で上部から灰口、弥生式土器破片が若干出土している。

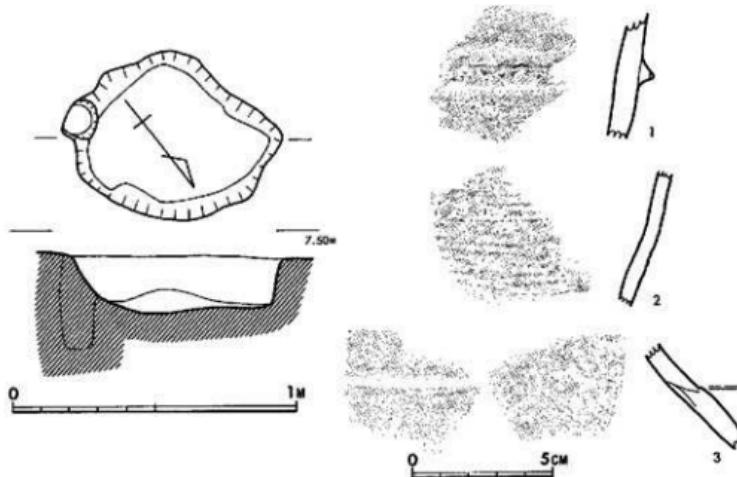


Fig. 2・9 第8号竪穴実測図および出土遺物実測図

出土遺物（1～3） 1は甕底部。突帯は鋭く刻目は細かく端整である。外面褐色、内面暗褐色で突帯上下は強い横なで。また突帯下方には擬刷毛目が痕跡的に残る。胎土に石英砂の混入多く、焼成は良い。前期の所産か。2は夜臼式甕頭部、外面には粗い糸痕調整で模が厚く付着。内面は横なで。いずれも暗褐色を呈する。胎土に石英砂の混入なく、焼成は良好。3は甕頭部。内外面ともに褐色。外面は横位籠崩きで境界部は小さく段状となっている。また内面は粗い刷毛状のものでなであげている。胎土精成され、焼成良好、前期の所産か。

以上出土遺物から本竪穴は弥生前期のものと考えられる。

(横山)

III 溝状造構

1. 第1号溝 (Fig. 2・10)

第1号溝は調査区の中央わずか南西寄りに存在する。平面形は、西南方から東北方へ南に若干張り出す弧状を呈する。長さ約10.5m、最大幅約1.7mで、現存の最深部は約0.5mである。底は一定ではなく、幾つかのピットや段がつけられ、北東部では徐々に浅くなる。西南部は急に立ち上がるが、この地点の底には木片が遺存していた。中央部付近からは、高坏脚部、器台などが出土。また中央よりわずかに北東よりの斜面には高坏の坏部、そこからさらに1m以上北側には、その脚部が、埋土の上部から出土した。

(出土遺物) (Fig. 2・11)

〔土器〕 (1～12)

高坏 (1・2) 1は脚の中央部を一部欠くがほぼ完形である。口縁部はいわゆる鋸状口縁を呈する。坏と脚の接合部には刷毛目がみられる。脚部は細く長いもので、坏との接合部下には一条の三角突帯が巡る。脚部の内部にはしづら痕がみられる。器面の磨滅が激しいために現存部では確認できないが、本來は丹塗り磨研の土器であろう。推定高28.9cm、口径26cm、脚幅20cm。2は脚部のみで、外面は機に籠で磨研し、丹塗り。内面にはしづら痕がみられる。

器台 (3) 脚部を欠く。外面縦刷毛目調整。内面はしづら痕が残り、くびれ部以下に粗い縦刷毛目調整。口縁内面は横刷毛目調整。口径10.6cm。

甕 (4・5) ともに頭部以下の破片である。4は頭部に一条の三角突帯をもつ。ともに外面丹塗り磨研。5は無頭甕と考えられる。

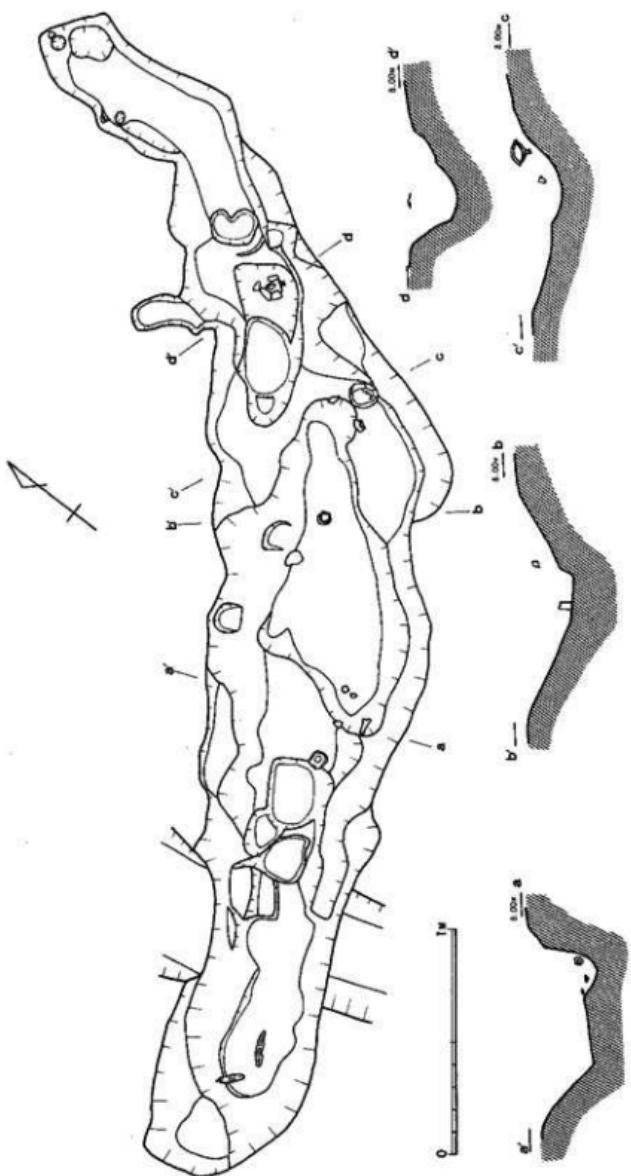
甕 (6～9) 6・7はともに逆「L」字状口縁をもつ丹塗り磨研の甕であるが、6の内面は丹を塗らない。6は口縁下に一条の「M」字状突帯を巡らす。ともに口縁外唇に刻目をもつが、6の外端は若干下がるのに対し、7は水平に張り出す。8・9は「T」字状口縁の内側張り出しが強い大型の甕の口縁部で甕棺の破片と考えられる。

底部 (10～12) 10・11は甕、12は甕の底部である。11は上げ底を呈し、外面丹塗り磨研。12も上げ底を呈し、外面縦刷毛目調整。

〔石器〕 (13・14)

13は打製石鎌である。良質の黒曜石を使用し、表裏とも入念な剥離加工が加えられる。先端部から左端の一部を欠く。基部はわずかに抉りが入る。重さ0.6g+α。14は柱状片刃石斧と思

Fig. 2·10 №1 分類圖



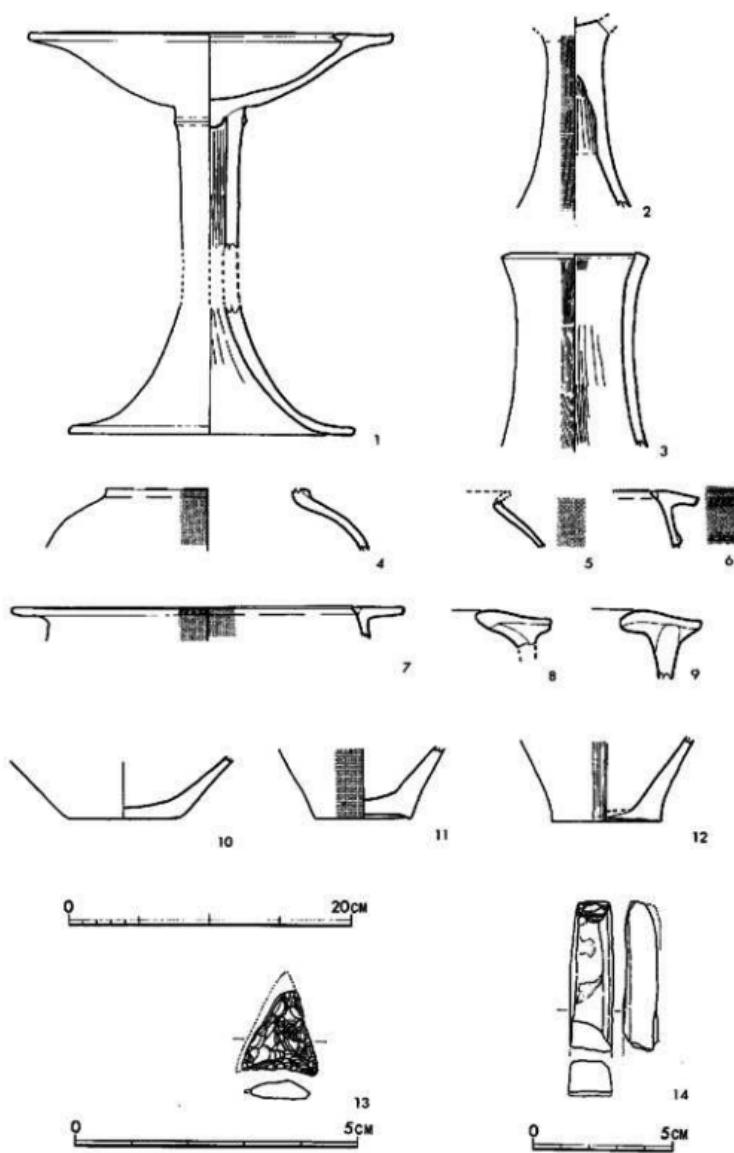


Fig. 2-11 第1号墓出土遗物实测图

われるが刃部および、裏面を欠く。断面台形に仕上げられており、灰白色粘板岩を使用。重さ
20.4 g + α。

以上のように第1号溝出土の遺物はほとんどが中期中葉のものであり、この遺構もその時期
と思われるが、性格は不明である。
(説)

2. 第2号溝 (Fig. 2・12)

2号溝は調査区北西部に位置し、ほぼ標高7.5mのところを北東から南西部に向って走っており、弥生前期包含層である黒色粘質土層を切って當まれている。調査できたのは長さ4.3m程である。溝は幅1.6~1.8m、深さ30cm余の幅ひらく、浅いものである。南側部分は緩い段状をなしている。また遺構分布の上でこの溝状遺構以北では全く柱穴すら見出すことが出来ない事か

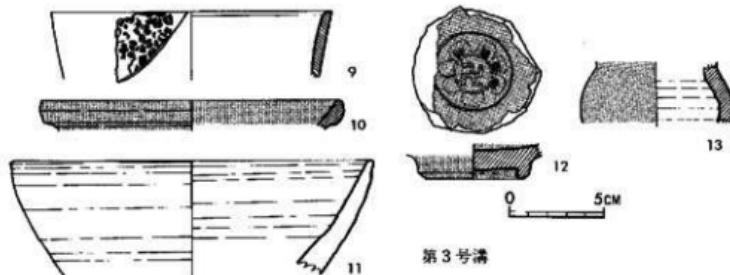
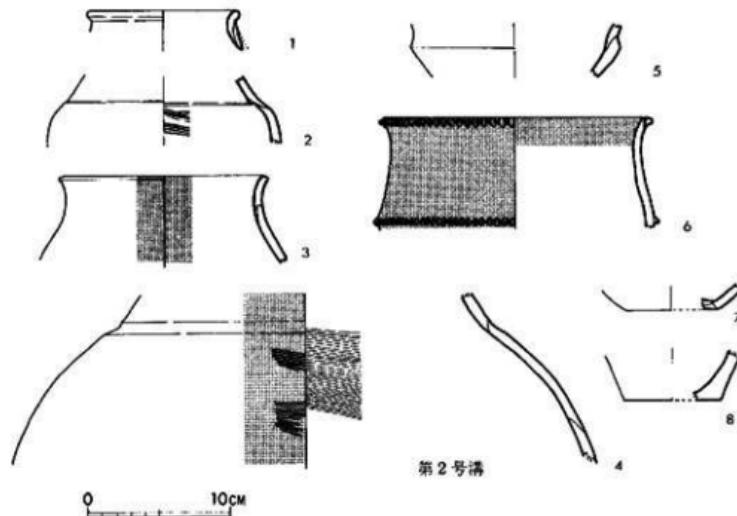


Fig. 2・12 第2・3号溝出土遺物実測図

ら実質的に生活面を画する性格のものと考えられる。覆土は黑色粘質、砂質土の互層で上層部において夜白式土器甕、壺、高壺、弥生式上器甕、壺破片、剥片類が出土した。図に供し得るものは以下で殆どである。

出土遺物（1～8）

1は端部が丸味をもって小さく外反する口縁を有する壺。内外面黒色を呈し、横位の丁寧な範磨き調整。胎土は非常に精良で石英微砂を少量含む。焼成は堅緻。口径13cm。2は肩部の張りが大きく、内面は接合時の明瞭な段を有する壺。また頸部下端に細沈線（？）様のものが一条廻る。外面灰褐色を呈し、丁寧な横範磨きで光沢を放っている。内面は黒色で、胴部に条痕に似た横位調整をした後に横なで、胎土に石英砂の混入少なく、焼成良好。3は緩く外反する口縁部を有する壺。内外面とも黒色を呈し、丹塗り。いずれも丁寧な横範磨き調整。胎土に石英微砂を若干含み、焼成は非常に良好。口径14.8cm。以上は夜白式土器と考えられる。4は大型壺、外面頸部以上は黒色、以下は褐色を呈し、丹塗り。また境界部は強い横範磨きで緩く深んでいる。胴部外面は粗い横刷毛目調整後に横位の範磨き。同内面は同様の粗い横刷毛目調整。胎土には石英砂の混入多く、焼成良好、頸下端部径26cm。5は高壺壺部か、内外面ともに暗黄褐色を呈する。外面は条痕に似た横位調整。内面は横なで調整。胎土に石英細砂の混入多く、焼成良好。夜白式上器である。6は夜白式土器甕。胴部突帯より内傾する胴上部を有し、口縁は小さく外反している。外面と内面上部は丹塗りで下部は褐色を呈する。またいずれも横なで調整。突帯部の刻みは幅ひろく端正である。胎土に石英砂の混入はなく、焼成良好。口径19.4cm。7・8は底部、7は外面灰褐～淡灰色、内面暗褐色でなで調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。底径6.4cm。8は甕底部か、外面の体部暗赤褐色、底部褐色で、内面は黒～褐色。胎土に石英砂の混入多し、焼成不良。底径7cm。

以上の出土遺物から2の溝は弥生前期と考えられる。

1. 第3号溝（Fig. 2・12, 13）

3号溝は調査区西側を南東から北西に走る幅約1.5mの溝である。同溝は近年（土地改良以前）まで使用された灌漑用水路であり、南側では縁辺部に沿って径3～5cm程度の小杭が多数打込まれている。内部には弥生式土器、近世以降の陶磁器類など複多な遺物が混在していたが、最下底部には磁器類が出土した。

出土遺物（Fig. 2・12）

9は磁器碗。外面には白色地に深緑色釉で六弁の花文を散らしている。また口唇上面は削りを加えて露胎となっている。口径15cm、溝底出土。10は口縁が折返して玉縁状となる白磁器碗、外面には一部に貫入がみられる。口径16cm。11は須恵器甕塊、外面明灰色、内

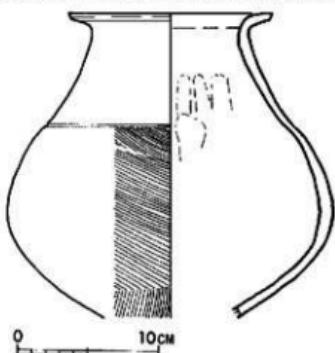


Fig. 2・13 第3号溝内出土弥生式上器実測図

面暗灰色を呈し、いずれも埴輪使用の横なで調整。胎上に砂の混入は少なく、焼成は良好。口径19.4cm。12は青磁器碗底部。底部外面を除く全面にくすんだ青色釉を施す。内面見込み中央には7~8枚の弁からなる花文で中心に「卍」印を配した文様が付されている。また底部端は削りを加えて、稜を有している。底径5.4cm、溝底出土。13は小型壺か、外面に草色を帯びた暗褐色釉を施し細かい貫入が多い。内面は調整痕が著しく暗褐色で釉がかからない。(横山)

第3号溝内弥生式土器 (Fig. 2・13)

板付II式の壺形土器である。口縁部が外反し、頸部の内側には、緩い稜がつく。肩部の接合部では、外側に段がつく。外面の胴部の中位には、粗い斜刷毛目が、底部近くには、粗い縱刷毛目調整がみられる。内面の肩部には、指圧痕がみられる。胎土に砂粒の混入が多く、焼成は、良好である。色調は、内外面ともに褐色を呈する。外面では、肩部に模の付着が、胴下部に黒斑がみられる。全体的に磨滅が激しく、底部は、欠損している。(吉田)

IV 小豎穴群

総数267個の小豎穴群を確認した。遺物を出土したものは42個であり、弥生時代38、古墳時代4の内訳で、このうち、63と232は夜臼式のものと考えられる。台地は削平を受けているが、現状では北側にゆるやかに傾斜している。個々の小豎穴については、詳細な原状確認は困難である。北東部において、振立柱遺構らしきものが考えられる。1つは、216、252、253、259と

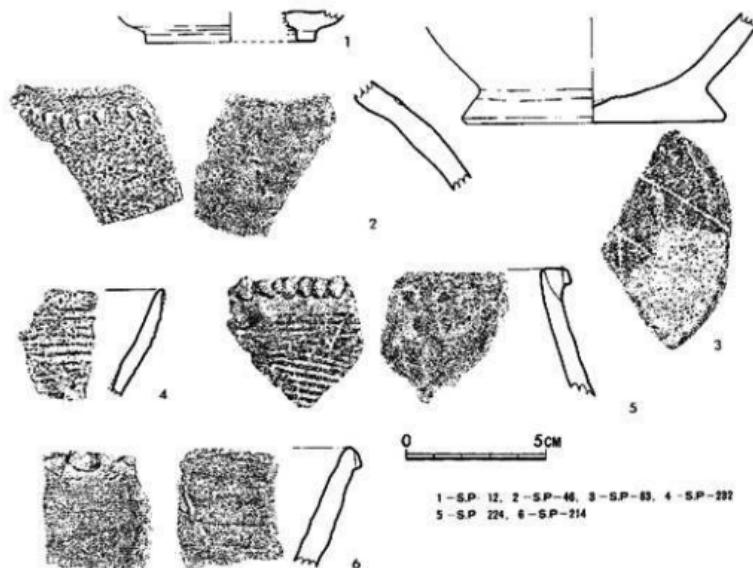


Fig. 2・14 小豎穴出土遺物実測図

の小堅穴がそれにあたり、1辺が2.0mで、他辺は2.3mであり、253、258には柱根らしきものを認める。さらに東側では、254、255、256、257、258の一組がある。1辺2mの方形の1間1間のものが考えられ、4隅のものは柱根らしきものを残し、255は礫を出土する。255と257の中間に位置する、256も、何らかの意味をもつものと思われる。その他には、明確に、柱根を認められる262がある。これらのものは、原状において、北西側に、柱穴と思われるものがびると考えられるが、現状では、それらの規模、時期、性格についてはわからぬ。他の小堅穴については表に付す。

(原)

出土遺物 (Fig. 2・14)

小堅穴より出土した上器類はいずれも細片が多く、図に供し得るものは僅かである。

1は低い高台を有する瓦器質土器壇、器面の崩滅が激しい。外面暗灰色、内面白灰色、胎土に砂粒の混入は殆どなく、焼成は脆弱。底径6cm。No.12出土。2は頸部に刻目を施した須恵器。外面淡灰色、内面白灰色で横なで調整。No.48出土。3は端部が断面三角状に張出す底部。外面褐色・赤褐色、内面褐色を呈する。底部に二葉以上の木葉痕を残す。胎土に石英砂の混入が非常に多く、焼成は良好。夜白式土器である。底径9cm。No.63出土。4は甕。外面暗赤褐色で条痕調整。内面褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。夜白式土器である。No.232出土。5も甕。内外面ともに丹塗りか。口縁の刻目は深く端正である。外面は条痕調整後に口縁下を横なで。胎土に石英砂の混入多く、焼成は悪くない、夜白式土器である。No.224出土。6も甕。内外面ともに丹塗色を呈する。外面は横条痕調整後に範状工具で幅ひろい横なでを加える。煤付着。内面は範状工具で横なで。胎土に石英砂の混入多く、焼成は堅緻。夜白式土器である。No.224出土。

(横山)

Tab. 2・1 G・H-5 地点 小堅穴一覧表

No.	形 狀	高 さ	下地標高	層 次
1	平 底 方 形	14×42	7.74	+地?
2	円 形	30×25	7.89	
3	壺 形	50×25	7.94	
4	瓦 器 質 方 形	60×25	7.94	
5	平 底 方 形	30×25	7.99	
6	壺 形	20×24	7.99	
7	壺 形	20×25	7.94	
8	壺 形	30×30	7.92	
9	円 形	30×35	7.92	
10	壺 形	10×10		
11	平 底 方 形	20×18		Y-2
12	平 底 方 形	25×18		H-1
13	円 形	10×19		
14	不 整 方 形	40×25	7.97	
15	平 底 方 形	25×25		Y-1
16	壺 形	20×24		
17	瓦 器 質 方 形	18×16	7.85	Y-1
18	壺 形	20×20		
19	壺 形	25×18	7.86	
20	円 形	25×30	7.78	Y-4 P-1
21	平 底 方 形	25×14		
22	壺 形	30×20	7.82	Y-4 T-1
23	壺 形	35×12	7.87	
24	不 整 方 形	25×18	7.86	
25	不 整 方 形	25×25	Y-2 T-1	
26	壺 形	25×12	7.75	
27	壺 形	30×24	7.82	
28	壺 形	20×18		
29	長 方 形	25×30		Y-1
30	不 整 方 形	22×18	7.81	
31	不 整 方 形	23×16		
32	不 整 方 形	54×25		
33	円 形	30×20		
34	長 方 形	20×30		
35	壺 形	20×20	7.82	Y-2
36	壺 形	30×20		
37	壺 形	30×18		
38	不 整 方 形	40×25		Y-7
39	壺 形	22×18		
40	壺 形	22×22	7.79	Y-1
41	不 整 方 形	40×32	7.84	
42	瓦 器 質 方 形	34×34	Y-2 H-1	

No.	形	規	上端部高	規	No.	形	規	下端部高	規
60	横 円 形	18×18			177	U	規	18×18	7.90
61	"	18×30	7.14		178	"	20×20	7.49	
62	円 形	12×12			179	"	12×12	7.66	
63	"	10×10			180	"	22×22	7.68	
64	不 等 方 形	32×30	7.87		181	横 円 形	30×20	7.34	
65	横 円 形	100×34	7.48		182	"	50×20	7.87	
66	"	26×20			183	大 横 形	48×20	7.61	
67	"	42×24			184	"	42×34	7.72	
68	円 形	8×8	7.50		185	横 円 形	12×12	7.52	
69	"	22×22			186	"	32×36	7.74	
70	"	18×18			187	円 形	26×26	7.79	
71	横 円 形	20×14			188	横 円 形	32×20	7.63	
72	"	32×26	7.40		189	円 形	28×28	7.83	
73					190	横 円 形	40×22	7.83	Y = T - 2
74	不 等 方 形	24×20	7.45		191	不 等 形	24×24	7.88	
75	"	30×16			192	"	24×22	7.85	
76	円 形	22×22	7.47		193	円 形	28×28	7.80	
77	横 円 形	34×24	7.53		194	横 円 形	18×14	7.53	
78	"	32×32			195	円 形	30×30	7.78	
79	"	44×30	7.56		196	"	24×24	7.51	Y = 4
80	"	38×20	7.31		197	"	32×20	7.86	
81	円 形	18×16	7.45		198	横 円 形	32×24	7.80	
82	"	20×20			199	"	20×8		
83	横 円 形	26×16	7.33		200	円 形	18×18		
84	"	20×20			201	"	14×14		
85	"	18×18			202	横 円 形	14×10		
86	"	22×22	7.62		203	不 等 方 形	40×34	7.80	
87	"	24×24	7.60		204	不 等 形	30×30		
88	横 円 形	24×18	7.54		205	円 形	30×28		
89	"	50×30	7.50		206	横 円 形	28×20		
90	円 形	48×48	7.42		207	"	14×14		
91	横 円 形	30×26	7.46		208	円 形	30×30	7.73	
92	"	18×14			209	不 等 形	70×40	7.71	
93	"	22×18			210	"	64×22	7.74	
94	"	32×22	7.58		211	横 円 形	40×28	7.22	
95	"	24×24	7.50		212	円 形	10×10	7.38	
96	"	50×50	7.50		213	"	22×22	7.33	
97	"	48×48	7.42		214	"	24×24	7.35	Y = S - T - 1
98	"	32×26	7.46		215	"	24×24	7.30	
99	"	30×24	7.44		216	横 円 形	44×34	7.11	
100	"	32×18	7.40		217	円 形	12×12	7.24	
101	円 形	16×16	7.39		218	"	26×26	7.40	
102	横 円 形	24×14	7.32		219	横 円 形	26×26	7.40	
103	"	40×22	7.39		220	円 形	24×24	7.40	
104	円 形	30×30	7.31		221	"	26×26	7.38	
105	横 円 形	38×36	7.34		222	横 円 形	30×24	7.45	
106	"	40×30	7.36		223	円 形	24×24	7.28	Y = 1
107	"	36×36	7.33		224	"	26×25	7.39	Y = 7 - T - 1
108	"	34×38	7.35		225	"	30×30	7.30	Y = 1
109	"	42×29	7.56		226	不 等 形	80×36	7.49	
110	"	38×36	7.34		227	円 形	22×22	7.31	Y = 7
111	"	36×36	7.34		228	"	30×30	7.41	
112	"	42×24	7.50		229	"	24×24	7.45	
113	横 円 形	24×16	7.32		230	"	30×30	7.47	
114	"	40×32	7.36		231	横 円 形	24×29	7.21	
115	円 形	30×30	7.31		232	"	30×26	7.46	Y = 1
116	横 円 形	36×36	7.34		233	"	22×18	7.53	
117	"	38×36	7.34		234	円 形	12×12		
118	"	32×36	7.31		235	4 不 等 形	38×22	7.74	
119	"	34×38	7.35		236	横 円 形	60×34		
120	"	36×36	7.34		237	"	14×10		
121	横 円 形	40×30	7.39		238	円 形	22×22		
122	"	42×36	7.39		239	横 円 形	30×16		
123	"	36×36	7.35		240	"	26×16		
124	横 円 形	32×32	7.45		241	"	18×16		
125	"	40×32	7.46		242	円 形	16×16		
126	"	36×36	7.46		243	円 形	30×20		
127	"	38×36	7.44		244	"	22×14		
128	横 円 形	32×32	7.45		245	"	40×29		
129	"	40×32	7.46		246	"	30×20		
130	不 等 圆 形	38×36	7.64		247	"	32×20		
131	横 円 形	40×30	7.59		248	円 形	26×26		Y = 1
132	"	42×36	7.59		249	横 円 形	40×28	7.67	
133	"	36×36	7.54		250	円 形	22×22	7.58	
134	横 円 形	32×32	7.45		251	横 円 形	30×16	7.55	
135	横 円 形	24×20	7.46		252	"	26×16	7.57	
136	"	22×16	7.31		253	"	24×29	7.21	
137	"	24×24	7.36		254	"	30×26	7.46	
138	円 形	30×30	7.32		255	"	26×26	7.46	
139	横 円 形	38×44	7.38		256	"	24×29	7.21	
140	円 形	14×14	7.32		257	横 円 形	34×30	7.08	
141	"	22×22	7.20		258	円 形	30×30	7.09	
142	横 円 形	24×15	7.43		259	横 円 形	26×20	7.28	
143	"	40×32	7.13		260	"	22×14	7.23	
144	"	30×16	7.34		261	横 円 形	28×18	7.38	
145	円 形	16×16	7.28		262	横 円 形	28×28	7.38	
146	"	18×18	7.28		263	不 等 圆 形	32×28	7.57	
147	"	48×36	7.39		264	不 等 形	35×32		
148	横 円 形	24×14	7.34		265	不 等 形	24×24	7.53	
149	円 形	14×14	7.36		266	不 等 形	30×22	7.64	
150	"	18×18	7.46		267	横 円 形	30×30	6.99	
151	横 円 形	30×12	7.50		268	横 円 形	28×20	7.10	
152	"	24×26	7.34		269	横 円 形	34×34	7.19	
153	円 形	8×8			270	不 等 圆 形	26×20	7.28	
154	横 円 形	30×14	7.32		271	横 円 形	30×30	6.99	
155	"	38×32	7.37		272	横 円 形	40×30	7.24	
156	"	30×22	7.09		273	横 円 形	26×26	7.07	
157	"	22×20			274	横 円 形	34×30	7.08	
158	"	45×26	7.39		275	円 形	30×30	7.09	
159	"	32×36	7.37		276	横 円 形	28×20	7.25	
160	"	34×36	7.60		277	横 円 形	30×30	7.25	
161	不 等 形	12×12			278	横 円 形	26×26	7.24	
162	横 円 形	28×20	7.39		279	横 円 形	34×30	7.24	
163	"	20×14	7.39		280	横 円 形	34×30	7.24	
164	"	70×14	7.39		281	横 円 形	34×34	7.19	
165	U 形	14×14	7.60		282	横 円 形	26×20	7.28	
166	横 円 形	28×20	7.28		283	横 円 形	26×26	7.28	
167	"	20×16	7.49		284	横 円 形	28×20	7.28	
168	"	20×20	7.52		285	横 円 形	28×20	7.28	
169	円 形	22×24	7.49		286	横 円 形	28×20	7.28	
170	横 円 形	20×16	7.52		287	横 円 形	28×20	7.28	
171	U 形	22×22	7.66		288	横 円 形	28×28	7.38	
172	横 円 形	44×32	7.66		289	横 円 形	32×28	7.57	
173	円 形	35×35	7.69		290	不 等 形	35×32		
174	不 等 形	50×22	7.61		291	不 等 形	24×24	7.53	
175	横 円 形	28×28	7.29		292	不 等 形	38×28	7.44	
176	横 円 形	32×36	7.40		293	不 等 圆 形	32×28		

V 出土遺物

1. 灰褐色粘質土層出土の土器 (Fig 2・15)

水田の床土下の上層は3層に分離できる。そのうちの最上層であり、出土上器の大部分は器面の磨滅が激しい。

甕 (Fig 2・15, 1~20, 34, 35) 2・15, 1~7は刻目突帯をもつ夜臼式である。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色のものが多い。2・15, 8~11は板付I式であろう。2・15, 8, 9は口縁部外端の縦一杯に刻目が施される。2・15, 10は口縁部に刻目はない。2・15, 11は口縁下のふくらみが強い。外面に縦刷毛目 (2・15, 8)、横刷毛目 (2・15, 11) 調整。いずれも口縁部横なで調整。2・15, 12~15はいずれも口唇下端に刻目をもつ板付IIa式である。2・15, 12, 13は外面縦刷毛目調整。いずれも口縁部は横なで調整。

2・15, 16, 17は口縁部を欠くが、胴部に一条の刻目突帯をもつ。2・15, 17は外面斜めの刷毛目調整。板付IIb式であろう。2・15, 18, 19は大型の甕である。前者は口唇下端に刻目をもつ。口縁部横なで調整。2・15, 34は若干大きめの口縁部突帯と、胴部にも一条の三角突帯をもち、刻目はつかない。横なで調整。中期前葉でも古いものであろう。2・15, 35は逆「L」字状口縁をもつ。中期中葉であろう。2・15, 20は「く」の字状に外反し、いわゆる跳ね上がり口縁をもち、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。中期後葉一後期初頭のものである。

壺 (Fig 2・15, 21~33) 2・15, 31は内傾する頸部と短く外反する口縁部をもつ。夜臼式であろうか。2・15, 21, 22は口縁部が肥厚し、外面に段がつく。2・15, 23, 24とともに板付I式であろう。2・15, 25~27は板付II式である。2・15, 28~30, 32, 33は中期のものである。2・15, 28は肩部に二条の三角突帯を巡らす。2・15, 29, 33は鉗状口縁に近くなるが、外側への発達は弱い。2・15, 32は外側に聞く朝顔状の口縁をもつ広口壺である。これらの土器は中期でも前葉に入るものであろう。2・15, 30の口縁部は大きな粘土紐を貼り付けて形成されるが一問するものかどうか不明。破片中の口縁部に焼成時の穿孔が2個ある。中期前葉のものであろうか。

器台 (Fig 2・15, 36) 外面に縦刷毛目調整を施す。中期のものであろう。

底部 (Fig 2・15, 37~48) 2・15, 37~40は壺、2・15, 41, 44は大型甕、他は甕の底部である。2・15, 37の外面は縦刷毛目調整。2・15, 38, 42, 43は上げ底を呈する。2・15, 7~11, 14は前期、2・15, 12, 13は中期前葉であろう。

灰褐色砂質土層出土の土器 (Fig 2・16~20)

甕 (Fig 2・16, 2・17, 1~30, 2・19) 2・16, 1~45はいわゆる刻目突帯をもつ夜臼式上器である。器面は条痕調整を行い、口縁部の刻目突帯の位置や刻目も種々雑多である。胎土はほとんどが石英粒砂を含む。焼成は概して良く、暗褐色系統の色調をもつ。2・16~46~59は板付I式である。外面に縦あるいは斜めの刷毛目調整のあるもの (2・16, 47, 49, 52, 56) があるが、ほとんどは口縁部内外は横なで調整。2・16, 58, 59は直立する口縁の外端に刻目がつく。2・16, 60~66, 2・17, 1~7, 2・19, 1~10は板付IIa式土器である。

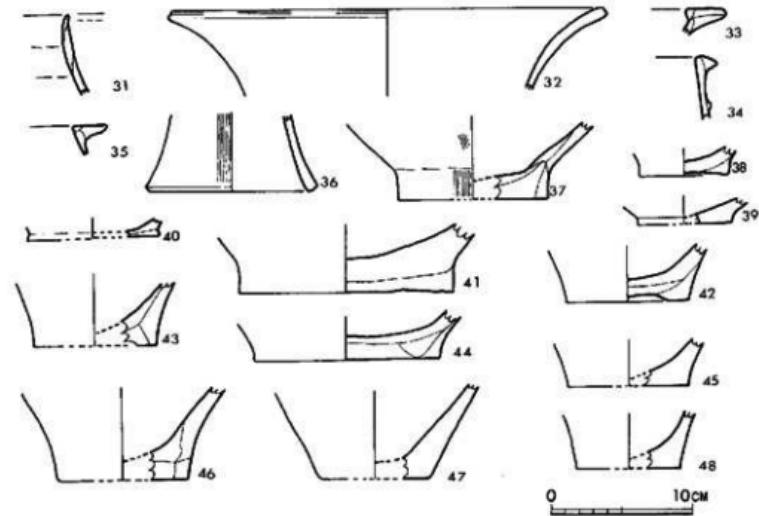
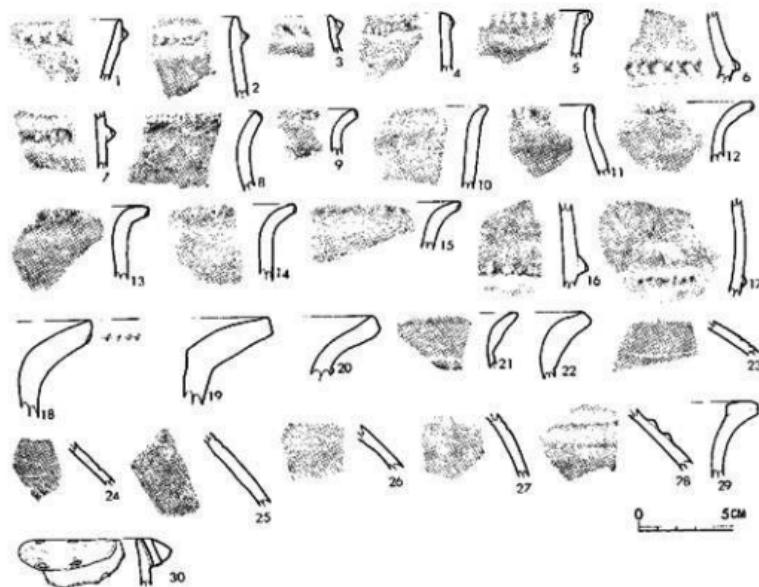


Fig. 2-15 灰褐色粘質土層出土の土器実測図

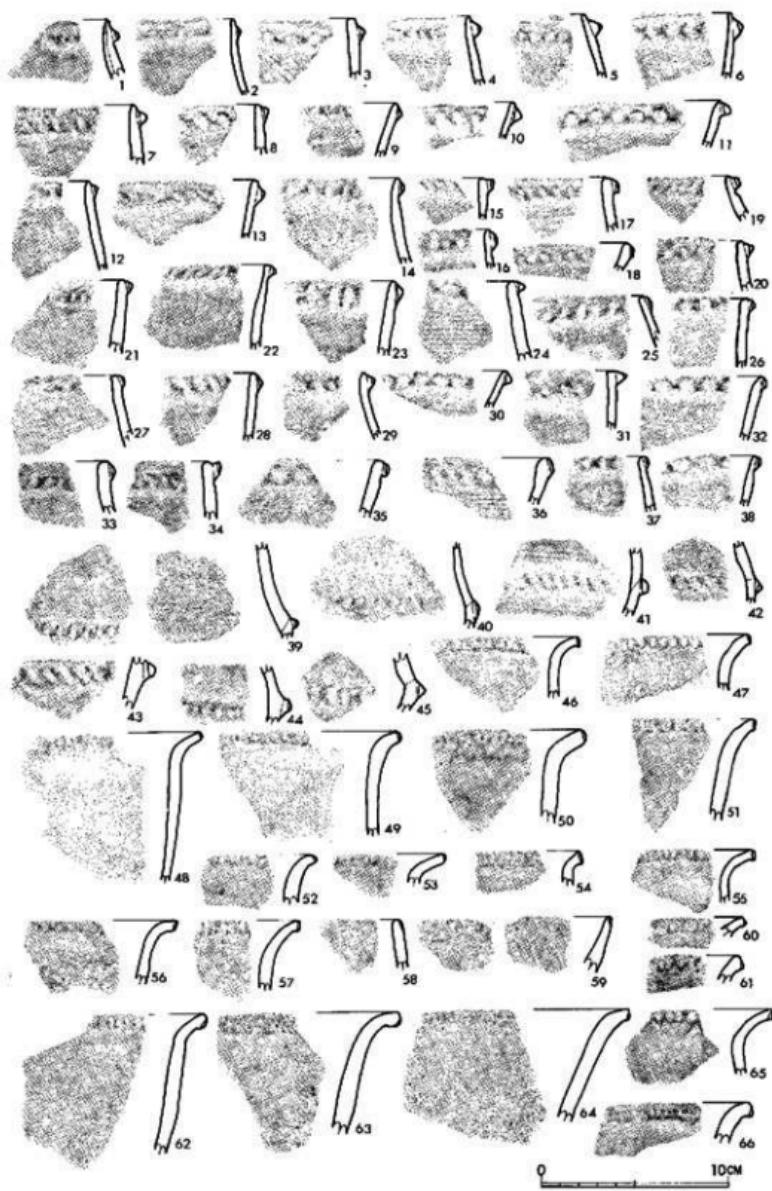


Fig. 2 · 16 灰褐色沙質土層出土上器實測圖(1)

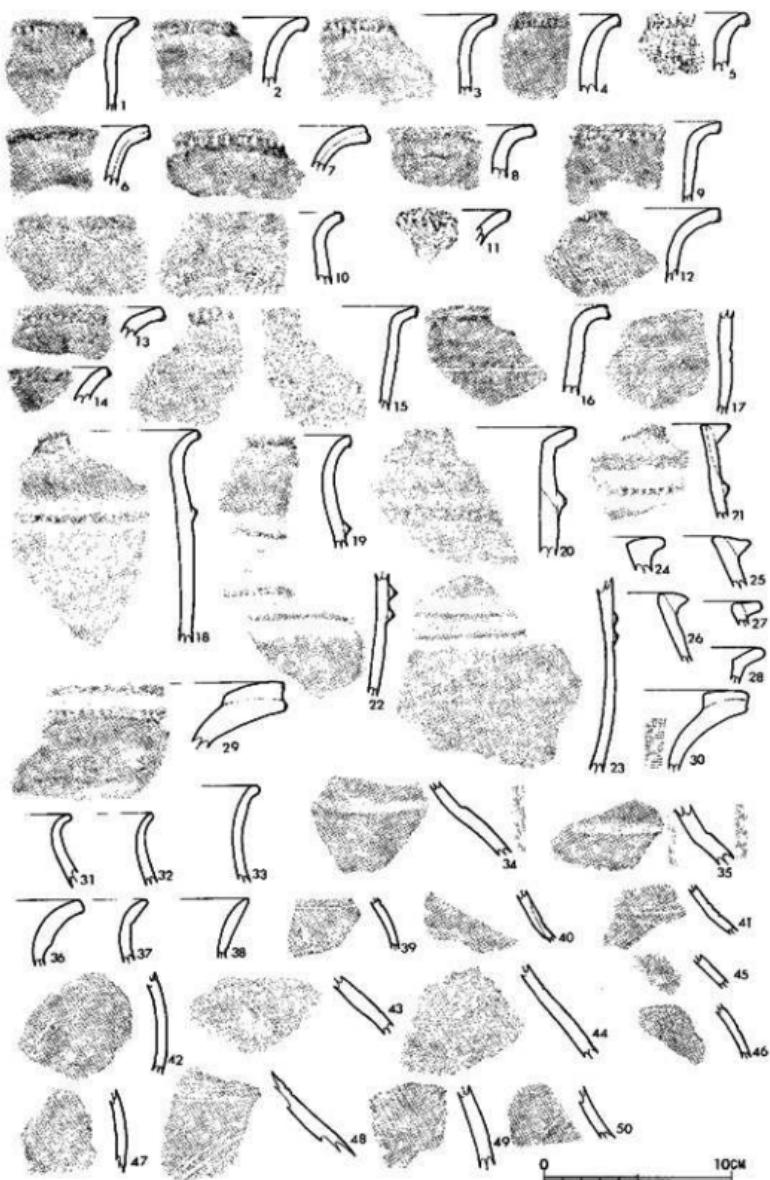


Fig. 2-17 灰褐色砂質土層出土器物測圖(2)

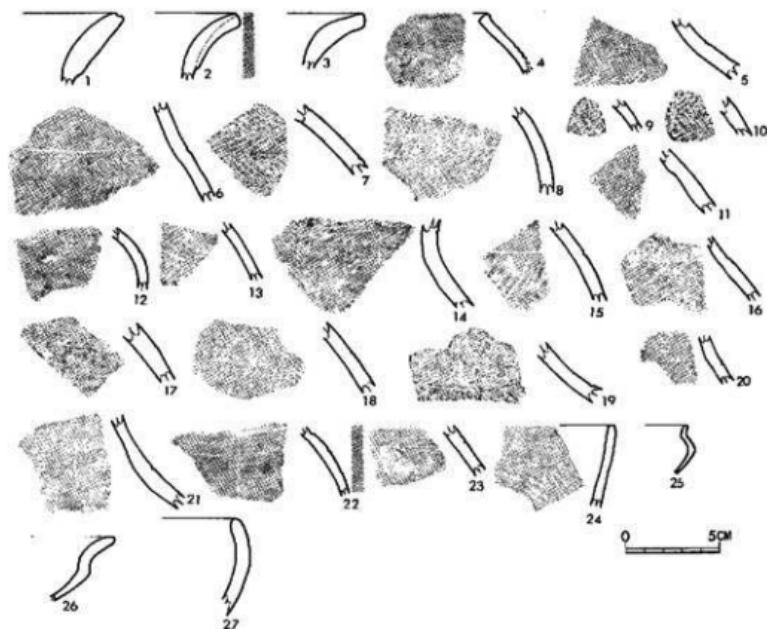


Fig. 2・18 灰褐色砂質土層出土上器実測図(3)

ほとんどが如意状口縁の口唇下端に刻目がつけられるが、2・19、8のようにつかないものもある。口縁下に一条の沈線を有するもの（2・17、15、16、2・19、9、10）があり、特に2・17、16はその上下に刺突文が施され、口縁部も両端に刻目がつく特異な土器である。また2・17、18は口縁部を欠くが、胴部に二条の沈線が巡る。外面に刷毛目調整のあるもの（2・16・62～66、2・17、1、3、6～10、12、15、17、2・19、1～3、8～10）、内面にも施されるもの（2・19、7、8、10）がある。また内面に指の押痕痕の残るもの（2・18、7、8）もある。いずれも口縁部の内外は横なで調整。2・17、18～20は如意状口縁の口唇下端に刻目をもち、口縁下に一条の刻目突帯を巡らす。いずれも外面は継刷毛目調整で、口縁部内外と突帯貼り付け部は横なで調整。これらの土器は板付II b式であろう。2・17、22、23は口縁部を欠失するが、胴部に二条の刻目突帯を巡らす。外面は継刷毛目調整で、突帯貼り付け部は横なで調整。刻目突帯を二条巡らす甕は福岡平野では少なく、福岡県八女市亀ノ甲遺跡の例（小田1963）からみて、これらの土器はいわゆる亀ノ甲式（板付II c式）に比定されよう。2・17、21、24～28の土器は中期初頭のものであろう。2・17、29、30は大型の甕であろう。前期末か中期初頭。2・19、11は口縁部が逆「L」字状に近いが、内端の張り出しがない。外面に継刷毛目調整。中期前葉。2・19、12～17は逆「L」字状口縁をもつもので中期中葉のものであろう。2・19、

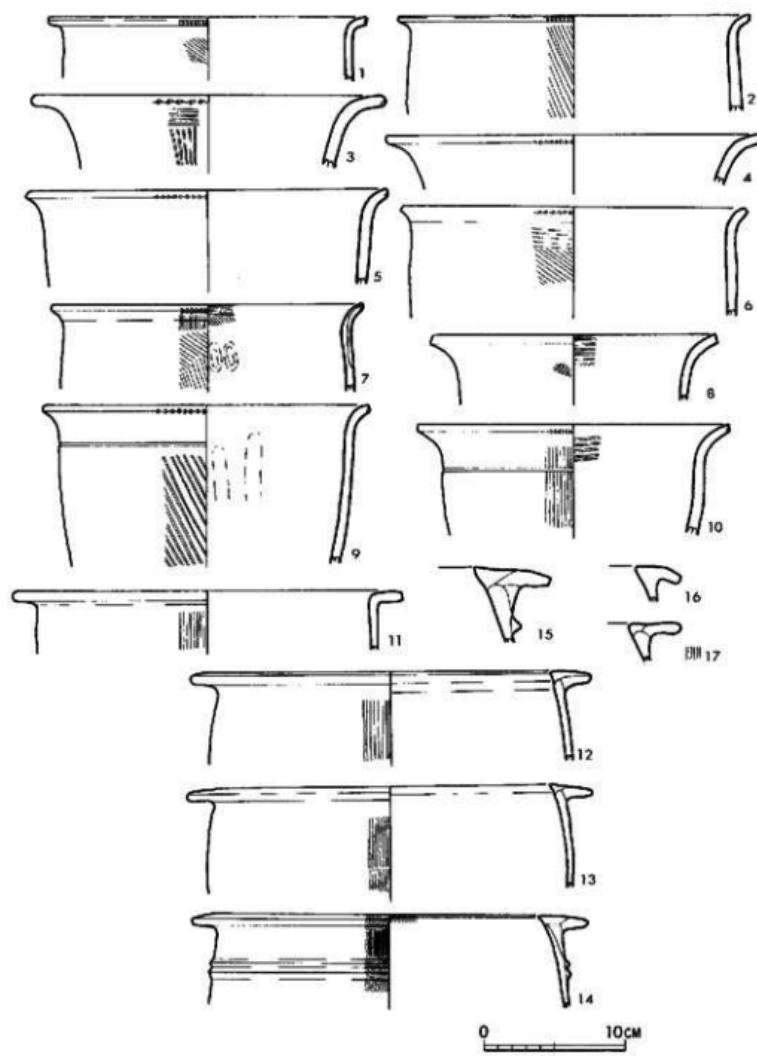


Fig. 2-19 灰褐色砂質土層出土土器実測図 (4)

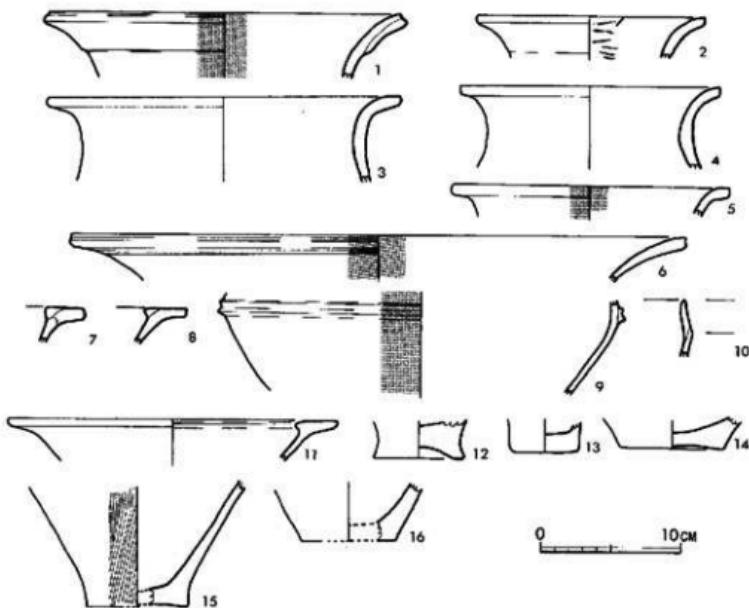


Fig. 2-20 灰褐色砂質土層出土器実測図(5)

12, 13, 17は縦刷毛目調整。2・19, 14は外面丹塗り磨研の土器で、口縁下に一条の「M」字状突帯が巡る。口縁部と次帯の間には縦に丹で暗文を描く。2・19, 15は大型のもので、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。裏棺かもしれない。いずれも口縁部や、突帯貼り付け部は横などで調整。

壺 (Fig. 2-17, 31~50, 2-18, 1-23, 2-20, 1-9) 2-17, 31~35は夜白式土器の壺であろう。2-17, 34は外面、2-17, 35は内外面とも丹塗り。2-17, 31~33は横などで調整を行う。2-17, 36~50, 2-20, 1は板付I式の壺である。2-17, 36~38, 2-20, 1は口縁部を肥厚させ、外面に段がつく。2-20, 1は内外面とも丹塗り。2-17, 39~50は胴部破片で、複線八字形文、有軸羽状文のものが多い。ほとんどが磨研されている。2-18, 1-23, 2-20, 2-5は板付II式の壺である。2-18, 1-2, 2-20, 2は口縁部が肥厚し、外面に段がつけられるが、板付I式のものと比較して鋭さに欠け、口縁部の張り出しが強い。2-18, 1は内外面とも丹塗り。2-20, 2の内面は粗い刷毛目調整。2-18, 4は短い口縁をもつ無頸壺である。2-20, 3~5は肥厚しない外反する口縁をもつ。2-20, 5は内外面とも丹塗り。2-18, 5~23は胴部破片で、無軸羽状文が多い。2-18, 6, 10, 13, 18は貝殻腹縁で施文する。2-18, 22は外面丹塗り。2-20, 6~9は中期の壺である。2-20,

6は単純に朝顔状に口縁が開く広口壺で、内外面とも丹塗り磨研。外面口縁下に3本の細い沈線が巡る。中期前葉。2・20, 7, 8は鋸状口縁をもつが、前者は若干未発達である。前者は中期前葉、後者は中期中葉か。2・20, 9は胸部破片で最大径部の若干下部に大きな不整形の「M」字状突帯をもつ。外面丹塗りで、中期中葉のものであろう。

鉢 (Fig 2・18, 24~27, 2・20, 10) 2・19, 24は単純に開口縁部で外面に粗い斜めの条痕がつく。2・18, 25は「く」の字状に屈折する胸部と、観く外反する口縁部をもつ。2・18, 26も「く」の字状に屈折する胸部をもつが、前者はどではない。2・20, 10は口縁部がほとんど外反しない。これらは、2・18, 24を除いて黒色磨研の土器が多く、いずれも夜臼式のものであろう。2・18, 27は中期の鉢であろう。

高杯 (Fig 2・20, 11) 鋸状口縁をもつもので中期のものであろう。器面があれでいるために調整などは不明。

底部 (Fig 2・20, 12~16) 底部は適当ではないが、数個を図示するにとどめる。2・20, 13, 14, 16は壺、他は甌であろう。

1 黒色粘土質土層出土の土器 (Fig 2・21~24)

最下層である。若干の中期初頭の土器を除けば大部分が前期の土器であり、北側に隣接する板付北小学校の黑色粘土質土層と同様の結果を得た（後藤・沢1967）。

壺 (Fig 2・21, 2・22, 1・7, 2・3, 1・15) 2・21, 1・21はいわゆる刻目突帯をもつ土器で夜臼式土器である。ほとんどが横あるいは斜めの条痕が施される。口縁部の刻目突帯の形状、位置は各種とおり（森・岡崎1961）、また胸部が屈折してそこに刻目突帯がつくもの（2・21, 1, 18~21）や、胸部が屈折せずまた突帯もつかないもの（2・21, 2）などもある。2・21, 17は内面に指の押圧調整痕が残る。胎上はいずれも石英粒砂を含み、暗褐色を呈するものが多い。2・21, 22, 23, 2・23, 1~3は板付I式のものであろう。いずれも如意状口縁をもち、口唇の縦一杯に刻目を施す。2・21, 22, 23, 2・23, 1, 2は外面継刷毛目調整。2・21, 23は内面口縁下に横刷毛目調整。すべて口縁部は横なで調整。2・21, 24~32, 2・23, 4~14は板付IIa式である。2・21, 24は口縁部を欠くが、2・21, 25や2・22, 4, 5と同じように、如意状口縁をもって、その直下が肥厚し、外面に段がつけられる。2・21, 24はその段部に刻目がつき、その下は横刷毛目調整。2・21, 25は口縁部に刻目はつかない。段から上は斜め、下は縦、内面は横、斜めの刷毛目調整。内面に指の押圧痕がある。2・23, 4は口唇の縦一杯に刻目がつけられ、外面に縦、横、斜めに、内面は斜めに刷毛目調整。2・23, 5は小型の土器で、口唇下端に刻目。外面の段から上は横に近い斜め、段から下は縦の刷毛目調整。内面には指の押圧調整痕。口縁部周辺は横なで調整。2・23, 4が板付I式に含まれる可能性があるが、一応板付IIa式に含めておく。2・21, 26~31, 2・23, 6~11はいずれも如意状口縁をもち、その口唇下端に刻目を施す。2・21, 27, 28は口縁下に一条の沈線を巡らす。2・23, 7, 10, 11を除いて外面に斜めや縦の刷毛目調整。2・21, 28, 2・23, 9, 10は内面に横刷毛目調整。2・23, 6, 8は内面に指の押圧調整痕を残す。2・21, 32, 2・23, 12~14は同じく如意状口縁をもつが、口唇部の刻目はない。2・23, 14は口縁下に一条

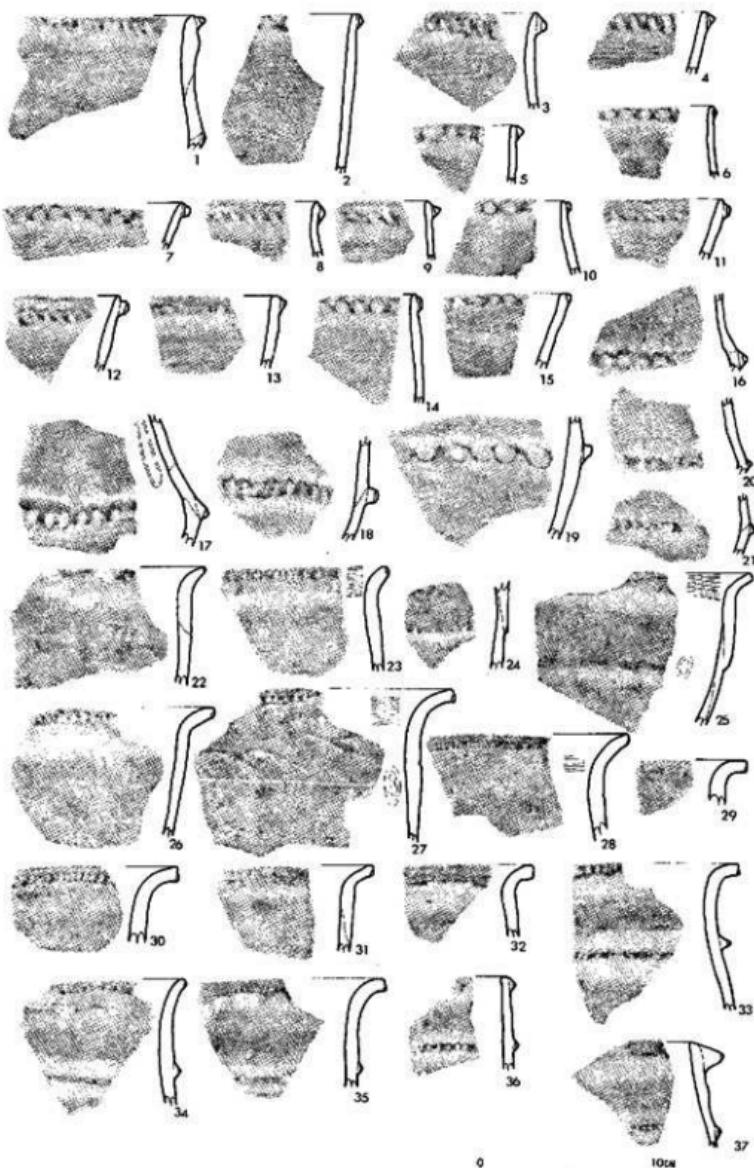


Fig. 2 · 21 黑色粘质土层出土土器实测图(1)

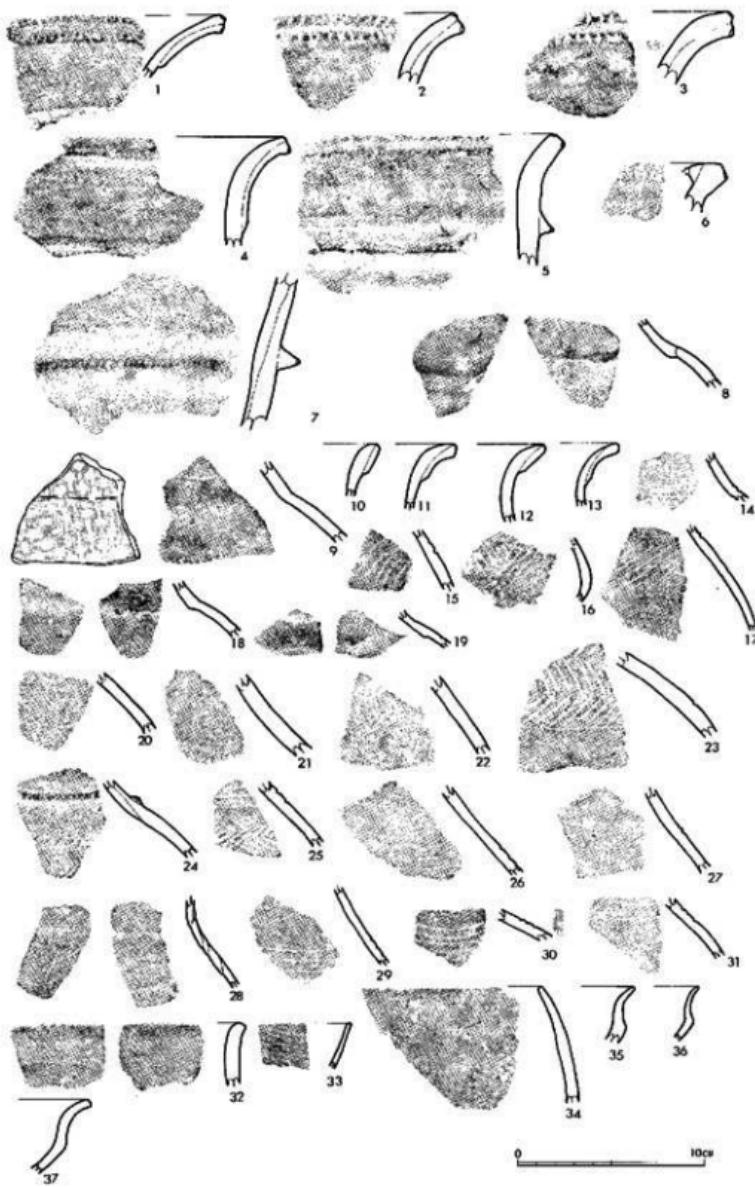


Fig. 2·22 黑色粘質土層出土土器実測図(2)

の沈線が巡る。2・23, 14を除いて外面は斜めあるいは縦の刷毛目調整。2・23, 12~14は内面に横刷毛目調整。これらの土器はいずれも口縁部周辺は横なで調整で、板付I式のものに比較して口縁部の先端が「コ」の字状になるものが多い。2・21, 33~35は如意状口縁をもち口唇の下端に刻目をもつが、口縁下にも一条の刻目突帯を巡らす。いずれも外面には縦および斜めの刷毛目調整。これらの土器はいわゆる板付II b式に相当する。2・21, 36, 37は口縁部と胴部に刻目突帯をもつが、夜白式土器とは異なる。外面は縦および斜めの刷毛目調整。口縁部周辺と突帯貼り付け部は横なで調整。いわゆる亀ノ甲式（板付II c式）であろう。2・22, 1~7は大型の甕である。2・22, 1~3, 5は外反する口縁の上下両端に、2・22, 4は下端のみに刻目が施される。2・22, 1, 4は口縁部が肥厚し、外面に段がつけられる。2・22, 5は口縁下に一条の刻目突帯が巡る。2・22, 6は外反する口縁の内側に断面三角形の張り出し部をつけたもので、口唇下端に刻目を施す。いわゆる金海式覆棺口縁の特徴をもつ。2・22, 7は胴部破片だが、一条の刻目突帯をもつ。2・22, 3~5, 7は外面に縦および横の刷毛目調整。これらの土器は前期末~中期初頭のものであろう。2・23, 15, 16は中期の土器である。2・23, 15は逆「L」字状口縁に近いが内側張り出しが無く、外側も短い。外面縦刷毛目調整。口縁部周辺は横なで調整。中期初頭のものであろう。

壺 (Fig. 2・22, 8~31, 2・23, 16~24) 2・22, 8, 9, 2・23, 16~18は夜白式であろう。2・23, 16~18は口縁部で2・23, 17は内外面とも丹塗り。いずれも横なで調整。2・22, 8, 9は肩部の破片で、前者は胴部の内側に、後者は頸部の内面に条痕。後者の外面は丹塗り。2・22, 10~19, 2・23, 19は板付I式であろう。2・22, 10~13, 2・23, 19は外反する口縁部が肥厚し、外側に段がつく。いずれも横なで調整。2・22, 14~19は胴部破片である。2・22, 20~31, 2・23, 20~24は板付II式である。2・23, 20, 21は前述の板付I式に類似するがI式に比較して鋭さに欠ける。2・23, 22~24の口縁部は肥厚しない。いずれも口縁部横なで調整。2・22, 20~31は胴部破片である。2・22, 22は貝殻腹縁で施文するが他のものは籠状工具で施文。2・22, 30は外面丹塗り。2・22, 24は肩部に一条の刻目突帯が巡り、その下に無軸羽状文。2・22, 28は、器壁の接合部が短く、内面に何段も接合痕が段となつてついている。

鉢 (Fig. 2・22, 32~37, 2・24, 1~12) 2・22, 32~37, 2・24, 1~4, 8, 9は夜白式の鉢であろうが、2・22, 35~37, 2・24, 1~4は浅鉢であり、あるいは高环の环の可能性もある。これらの浅鉢はいずれも胴部で「く」の字状に屈折するが、屈折が鋭く、口縁部が短く外反するもの（2・22, 35, 36, 2・24, 1）、屈折は弱いが、口縁部の外反が強いもの（2・22, 37, 2・24, 4）、屈折も外反も弱いもの（2・24, 2）、屈折は弱く、口縁は若干内し、屈折部に三角突帯をもつもの（2・24, 3）がある。2・22, 32~34, 2・24, 8, 9は深鉢系統のもので2・22, 32, 33は口縁部が外反するが、他は内傾する。2・22, 32~34, 2・24, 9は外面条痕。2・22, 32は内面にも条痕。2・24, 8は横なで調整。2・24, 5~7は如意状口縁をもつ鉢である。2・24, 10は内傾の強い鉢だが、無類壺の可能性もある。2・24, 11の内面には指の押圧痕がつく。これらの土器は前期~中期初頭のものであろう。

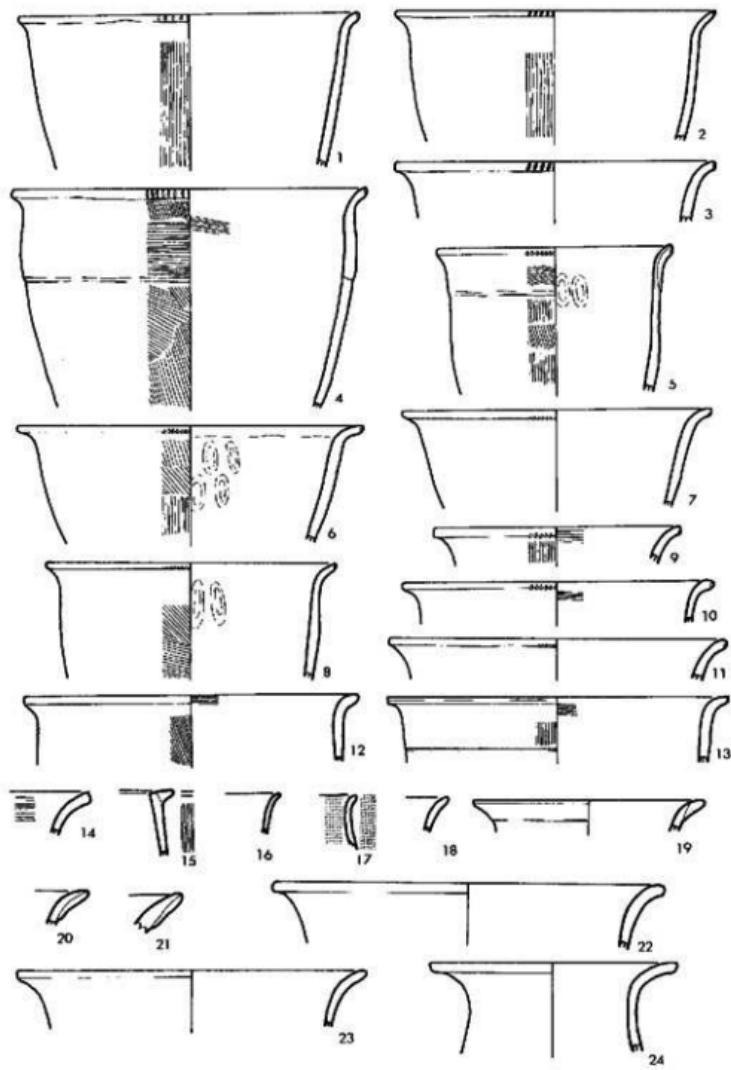


Fig. 2-23 黑色粘质土层出土土器实测图 (3)

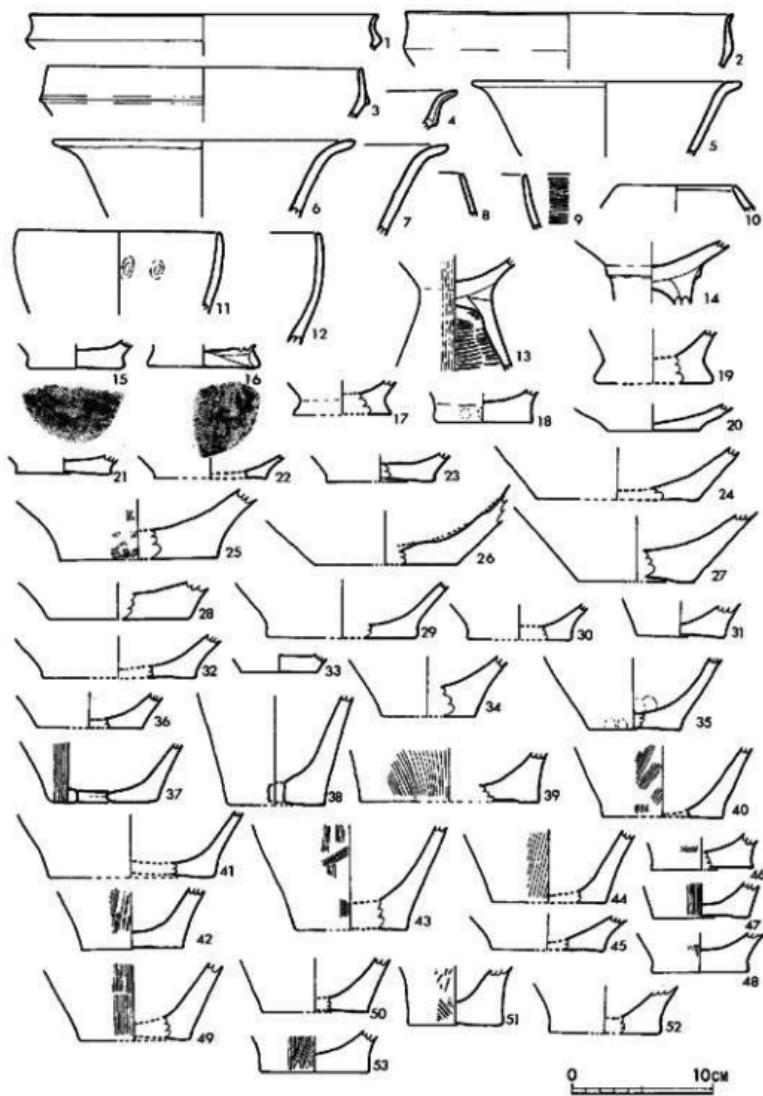


Fig. 2-24 黑色粘质土层出土器物实测图 (4)

高坏 (Fig. 2・24, 13, 14) 2・24, 13は外面範の縦磨研。内面脚部は横の条痕調整。胎土・焼成とも良く外面は暗褐色、内面は黄褐色を呈する。夜白式のものであろう。2・24, 14は环と脚の接合部に一条の三角突帯を巡らす。板付I式のものである。

底部 (Fig. 2・24, 15~53) 2・24, 20~23, 28~36が壺、2・24, 24~27は大型甕、他は甕の底部であろう。2・24, 15~19はその特徴から夜白式のものであろう。2・24, 15, 16には木葉痕がある。2・24, 18, 35は底部外面に指の押圧調整痕が残る。2・24, 25, 37, 38, 40, 42, 43, 44, 46~49, 51, 53の外面にはそれぞれ縦・横・斜めの刷毛目調整。2・24, 37, 38は底部に穿孔があり甕として利用されたものであろう。2・24, 37, 38, 40, 42, 44, 49, 50は内面に炭化物の付着がある。これらの底部は前期~中期初頭のものであろう。

4. 包含層出土の土器 (Fig. 2・25, 30)

ここで包含層出土の上器としたものは、ユンボで排土した土中から出土したものと、土層を確認せずに取りあげた土器などである。

甕 (Fig. 2・25, 2・27, 2・28, 2・29, 1~8), 2・25, 1~16, 2・27, 1~6は、いわゆる刻目突帯文をもつ甕で夜白式土器である。ほとんどが、胎土に石英粒砂を含み、暗褐色を呈する。外面には横および斜めに条痕調整を施す。口縁部が内傾するものと、そうでないものがあるが、前者はおそらく2・25, 14~16, 2・27, 1~5の様に、胸部屈折部にも刻目突帯をもつものであろう。口縁部の刻目突帯の位置も三つに分類できる（森・岡崎1961）。この土器の中で特異なものは、2・25, 14で、内傾する口縁部をもち、胸部屈折部に刻目突帯をもつが、口縁には刻目突帯をもたない。口縁部は角張っており、範で磨研した様な器面調整をみる。2・25, 17~22, 2・27, 7~15は、口縁部の縦一杯に刻目を施すもので、板付I式であろう。口縁端は丸味を帯びるものが多い。2・25, 19, 2・27, 7, 10は内外面とも、2・27, 9, 14は外面に縦あるいは斜めの刷毛目調整。2・25, 19, 21, 2・27, 8の内面には指の押圧調整痕が残る。いずれも口縁部は横なで調整。大部分が胎土に石英粒砂を含み、暗褐色を呈するが、前述の夜白式よりわずかに赤色味を帯びる。2・25, 21は口縁部の屈折が強く胸部のふくらみが強い。2・25, 22は口縁部が肥厚する。あるいは後続する板付II式のものかもしれない。2・25, 23, 24, 26, 2・27, 16~20, 2・28, 1~10はいわゆる板付IIa式といわれるものである。口縁部に刻目のつくもの（2・25, 24, 2・27, 16~20, 2・28, 1, 2）は、板付I式と異り、口縁下端のみにつけられる。口縁端は角張るものが多くなり、一般的に口縁の外角が強い。2・25, 23, 24, 2・28, 2, 3の様に口縁下に一条の沈線を巡らすものや、2・25, 24, 26のように刺突文を施すものもある。後者は板付遺跡を含む福岡平野ではほとんどみあたらず、遠賀川を中心とする北九州地域に散見する。また口縁部の肥厚するもの（2・28, 4）もある。外面に縦あるいは斜めの刷毛目調整のあるもの（2・25, 23, 2・27, 18, 19, 2・28, 1~3, 5）、内面の口縁下に横あるいは斜めの刷毛目調整のあるもの（2・25, 24, 2・27, 18, 2・28, 3~6）、同じく内面に指の押圧調整痕のあるもの（2・27, 16, 20, 2・28, 6, 7, 10）などがあり、口縁部は横なで調整のものが多い。胎土はほとんどが石英粒砂を含む。2・25, 25, 27, 28, 2・28, 11, 12は前期後葉の土器で板付IIb

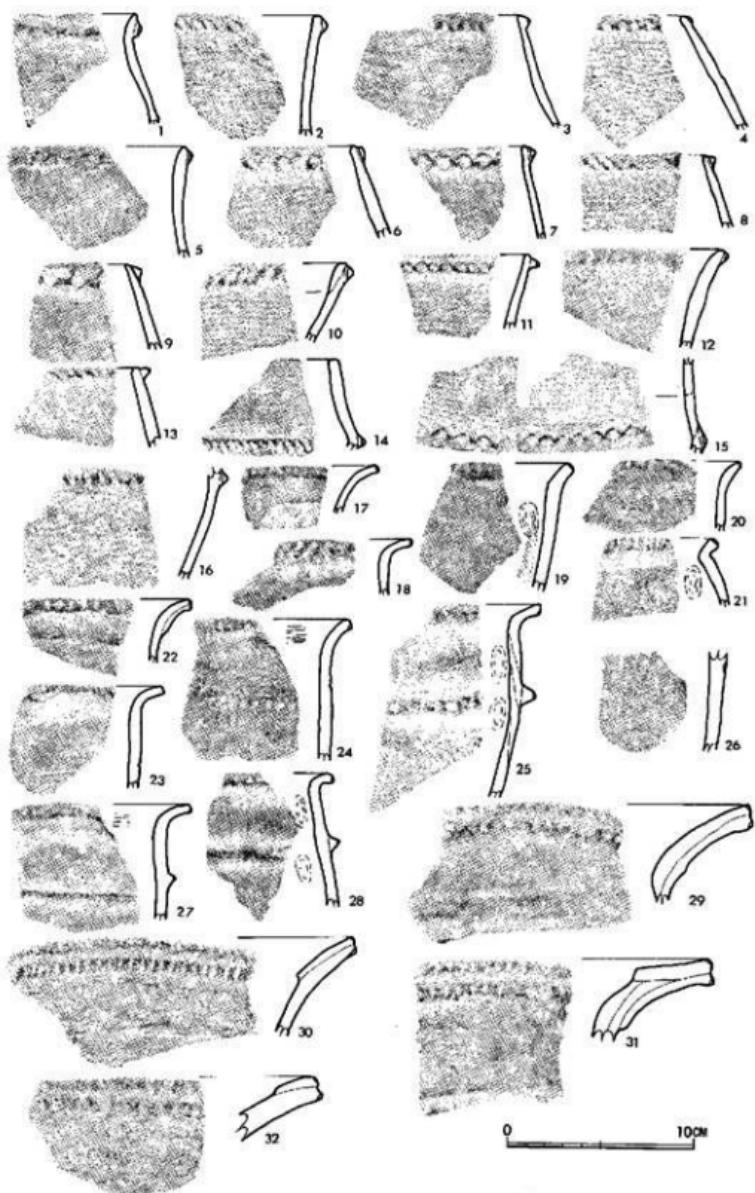


Fig. 2 · 25 包含层出土土器实测图(1)

式、あるいはII c式と呼ばれるものである。2・28, 12以外は、板付II a式と同じく如意状口縁の下端に刻目を施すが、口縁下に一条の刻目突帯が巡る。2・28, 12は、口縁部に刻目突帯、口縁下にも一条の刻目突帯が巡るが、夜白式のそれと比較して突帯の感じが鋭く、刻目は細く小さい。いわゆる亀ノ甲式と呼ばれるものであろう。いずれも外面に縱あるいは斜めの刷毛目調整、2・25, 27、2・28, 11は内面口縁下に横の刷毛目調整。2・25, 25, 28には内面に指の押圧調整痕が残る。いずれも口縁部と突帯貼り付け部は横なで調整。2・25, 29~32は大型甕の口縁部である。いずれも口縁の上下両端にそれぞれ刻目があり、2・25, 29口縁部は肥厚し外面で口縁下に段がつく。2・25, 30, 31, 32も口縁下が肥厚するが、これらは内面に段がつけられる。2・25, 31は外面にも段がつく。これらの土器は前期後葉のもので、板付II b式に伴うものであろう。2・28, 14~18は弥生時代中期前葉のものである。2・28, 14は口縁部

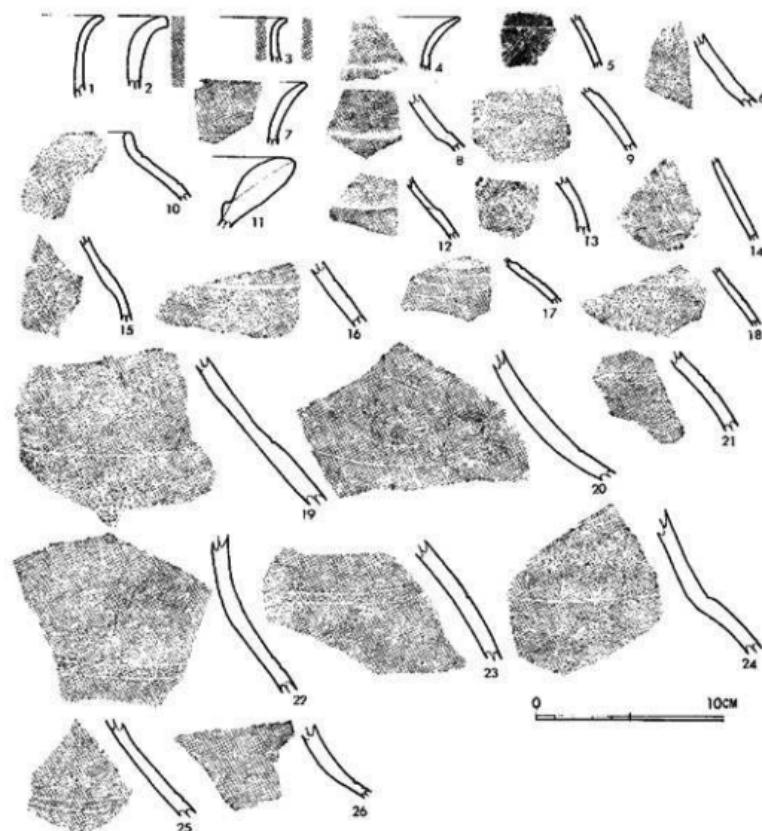


Fig. 2・26 包含層出土土器実測図(2)

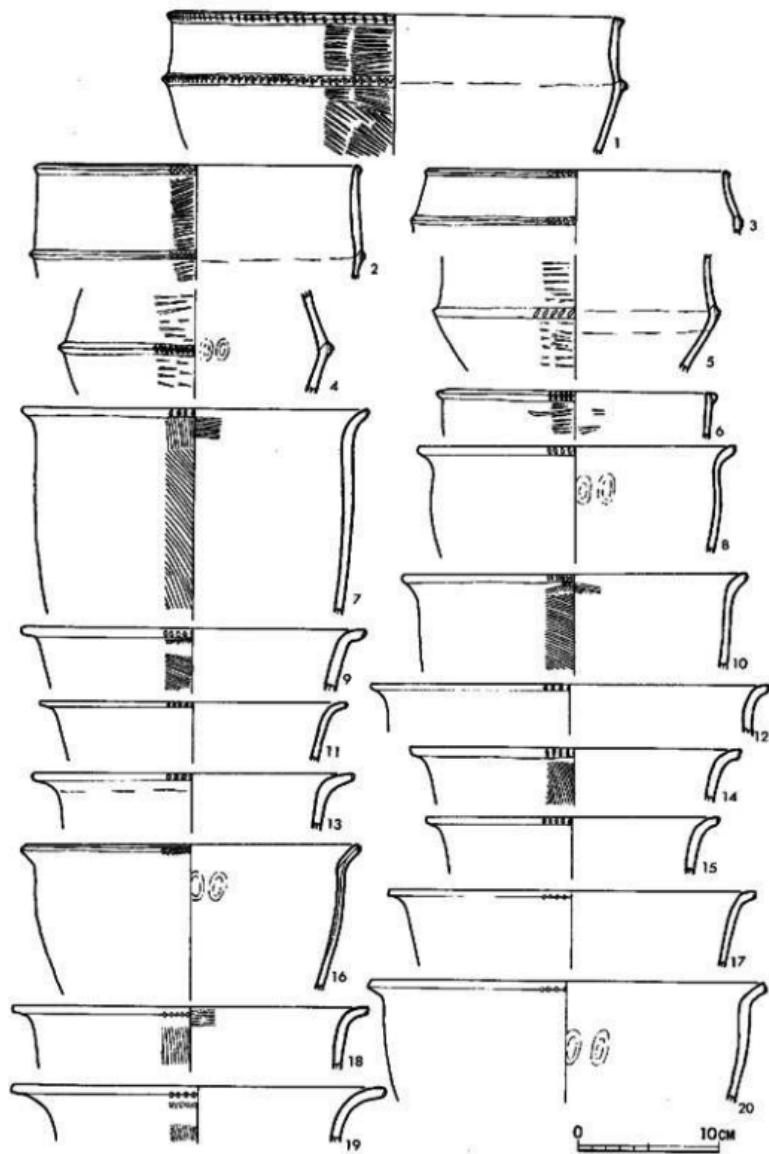


Fig. 2-27 包含层上土器实测图 (3)

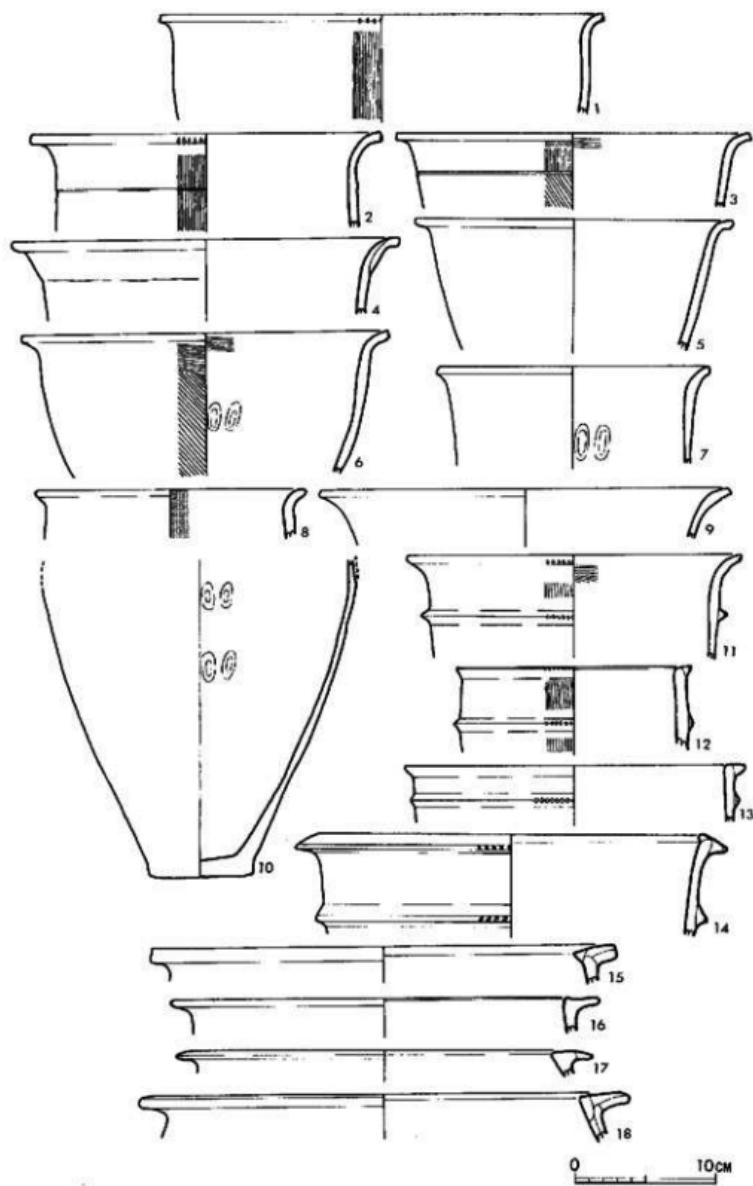


Fig. 2-28 包含層出土土器実測図(4)

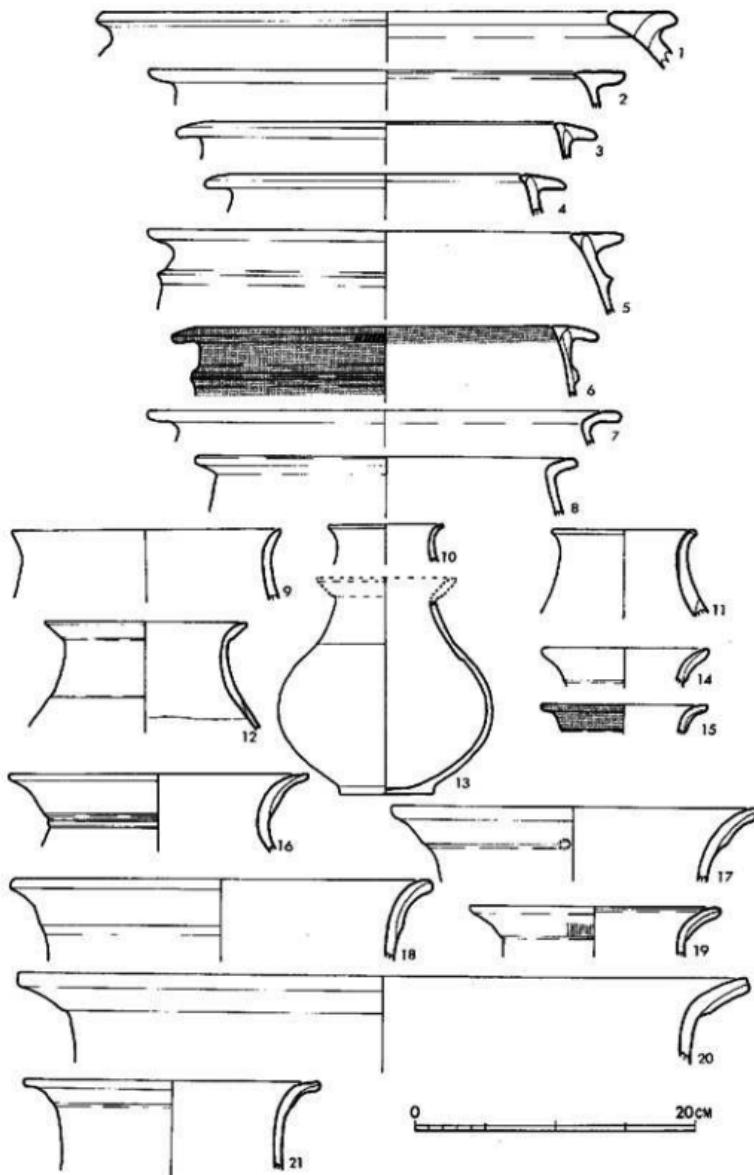


Fig. 2-29 包含層出土器実測図 (5)

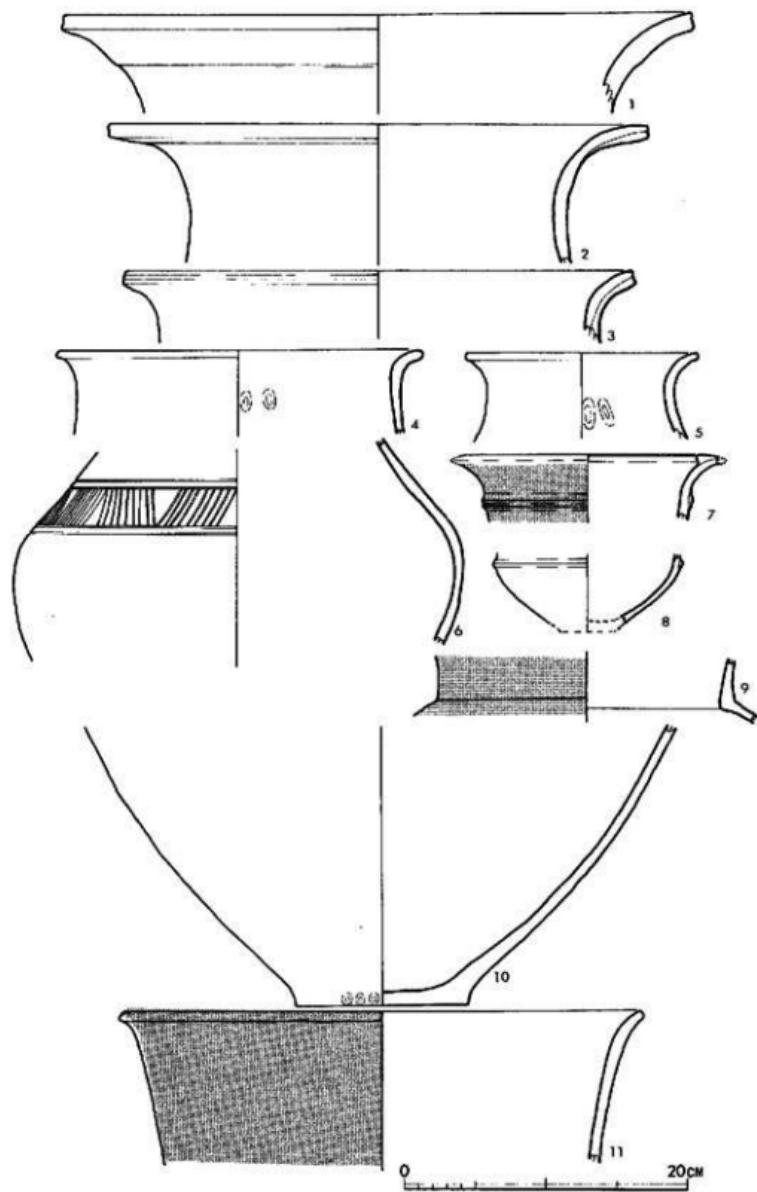


Fig. 2·30 包含层出土土器实测图 (6)

と、口縁下に刻目突帯がつけられる。口縁部は刻目突帯とはいえ外への発達が強くまた内端も若干発達する。外端は低くなる。前葉でも古いたイタイプである。2・28, 15~18は逆「L」字状に近くなるが口縁の内外への発達は小さい。いずれも口縁部横なので、前期の上器に比べ、焼成が良く赤褐色の系統の色が多くなる。2・29, 1は「T」字状口縁をもつ大型のもので、腹板破片の可能性がある。2・29, 2~6はいわゆる逆「L」字状口縁をもつもので中期中葉宝台I式に比定できよう。口縁部が水平になるもの(2・29, 2, 5)、外端が下がるもの(2・29, 3, 4, 6)がある。2・29, 5は口縁下に一条の三角突帯、2・29, 6は「M」字状突帯を巡らす。後者は口縁下端に刻目を施し、外面および内面口縁下に丹塗り。いずれも口縁部および突帯の貼り付け部位は横なので調整。2・29, 7, 8は「く」の字状に口縁部が外反する。弥生時代中期後葉の宝台II式である。

臺 (Fig 2・26, 2・29, 9~21, 2・30, 1~11) 2・28・1~3、2・29・8~11は夜臼式の臺であろう。いずれも内傾する口縁部の端が外反する。2・28, 3は内外面とも丹塗り。黒褐色を呈するものが多く、大部分が鏡で磨研されている。2・30, 4~9、2・28, 12~17, 19は板付I式であろう。2・28, 4, 5は外反する口縁部の直下に沈線が巡る。2・29, 12, 14~17, 19は口縁部が肥厚し外面口縁下に段がつく。2・28, 13は口縁部を欠くが、やはり同様の口縁部をもつものであろう。底部はいわゆる円盤貼り付けと思われる。2・29, 16は口縁外面の段の下に一条の沈線が巡る。2・28, 17の口縁外面の段部には種子(種類不明)の圧痕がつく。2・28, 19の外面には綫刷毛目調整。いずれも口縁部は横なので調整。2・28, 10~26, 2・29, 18, 20, 21、2・30, 1~6は板付II式であろう。2・28, 10は短い口縁部をもつ無頭臺で、羽状文は貝殻腹縁で施される。2・28, 11は肥厚する口縁をもつが、段は内面につき、しかもその下に蓋受けらしき一条の鋸くない三角突帯が巡る。この土器は遠賀川を中心とした北九州にはみうけられるが、福岡平野では非常に少ない。2・28, 13, 15は羽状文をもつ。2・28, 16~28は頭部・肩部に1~4本の沈線をもつ。2・29, 18, 20, 21、2・30, 1は口縁部が肥厚し、外面に段をもつが、板付I式に比較して、口縁部の発達が強く、器形も鋸さが少くなる。2・30, 2~5の口縁部は肥厚しない。2・30, 4, 5の内面には指の押圧痕がある。2・30, 6は肩部の上下2本の沈線の間に9本単位の複線八字文がつけられるが器形的にみて板付II式であろう。いずれも口縁部は横なので調整。板付I式はII式に比較して大型のものが多くなる。2・30, 7~9は中期の臺である。2・30, 7は短い動状口縁をもち、頭部に一条の「M」字状突帯を巡らす。外面丹塗りで、全体的に横なので調整。2・30, 8は胴部破片で一条の三角突帯を最大深部に巡らす。2・30, 9は外面丹塗り。2・30, 7は中期後葉、他は中期前葉であろう。2・30, 10は大型の臺の低部で、底部外面に指の押圧痕がある。板付II式のものであろう。2・30, 11は大型の鉢か、深鉢形土器であろう。前期のものである。

(iv)

5. 出土石器・土製品 (Fig 31~35, Tab 2・2)

本地点はH-5地点と隣接し、両地点とも上層堆積状態は満足なものとはいえないが、包含遺物全体からみて、弥生前期から中期前葉と考えられる良好な資料を得た。以下63点について略述する。

石斧類 (Fig 2・31)

抉入石斧 (1) 褐色珪質シルト岩製の完成品で、体面は表裏とも入念に研磨されている。断面は蒲鉾形で、70°弱の刃部がつけられており、刃部には刃と直角に走る擦痕がみられる。刃部巾2.5cm、器長12.4cm、最大厚さ3.85cm、重さ263g。

扁平片刃石斧 (2~4) 3点とも灰白色粘板岩製で、1点のみが完形で他は欠損している。2は刃部2.5cm強で器長9.4cm、厚さ1.9cm、刃角45°、重さ120gである。3は頭部と刃部の一部が欠損しているが、刃部巾約1.5cm、刃角40°の方柱状片刃斧である。3は暗灰砂層、4は灰褐色砂質土層出土。

蛤刃石斧 (5~11) 5は石英質中硬質中粒砂岩製、6は閃綠岩製、7は輝綠岩製、11は玢岩製で、8~10は今山産出玄武岩製である。5~7は頭部片で、敲打整形後入念に研磨されている。8~10は大型蛤刃石斧で、8は刃部を欠損しているが734gあり、推定器長は20cmを越えよう。11は刃部で断面は卵形をしている。8~10は黒色粘質土層出土。

収穫具 (Fig 2・32, 12~18)

石庵丁 (12~16) 12のみが完成品で他は未製品である。12は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の刃部片で、両刃の刃部・体面とも入念に研磨されている。なお穿孔は表裏から行なわれている。13・14は板状剝片の縁部に剥離加工を加え刃部をつくり出しているが研磨は加えられていない。15は剥離加工を加えて、半月形に整形し、穿孔を試みているが貫通していない。16は板状剝片の縁辺に剥離加工を加え整形している。13は灰褐色砂質土層、12・14は灰褐色粘質土層出土である。

石鎌 (17・18) 17は裏面が剥離しており形状は分らないが刃部が内弯するものと思われる。18は体面は研磨されているが、分厚く石斧とも考えられる。

利器 (Fig 2・33, 2・34, 2・35, 58, 64)

磨製石鎌 (24~26) 24は扁平で、裏面の両側に稜がある有茎石鎌で推定器長は4.5cm、巾1.55cm、厚さ0.3cm、重さ1.65gである。25は粗砂硬砂岩製の有茎石鎌で中央部に鏽があり断面は菱形を呈している。2点接合で重さは7.53gである。26は暗褐色珪質泥岩製の有茎石鎌の茎で断面は菱形である。重さは0.93g。24は灰褐色砂層、25は暗灰粘質土層、26は黒色粘質土層出土。

打製石鎌 (27~36) 27は良質の黒曜石製の三角鎌で重さは0.87gである。28は古銅輝石安山岩製の無茎石鎌で表裏とも入念に剥離加工が加えられており基部は内弯している。重さ0.7g。27は良質の黒曜石製の剥片を素材とし、表裏とも粗い加工で整形しているが、自然面の打面は未加工のままであり未製品とも考えられる。重さ1.7g。30は良質の黒曜石製の三角鎌で表裏とも入念に剥離加工が加えられている。重さ0.3g。31も黒曜石製で基部にはやや抉りが入っている。重さ0.63g。32は良質の黒曜石製の剥片を素材として、先端部縁辺に剥離加工を加え鋒を

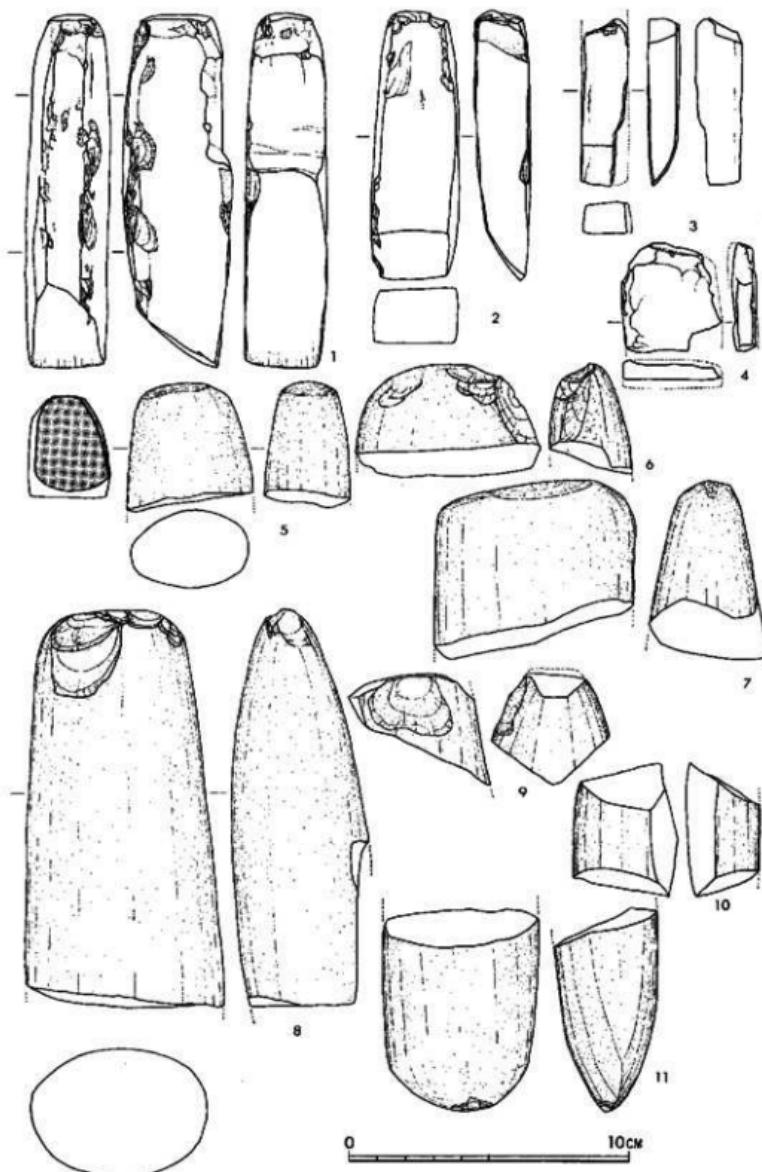


Fig. 2-31 G-H-5 地点出土石器实测图 (1)

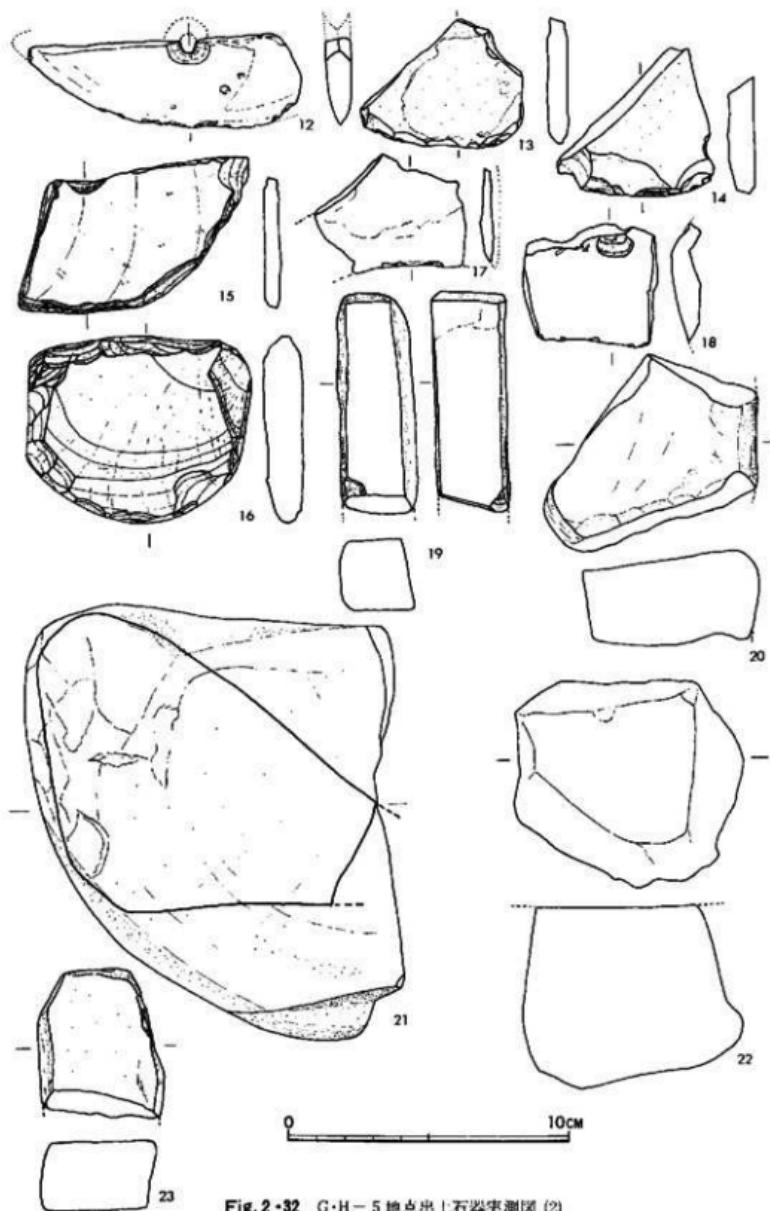


Fig. 2-32 G-H-5 地点出土石器实测图 (2)

つくり出している。重さは3.8g。**33**は黒曜石製剝片に粗い剝離加工を加え二等辺三角形に整形している。重さ2.37g。**34**は気泡の多い黒曜石製剝片を素材として表裏とも入念に剝離加工を加え整形しているが左右対称ではない。重さ2.3g。**35**は古銅輝石安山岩製で、入念に剝離加工が加えられ縁辺は鋭利になっており、基部は内弯している。重さ2.5g。**36**は玄武岩製で、表裏とも入念に剝離加工が加えられ、基部は快りが入り、先端部は丸くなっている。重さ1.4g。**27**は表表、**28・29**は灰褐色砂質土層、**30・31**は暗灰砂層、**32**は暗褐色砂層、**35**は黑色粘質土層、**36**は柱穴状小ピット出土である。

石錐 (40) 黒曜石製剝片の先端部に表裏から二次加工を加え、錐部をつくり出しているが、先端部は欠損している。暗灰粘質土層出土。

スクレイパー (53~57) **53**は石英片岩製で表裏とも剝離加工を加え整形しており、基部は内弯し、つまみもつくり出されており、小型の石匙である。重さ3.75g。**54**は古銅輝石安山岩製で、縁辺に表裏から二次加工を加え、刃部をつくり出している。**55**は今山産出玄武岩製剝片の両縁辺に裏から二次加工を加え、角度のある刃部をつくり出している。**56**は橄欖石玄武岩製の蛤刃石斧の破損品を利用し、角度の鋭い刃部をつくり出している。両刃器といえよう。**57**は玄武岩製で、表裏から粗い剝離加工を加えている。**54**は灰褐色粘質土層、**55**は暗灰砂層出土である。

サイド・ブレード (44) 気泡の多い黒曜石製剝片を素材として、表裏とも入念に剝離加工を加えて半月形に整形している。組合せ石器の存在を考えねばならない。重さ0.6g。

石劍 (58) 黒色粘質シルト岩製で体面は入念に研磨されているが、刃部はつぶれており、模造品とも考えられる。

使用痕ある剝片 (U・フレイク) (37・42・43) **37・42・43**は黒曜石製剝片の縁辺の一部に二次加工を加え、第一次剝離面には、刃こぼれがみられる。**37**は暗灰粘質土層、**42**は黑色粘質土層、**43**は第2号溝出土である。

剝片 (38・39) 2点とも良質の黒曜石製で打面が残っているが、**38**は寸づまりで、**39**は継長である。**38**は灰褐色砂質土層、**39**は黑色粘質土層出土である。

つまみ形石器 (41) 黒曜石製の継長剝片の両縁辺中央に表裏からノッチ状の二次加工を加え折られている。通称つまみ形石器と呼ばれ、剝片鍛製作のための残存物と考えられている。

敲打器 (61) 玄武岩製で、表裏に剝離加工が加えられ、周縁部は研磨されており、敲打痕がみられる。重さは148gで、灰褐色砂層出土である。他にも黑色粘土層から同種で、112gのものが出土している。

土製投擲 (64) 手づくねで紡錘形に整形している。暗灰色を呈し、胎土には微砂粒を含み緊緻で、焼成も良好である。灰褐色砂層出土。1部欠損しているが、重さは11.6gある。**30~50g**の小円盤も多数出土している。

漁獵具 (Fig. 2・35, 60, 65, 66)

石錐 (60) 滑石製で削りによって扁平に仕上げ、周縁部は研磨されている。表面には、二条の浅い溝があり、右の溝の上部に表裏からの穿孔が施されている。ここでは石錐として扱か

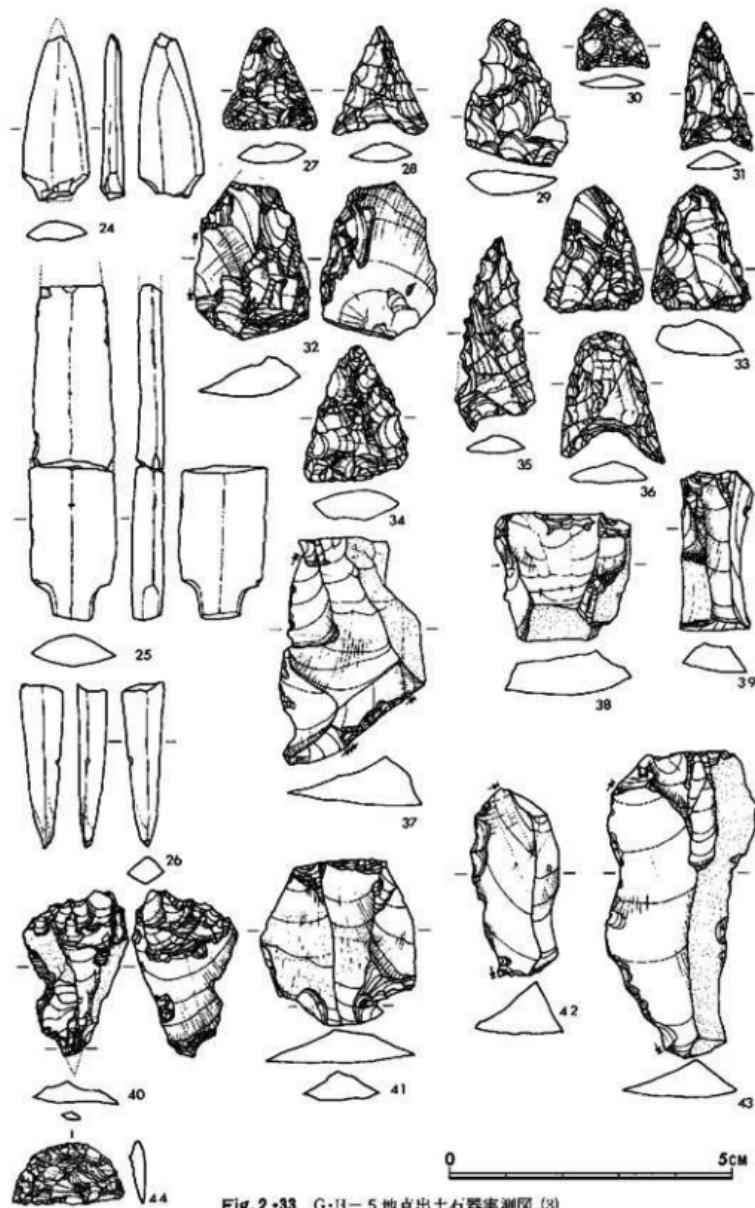


Fig. 2-33 G·H-5 地点出土石器实测图 (3)

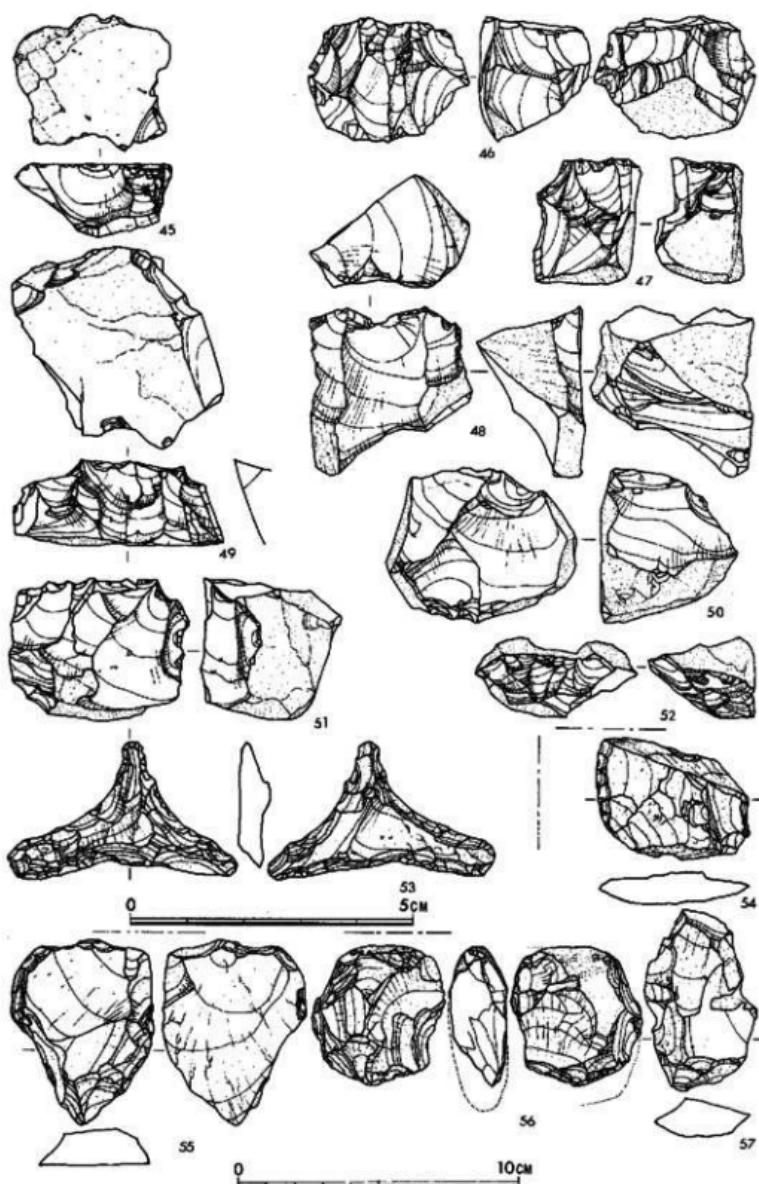


Fig. 2-34 G-H-5 地点出土石器尖端图 (4)

ったが、勾玉木製品の可能性がある。重さは72.53gで黒色粘質土層出土。

土錐 (65・66) 65は手づくねで扁平橢円に整形し、表から棒状工具で廿玉状に穿孔し、同工具で糸懸のための溝が両端にもうけられている。褐色から黒灰色を呈し、胎土には石英・砂粒が含まれており繊維で焼成も良好である。重さは27.38gで灰灰砂層出土。66も同じものであるが、寸は欠損しており、重さは19.4gである。

その他 (Fig. 2・32, 19~23, 2・34, 15~52, 2・35, 59, 62, 63)

石皿 (21) 砂岩製で、表は少し凹み、裏面には溝状の砥面があり側面も砥面となっている。黒色粘質土層出土。

砥石 (19・20・22・23) いずれも砂岩製で19・23は方柱状になっており、砥面は表裏である。20は黒色粘質土層、22は灰褐色砂層出土である。

磨石 (62・63) 円盤の表面が磨かれている。62は黒色粘質土層出土で、隈丸長方形。63は円形である。

石核 (45~52) 全て黒曜石角礫を素材としており、45・47・49・52は平坦な自然面を打面としている。全て2cm内外の剥片が剝離されている。

鏡模造品 (59) 滑石製で削りによって円形に整形し、周縁部は研磨している。中央部には鋸帯部がつくなっているが、欠けている。重さは16.6g。

以上63点の出土石器・土製品を大まかに用途別に、利器・収穫具・漁獵具・その他と分け、利器の中で石斧のみを石斧類として独立させた。^① 1号溝から石錐・方柱状片刃石斧が出土しているが、流れこんだものであり、他は全て包含層の出土である。石斧類としては、抉入片刃石斧・扇平片刃石斧・方柱状片刃石斧(彫形石器)・大型蛤刃石斧・蛤刃石斧が出土している。片刃石斧は堆積岩で、しかも外国産出と考えられる石材を用いており蛤刃石斧が国産の堆積岩・火成岩を石材として選択していることは弥生期の北部九州の遺跡と共通している。^② 今山產出玄武岩製大型蛤刃石斧は^③ など5点出土しているが、いずれも前期包含層出土で昨年までの板付遺跡調査と同じ結果が出た。また全て成品であり未製品はないが、55のように今山產出玄武岩を用いた搔器があり、原石材もわずかであるが搬びこまれた可能性もあるようである。収穫具としては石庖丁・石鎌が出土している。石庖丁の成品は1個であるが、立岩產出凝灰岩を含む脇野亞層群中からホルンフェルスが石材として用いられていることは興味がもたれる。また成品は1点のみで未製品が5点出土しており、15は研磨より先に穿孔が試みられている。

利器としてあげたものでは石錐が一番多く14点出土している。内磨製石錐が3点であり他は打製石錐である。前者は全て有茎石錐で堆積岩を用いており、後者は無茎石錐で黒曜石製が8点、古銅輝石安山岩製が2点、玄武岩製が1点である。磨製石錐は有茎石錐であるが3点とも茎の形状が異なり、24は不定形、25は六角形、26は菱形で前期包含層出土であるが他2点の時期が分らないのが残念である。打製石錐は基部が内弯するものが28・31・35・36・1号溝出土の

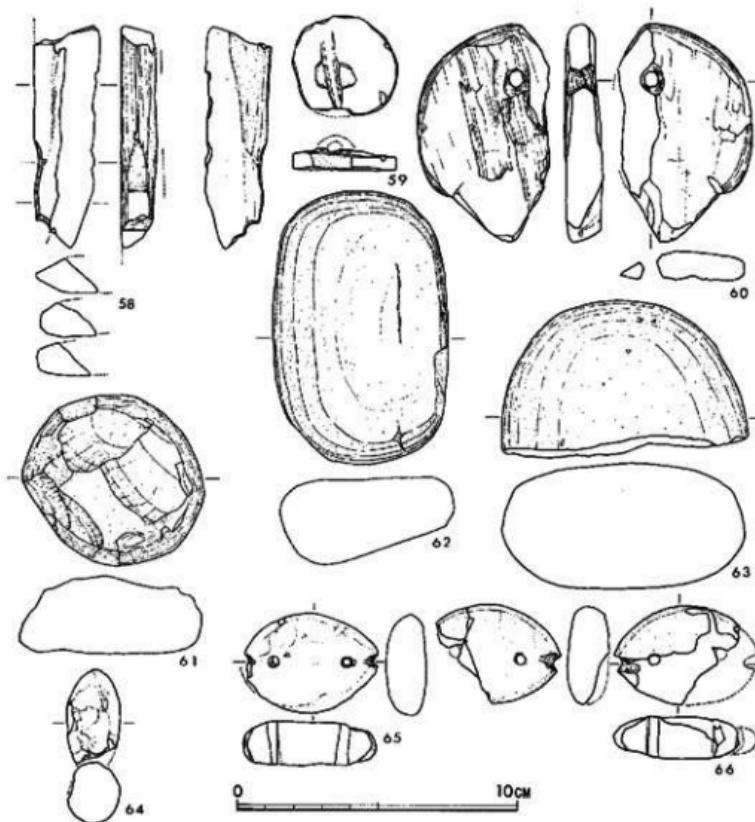


Fig. 2-35 G-H-5 地点出土石器・石製品・土製品実測図

ものと 5 点で、三角鐵が 27・30・33・34 の 4 点であり、29・32 は未製品と考えられるが使用された可能性が強い。打製石鐵の重さは 30 の 0.3 g から 2.37 g まであるが、0.7 g 前後か 27・28・31など 4 点、1.3 g 前後が 35・36 の 2 点、約 2.3 g が 33・34 の 2 点である。他の遺跡でも 1 g 前後の重さをもつものが最も多く、本地点出土のものと一致している。スクレイバー類は 54・55・57 のように火成岩が用いられている。黒曜石製の縦長剝片も 37・42・44 のように一部に加工を加えており、スクレイバー的な用途をもつと思われる。又 44 のような器種があることは同遺跡で夜白式土器以前の上器が出土しないことと考え合せれば弥生時代にも切断具としての組合せ石器の存在もありえよう（弓矢として使用された可能性もある）。

漁獵具として明確なものは、65・66 の土錘が出土している。他に類例をみないが、H-5 地点で 1 点出土しており、本遺跡の弥生時代の一時期に作られ使用されたものかもしれない、用途

としては重さが27g前後あり、2ヶ所に穿孔があり両端に切口がある所から数個を繋ぎ合せて、

としては重さが27g前後あり、2ヶ所に穿孔があり両端に切口がある所から数個を繋ぎ合せて、網の下に括りつけ垣網として用いたと考えられる。

他に石錐（勾玉未製品？）が出土しているが、器種・用途とも不明である。

本地点で時期が確実に分るのは黒色粘質土層出土のものが、弥生時代前期末で、他の層は中期後葉までの土器、須恵器などが出土しており、各時期の石器をセットとしてとらえることはできなかったが、ほとんどの石器・土製品が前期末から中期前葉のものといえる。^⑤ (山田正道)

註1 利器は全ての遺物に共通するが、ここでは飛沫具・削器・搔扒などの刮片石器と砾器を挙げる。

註2 a 下米信行 (1976) 西日本史学会研究発表による

b 石材の鑑定は太田正道氏による。

註3 佐藤直樹 (1976) 板付

註4 高倉洋彰 (1973) 鹿児島山道跡 同書の中で、木村幾多郎氏は石製穀縛具としており、器種名として石製穀縛具と呼称するのが適当と思うが、今までの名称に従った。

註5 通鑑（住居址など）のセットの意ではなく、前期・前期末・中期前葉など各時期の石器類・石製品類・土製品の意味で使った。

註6 赤峰敏男氏より「鉢の鏡模造品は、石鍋の再利用品であり、古代から中世のものである。」という教示を得た。

Tab 2-2 G-H-5 地点 出土石器・石製品・土製品一覧表(石材鑑定は太田正道博士による)

No.	器種	石材	層位	備考	Fig.	PL.
1	抉人片石斧	褐色粘質土層	重さ 263g	2-31 VI		
2	圓平片石斧	灰白色粘質土層	重さ 120g	*	VI	
3	刮削片石斧	暗灰色砂層	*			
4	圓平片石斧	深褐色砂質土層	*			
5	船形石斧	硬質中粒砂岩	*			
6	*	鐵	岩黑色粘質土層	*		
7	*	鐵	岩	重さ 247g	*	
8	女形片石斧	今山産出玄武岩	重さ 734g	*	VI	
9	*	*	*	*		
10	*	*	*	*		
11	船形石斧	岩	重さ 228g	*		
12	石 瓶	安山岩質複合岩 カルノンカルカス	灰褐色粘質土層 重さ 33.6g	2-32 VI		
13	石製品	*	灰褐色砂質土層	*		
14	*	*	灰褐色粘質土層	*		
15	*	灰褐色粘質土層	*	*	VI	
16	*	*	*	*		
17	石 繩	? 安山岩質複合岩 カルノンカルカス	*			
18	*	灰色細粒砂岩	*			
19	石 砂	岩	*	*		
20	*	*	黑色粘質土層	*		
21	石 砂	*	*	*		
22	透 石	*	灰褐色砂層	*		
23	*	*	*	*		
24	漆 製 石 錐	黑色粘板岩	灰褐色砂層 重さ 1.7g	2-33 VI		
25	*	粗粒塊状岩	灰褐色粘質土層 重さ 7.5g	*	VI	
26	*	暗褐色粘質岩	無色粘質土層 重さ 0.9g	*		
27	打 製 石 錐	黑 磨 石表	無色 重さ 0.9g	*		
28	*	古銅鑄石安山岩	灰褐色砂質土層 重さ 0.7g	*		
29	(未製品) 黒 球 行	*	重さ 1.7g	*		
30	打 製 石 錐	暗灰色砂層	重さ 0.3g	*		
31	*	*	重さ 0.6g	*		
32	(未製品)	*	暗褐色砂層 重さ 3.8g	*		
33	打 製 石 錐	*	重さ 2.4g	*		
34	打 製 石 錐	黑 球	石	重さ 2.3g	2-33	
35	*	吉野葛石安山岩	黑色粘質土層 重さ 1.3g	*	VI	
36	*	*	224号小堅穴	重さ 1.4g	*	VI
37	U フレイク	黑 球	石	重さ 0.4g	*	
38	刮 片	*	灰褐色砂質土層	*		
39	U フレイク	*	黑色粘質土層	*		
40	石 锤	*	暗褐色砂質土層	*		
41	つまみ石若	*	褐色粘質土層	*		
42	U フレイク	*	*	*		
43	*	*	第2号溝	*		
44	ヤギド・ブライド	*	有機質 重さ 0.6g	*	VI	
45	石 核	*	灰褐色砂層	重さ 2.3g		
46	*	*	*	*		
47	*	*	*	*		
48	*	*	暗褐色粘質土層	*		
49	*	*	*	*		
50	*	*	灰褐色粘質土層	*		
51	*	*	*	*		
52	*	*	黑色粘質土層	*		
53	動石 美 片 柄	*	重さ 3.8g	*	VI	
54	削 器	*	灰褐色粘質土層	*		
55	鍬 器	今山産出玄武岩	灰褐色砂層	*		
56	*	鐵製石立式岩	重さ 55g	*		
57	*	*	*	*		
58	漆 製 石 刷	黑色粘質土層	重さ 39.6g	2-35		
59	鏡 構 造 品	石	重さ 16.6g	*	VI	
60	石 瓶 (2-35)	滑 石 片	暗褐色粘質土層 重さ 72.3g	*	VI	
61	敲 打 器	暗褐色細粒砂岩	褐色砂層 重さ 148g	*		
62	磨 石	*	黑色粘質土層	*		
63	*	花崗岩?	*	*		
64	投 弾	漆灰褐色砂層	重さ 11.6g	*	VI	
65	鉛	漆灰褐色砂層	重さ 27.4g	*	VI	
66	*	*	重さ 19.4g	*	VI	

VII まとめ

G・H-5 地点では以上の様な検出遺構・遺物から弥生時代前期前葉以来の人々の生活が知られる。

地形上同地点は地山標高約7.6m付近を境として丘陵を構成する赤褐色ローム（鳥栖ローム）が削平されており、この事は同時に調査された隣接するH-5 地点でも同様であって、居住を示す遺構の分布もほぼこれに一致している。また前のG-5 a 地点（山口1976）で検出された弥生前期竪穴遺構・土塙墓等とも一連のものと考えられ、環溝構築前後の状態が窺える。

一方1971~74年に行なわれた小学校用地（後藤・沢1976）の調査では前期~中期の諸遺構群の南端は崖状となってほぼ東西に流れる旧河川の存在を考えさせたが、近接するこの地点の北側トレンチの土層はいずれも植~植壤土であって過去の穀やかな堆積が知られるのみで、同河道との関係は認めなかった。そして地山上に堆積する前期包含層である黒色粘質土層は板付丘陵北端部の斜面部分一帯にひろがっていることが予想される。

また中期中葉になると不明溝状遺構とともに西側H-5 地点で中期後葉の溝・樋状遺構等の水利遺構が検出され、この付近が同時期の板付「ムラ」の人々の生産活動の範囲にあったことが明らかになった。

(横山)

文献

- 小田富士雄編 (1974) 危ノ甲遺跡 福岡県八女市室園の弥生遺跡調査既報1963冬 八女市教育委員会
- 後藤武・沢賀臣編 (1976) 板付 市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971~1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 高倉洋彰編 (1973) 鹿部山遺跡・福岡県柏原郡古賀町所在遺跡群の調査報告―日本住宅公団
- 森貞次郎・岡崎敬 (1961) 福岡県板付遺跡 日本農耕文化的生成
- 山口龍治編 (1976) 板付周辺遺跡調査報告書 (3) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集

第3章 H-5 地点

I 調査概要

板付古地は、昨年度迄の調査によって、現在の板付北小学校迄延びており、台地の西側は沖積地が確認されている。本地点はG・H-5地点と幅5mの道路を挟み隣接しており、台地際をとらえること、台地際の生活の場のありかたがどのような状態となっているかを主たる目的として行った。

調査は台地際の可能性が高く、宅地化のため盛土が行なわれており、さらに盛土の崩れを防ぐため石垣が築いてあったので、区画にそって、4m×10mと4.5m×17mの発掘区を鎌形に設定した(Fig. 2-1, 3-1)。まず盛土を除くことから始め、耕土・褐色粘質土～暗褐色土を除くと、東隅に、鳥栖ロームが存在することが確認できた。台地は、北と西へゆるく傾斜しており、西側で杭列を共なう溝状の遺構が確認されたので、北側に5m×8mを拡張した。

土層は傾斜面の堆積のため、複雑な状態をしめしていたので以下のようにまとめた(Fig. 3-2)。耕土層の下の、褐色～暗褐色～灰色粘質土層を第1層とした。第1層の下は、暗褐色～灰色土・褐色～灰黑色粗砂・暗褐色～灰色の砂層が剥し身状に堆積していたので一括して第2層とした。第2層の下は、灰黑色粘質土層・黒色粘質土層・ローム層と堆積していたので、順番に3・4層とした。第1層迄は、磁器が出土し、第2層は弥生時代中期の遺物が大半をしめたが、数片の上師・須恵器も出土している。遺構としては、ローム層まで掘り込んだ弥生時代の小甃穴5基・第3号溝など南北に走る3列の溝状遺構・第2層中からロームまで打ち込んだ杭列が確認された。

遺物としては、夜白式土器・弥生式土器・抉入石斧などの石器・土鍬・投弾などの土製品・勾玉などの石製品・鉤などの木器が多数出土した。

以下、遺構・遺物について詳述することにする。

(iii)

II 遺構と出土遺物

1. 第1号竪穴 (Fig. 3-1, 3-3)

台地の西側に位置し、約80cm×70cmの不整形で、深さ31cmを測る。ローム層の上質は粘質で軟らかく、壁の崩落が大きく、原状をとらえ難く、遺構の性格も明確にできない。

遺物 木製脚付容器を出土しているが、詳細は後述の木器の稿で述べる。

2. 第2号竪穴 (Fig. 3-1, 3-3)

第1号竪穴に接して、約1m×0.8mの不整形で、深い所で29cmを測る。原状では1号竪穴とは切り合っていない。遺構の性格はわからない。

遺物 総数50片ほど出土したが、ほとんどが小破片である。1は甃で外面には甃のなでがみられる。2・3は甃の口縁と底部である。これらは砂粒を含み、焼成良好で器表は黄褐色～灰褐色を帯びる。1～3は板付II式であろう。他の破片も前期と考えられる。

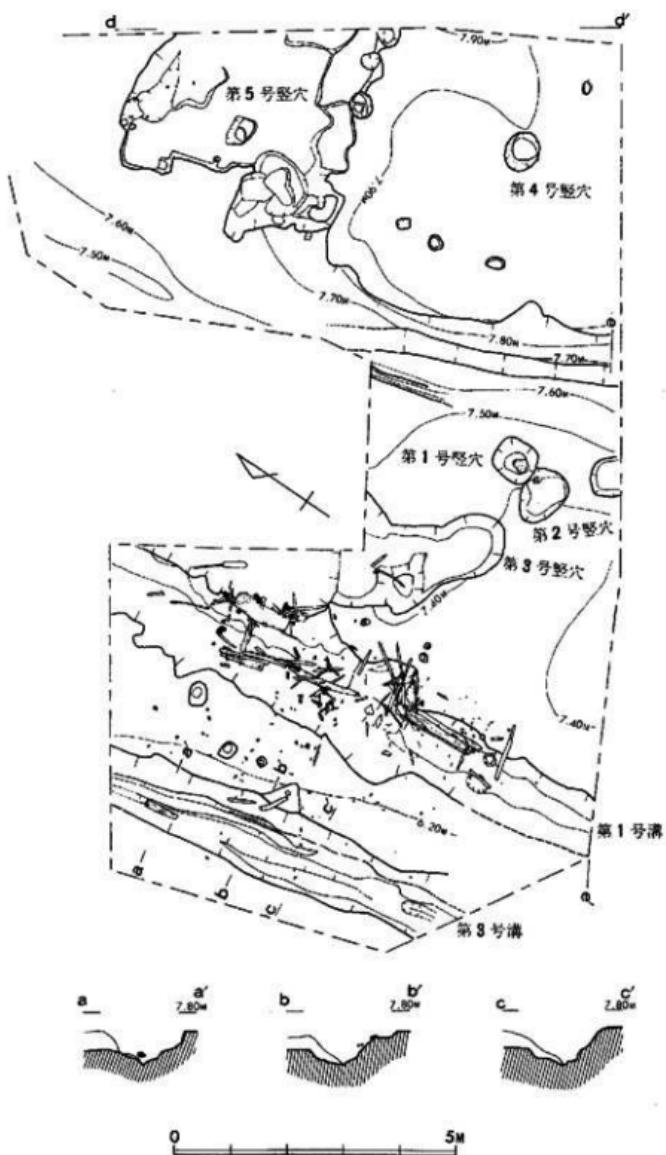
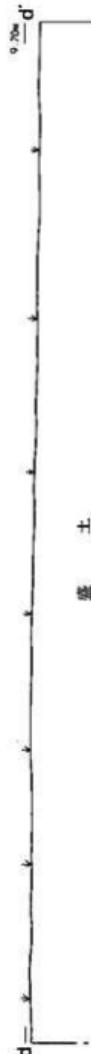


Fig. 3・1 H-5地点全体図(1/100)



盛 土

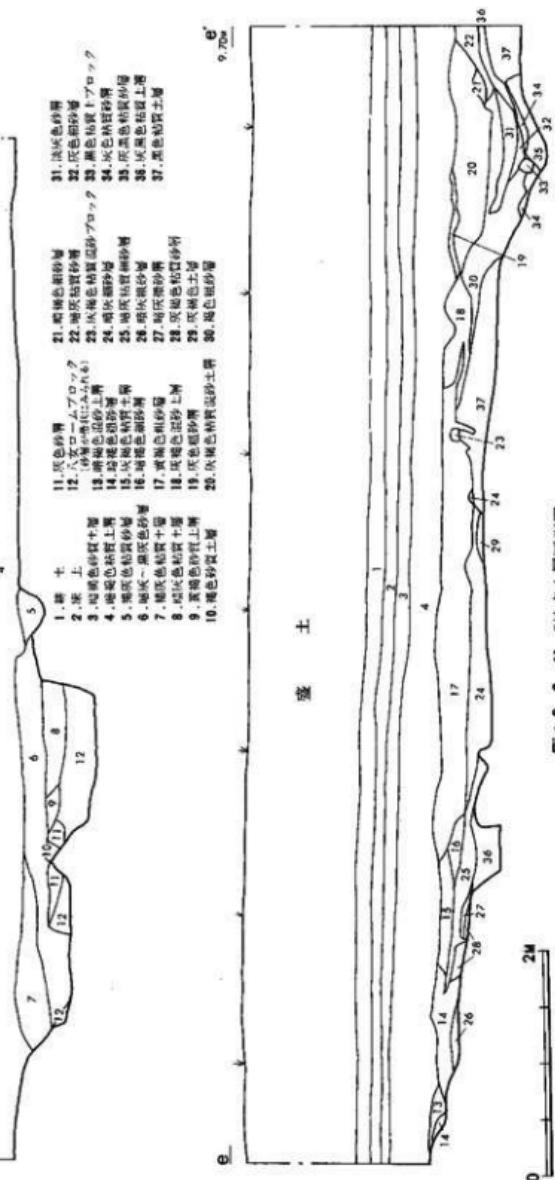


Fig. 3·2 H-I点土壤剖面图

以上から竪穴の時期は弥生時代前期と考えられる。

3. 第3号竪穴 (Fig. 3・3, 3・4, 3・5)

第1号竪穴、第2号竪穴の西側に位置し、現状では楕円形状をなしているが、ローム層が軟弱で、原状を失っている。北側では1号溝東側の掘り込みにより、遺構を切られている。

遺物 遺構内上部では流れ込みと考えられるので床部出土の土器を抽出した。4は壺で器面は横なで調整。5は指押えと刷毛目調整を施している鉢であろうか。6は甌である。胴下半を欠くが、如意状口縁部は横なで調整、口縁端には櫛状器具で刻目を施す。口縁下には断面V字の沈線を1条巡らし、外面に刷毛目調整を施しており、肩部には煤の付着がある。7は壺で、外面に小さな屈曲がみられる。11は逆L字状口縁で、口縁端が垂れる。口縁部は横なで調査で、

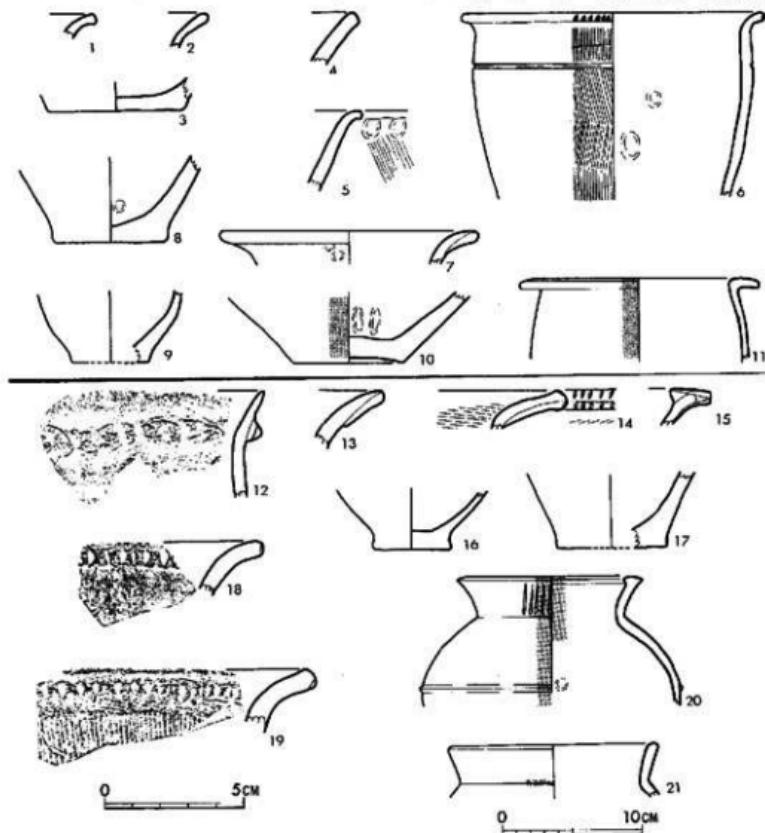


Fig. 3・3 遺構出土土器実測図

1~3-2号竪穴 4~11-3号竪穴 12~4号竪穴
13~20-5号竪穴 21-3号溝

外面は籠による横磨研調整。丹塗りである。8は内面に煤が付着している。9は口縁部を欠くが、器面はなで調整。10は外面を籠の縦磨研、内面はなで調整を施しており、丹塗りである。以上の上器は、微～粗砂粒を含み、焼成は良好で器表は黄褐色・暗褐色を帯びる。4～7は板付II式。8～10は中期中葉～後葉。11は中期後葉である。

以上から豊穴は弥生時代中期後葉に比定できよう。

4. 第4号豊穴 (Fig. 3・1, 3・3)

台地上に位置し、平面形は楕円形で底部は平坦、西側では壁が袋状に立ち上がる。深さ約60cmである。造構の性格は不明。

遺物 総数30片程出土している。12は刻印突帯が、口縁端より下方に位置する。器面は少し荒れている。細砂粒を含み、焼成良好で器表は灰褐色を帯びる。他の上器は細片であるが、すべて前期のものである。

以上から豊穴の時期は弥生時代前期を下らないものと考えられる。

5. 第5号豊穴 (Fig. 3・1, 3・3)

台地北側に位置し、平面形は不整形で、凹凸が多く、明確に造構としてはとらえ難く、造構としての性格も不明である。

遺物 上器百数十点と凹石が1点出土している。13は壺で外面を棒状器具で、横磨研調整。14は腰で口縁端の上下に2列の刻目を巡らしている。器面は刷毛目調整後、なで調整を施している。15は器面を横なで調整。荒れが目立つ。16は如意状口縁の口縁端に刻目を巡らす。19は口縁端の下部に刻目、外面に縱と斜めの刷毛目調整を施している。20は胴下半を欠くが、短く立ちあがる口縁部は横なで調整。胴部突帯部も横なで調整。器面は籠の横磨研調整。頸部には丹塗り暗文が巡っている。16・17は前期の壺と腰である。粗～微砂粒を含み、焼成良好。黄褐色・灰褐色・赤褐色を帯びる。18は板付I式。13・19は板付II式。14・15は前期末～中期初頭。20は中期後葉である。

以上からこの豊穴は弥生時代中期後葉と思われる。

(解)

6. 第1号溝状造構 (Fig. 3・4, 3・5, Tab. 3・1)

台地は、台地際からゆるやかに傾斜をもちながら沖積地へ入っている。第1号溝状造構（以下第1号溝とする）は第3号豊穴と接し、第3号溝の東側に位置している。幅1.5m前後、深さ85cm前後の溝で、発掘区では南方から北へ流路をとって、灰黑色粘質土層から八女粘土層まで掘り込んでいる。内部堆積は、暗褐色～灰色の砂層・混砂層・粘質土層が、灰黑色砂質粘土層の上にレンズ状に堆積している。

出土遺物は夜白式土器から弥生時代後期前葉までの土器片・抉入石斧等の石器・投彈等の土製品・三叉鋤等の木器が多数出土したが、いずれも流れ込んだものと考えられる。土器は上層で弥生時代後期前葉の土器片が出土しているが、弥生時代中期中葉から後葉のものが圧倒的に多い。夜白式土器・弥生時代前期の土器・抉入石斧（203）等は、弥生時代前期の包含層を掘り込んだ際に混入したと考えられる。木器は二叉鋤（W-3）・三叉鋤（W-2）・鋤（W-4・5）・臼（W-7）・槌（W-8）が出土しているが、流木等と共に付設の造構にたまたまも

のと考えられる。なお、猪の歯も出土している。

付設造構は発掘区中央にかたまり、南側に樋状造構と土どめの役目をしていると考えられるスサの束があり、北側には板の組合せによる土どめ造構、溝補修造構がある。

樋状造構

溝中央部南に、溝底より少し上に流路にそって付設されている。42~46の5枚の板からなり、42・43が44~46の3枚の上にある。42は長さ1.3m・幅20cm前後で弓なりになり、東側で43と重なっており、43は斜めになって42に入り込んでいる。下の板は44・48が長さ1.6m・幅20cm弱の板で、長さ1.1m・幅12cm前後の板(45)に各々重なっている。42・43の境目に49~52の杭が打ち込まれている。いずれも径4cm前後の細い杭で、51以外は下板に貫通していない。また西側では1本の杭(55)が打ち込まれており、下板まで貫通している。以上から付設当時は、45を下板として44・46の板を斜にし、重なる部分の左右に短い杭をならべて、42・43の板を傘のようにのせ、五角形の空洞をつくり樋としたと考えられる。また、44・47・48の板材も樋を形づくったものと考えられる。なお、樋板には、シイノキ、栗の板材を用いている。

以上から、樋の付設は溝築造より、少し遅れ溝と接している北側の凹みに水を溜るためにもうけられたものといえる。

溝補修造構

補修造構は、第3号竪穴との境日補強のためもうけられたものと、八女粘土層が軟弱なために、土崩をなくすために付設されたものがある。

第3号竪穴が北側で深くなり、第1号溝と接しているため、東側の上場が無くなっている。そこに225の板状材や流木を重ねて、さらに、径10cm弱、長さ1.1mの横杭(224)をさして粘土で固め、径35cm前後、長さ1mの丸木(273)をのせて、10・214~220の8本の丸杭で、丸木を固定している。丸杭は215が径約10cm、長さ1.8m弱で、地山に1mも打ち込んでいる。他の杭も50cm前後打込んでいる。なお、214はモチノキ、10・215、216・218はシイノキ、217はタブノキ、219はカシ、220はエノキの直線的な丸木を用いている。

上どめは前記造構の西側の壁に板を組合せて用いられている。まず長さ60cm、幅20cm弱の板(181)を横にして壁に張りつけ、上に長さ90cmの板(182)を重ね、さらに180の板を重ねて151の板を縦に立てかけて、おさえている。151は183・184の板でおさえしており、180・183は、181~183の3本の丸杭で止めている。なお板材はシイノキを用いている。発掘時は溝の肩部下半にあたるが、188・189などの壁補強と考えられるため、溝上場まで補強されていたと考えられる。また187は186と重なり、接合面に加工を加え、密着するようにしてあり、丸木の下の粘土によって固定されているところから、西側の補強は第3号竪穴との境日補強と同時に実行なわれたと考えられる。

他に溝中央部より南側にスサを敷いているが、これも壁補強と考えられる。

杭群

106本の杭があり内わけは、丸杭51本・板杭36本・杭8本・流杭9本・横杭2本である。48~53・55は樋状造構関係の杭であり、10・214~220、100~190は溝補修造構に関係する杭なので、

ここでは他の杭について述する。

南側では、12・15・18と3本の板杭が溝と直角に打ち込まれているほかは、杭が列をなすものはなかった。また樋状造構の東側で、溝の上場から肩部にかけて、20本弱の杭があるが、なぜ杭を打ち込んだか分らない。

北側では、122～130と156～159、161～184・166～167と197～200の溝と直角に交わる3列の杭列が確認された。ここで仮に順にa・b・c列とする。a列は126がシイノキを用い、129は未鑑定のため分らないが、他はすべてカシを用いている。また128は、a列から少し離れている所から、この杭列と関係ないのかも知れない。すべて長さ30cm前後の板杭で、杭間は10cmから15cmで、標高約7mまで打ち込まれている。以上から、a列は溝がある程度堆積が行なわれてから、もうけられたと思われる。b列はカシをもちいた板杭(158)、クリをもちいた角杭(162)、タイミンタチバナをもちいた丸杭(187)、シイノキをもちいた丸杭(161・184)などさまざまで、深さもまちまちであるところから、偶然並んだものと考えられる。162は穿孔のある建築材様のもの(?)の穿孔部に挿入されている。又両方ともクリの木をもちいていること、地山に50cmもくい込んでいることから、土どめ遺構とつながり、土どめ的な役目をはたしているものと考えられる。c列は198が板杭で他は丸杭をもちいている。なお198はシイノキをもちいている。c列は地山まで打ち込まれているところから、溝の何らかの役目をはたしたと考えられる。

以上から、a列より南側の杭は樋状造構と同時期か、より後出のものであり、北側の杭は溝と同時期で、溝補修遺構となんらかの関連があると考えられる。

以上、第1号溝は樋状造構をともなった溝で、上段は弥生時代中期中葉で、度々補修されて使用され、弥生時代中期後葉頃まで、第3号溝が、第1号溝の役目をはたしたと考えられる。ちなみに、第1号溝は今までの発掘では、南北の延長とも確認されていない。

7. 第2号溝状造構 (Fig. 3・1)

台地際に位置し、巾40cm、深さ10cmの浅い溝で、北から南へ標高7.70mにそって流路をとっている。出土遺物としては石劍(38)、筋鉢車(100)と1点づつ出土しているが、溝と直接的に関連があるとは考えられなく、流れ込んだものと思われる。また、杭等の付設もなく、ゆるやかであるが、斜面に位置するため、原形を保っていないので溝の性格は不明である。

8. 第3号溝状造構 (Fig. 3・1, Tab. 3・1)

第1号溝状造構の西側に位置し、巾1.2m・深さ55cm前後の溝である。ほぼ南北に走っているが、深さは水平で、どちらへ流れていたか分らない。内部堆積は暗灰色砂層が、上部から下部に堆積しているが、レンズ状に、灰黒色粘質土層のブロックが入り、底には灰黒色粘質土層が入っている。遺物としては数片の土器片と、扁平片刃石斧(5)が入っている。土器片は底面と溝の肩部から出土し、弥生時代後期前葉の變形土器 (Fig. 3・3, 17) の口縁部で流れ込んだと考えられる。扁平片刃石斧は溝が灰黒色粘質土・黑色粘質土層・ローム層を掘り込んでいるので、包含層を切った際混入したものと思われる。

杭列は溝中央部に東西に走る2列がある。北側5本・南側7本の2列とも、20cm～30cmの板杭でなっているが、溝の中では暗灰色砂層に打ち込まれており、底面に達するものはない。また

北側の板杭は東側にのびている。

以上から、溝状の遺構の時期は下限が弥生時代後期前葉であり、上限は第1号溝状遺構より新しいと考えられる。また杭列は弥生時代後期前葉以後のもので、沖積地利用のために、もと受けられたと考えられる。

9. 黒色粘質土層中杭群 (Fig. 3・1, Tab. 3・1)

第1・3号溝状遺構間に、39本の杭が確認された。内訳は丸杭17本、板杭13本、杭9本で、不規則に打ち込まれているが、中央部で第3号溝から第1号溝まで統く杭列がある。

灰黒色粘質土層から打ち込まれていること、第3号溝が埋まってから打ち込まれていることから黑色粘質土層中の杭群は、弥生時代後期前葉頃のものといえる。

(山口)

Tab. 3・1 H-5 地点 出土木製品・木材一覧表(材質識別は鳥倉已三郎氏による)

No	種別	出土位置	法 長さ	幅	厚さ	材質	備考	Fig.	P.I.	No	種別	出土位置	法 長さ	幅	厚さ	材質	備考	Fig.	P.I.
1	長柄鍬	第3号溝第六				カシ?		3-25	XIV	34	丸杭	第1号溝	未標	2				3-4	3-5
2	三叉鍬	第1号溝				カシ?		3-24	XIV	35	板杭	*	37	5					
3	二叉鍬	*				カシ?		*	XIV	36	*	*	34	4					
4	三叉鍬	*				カシ?		*	XIV	37	杭	*	12		1.5				
5	三叉鍬?	*				カシ?		*	XIV	38	板杭	*	16	3					
6	斧	各 第1号溝穴				ユクノキ	禪付き	3-25	XV	39	丸杭	*	未標	2.5					
7	臼	第1号溝						*	XV	40	後木	*							
8	鍬	*				クスノキ		*	XIV	41	板材	*	57	9		楓板?	*		
9	達棒材?	*	39.3	15.5		クリ	穿孔加工	3-26		42	鍬板	*	137	27	クリ	楓上板	*		
10	丸杭	*	96.4	6		シノノキ	3621M4完	*		43	*	*	121	14	シノノキ	*	*	XV	
11	*	黑色粘質土層中	38.4	5.5	ユズリハ					44	*	*	101.5	17.5		楓下板	*		
12	板 材	第1号溝	53	5						45	*	*	110	14			*	*	
13	*	第3号溝	25.6	4.5						46	*	*	98.5	14.5	シノノキ	*	*		
14	丸杭	第1号溝	38.6	3.1						47	加工材	*	24	14.5					
15	板 材	*	44	7						48	板材	*	19	7.5					
16	*	*	62	11						49	杭	*	22.5	4		楓止め	*		
17	板 材	*	47	10						50	*	*	10	2			*	*	
18	後木	*								51	丸杭	*	4.5	2.5			*	*	
19	*	*								52	*	*	22.5	4			*	*	
20	丸杭	*	未標	3.5						53	杭	*	36.5	3					
21	*	*	*	3						54	楓木								
22	*	*	15	5.5						55	杭	*	33	4		楓止め			
23	*	*	12	2						56	板 材	*	34	4.5					
24	*	*	20	4						57	丸杭	*	39.5	5					
25	*	*	68	6						58	板 材	*	43	6					
26	板 材	*	43	9						59	楓木	*							
27	丸杭	*	未標	2						60	板 材	*	36.5	5					
28	*	*	12.5	3						61	丸杭	*	58	6.5					
29	板 材	*	34	10						62	*	*	28	4					
30	*	*	27.5	8						63	楓木	*							
31	*	*	12.5	4.5						64	杭	*	19	2.5					
32	丸杭	*	未標	2						65	板 材	*	未標	3.5					
33	*	*	94	4.5						66	丸杭	*	22.5	3					

No.	種別	出土位置	法量			材質	備考	F	P
			社号	年号	云符				
67	板 材	第 1 号 庫	47.5	12				3-4 3-5	
68	*	*	39.5	9	*	*	*		
69	*	*	37	9		*			
70	*	*	未標	5.5		*			
71	流 木	*				*			
72	*	*				*			
73	*	*				*			
74	*	*				*			
75	板 材	*	26	7		*			
79	加工材	*	31	19.5		*			
80	流 木	*				*			
81	*	*				*			
82	板 材	*	16.5	4		*			
83	加工材	*	30	24.5		*			
84	流 木	*				*			
85	*	*				*			
87	板 材	*	51	9		*			
88	*	*				*			
89	流 木	*				*			
90	流 板	*	42.5	5.5		*			
93	流 木	*				*			
94	*	*				*			
95	*	*				*			
96	*	*				*			
97	*	*				*			
100	*	*				*			
101	*	*				*			
102	流 板	*	65	8		*			
103	流 木	*				*			
104	*	*				*			
105	*	*				*			
106	*	*				*			
107	*	*				*			
108	*	*				*			
110	*	*				*			
111	*	*				*			
112	*	*				*			
113	*	*				*			
114	*	*				*			
115	*	*				*			
116	*	*				*			
117	*	*				*			
118	*	*				*			
119	*	*				*			
120	板 板	*	28	5		*			
121	丸 板	*	28.5	4.5		*			
122	板 板	*	25.5	5	カ シ	*			
123	*	*	44	9	*	*			
124	*	*	31	6.5	*	*			
125	*	*	34	6.5	*	*			
126	*	*	45	6	シイノキ?	*			
127	*	*	31	5	カ シ	*			
128	板 材	第 1 号 庫	31	5.5				3-4 3-5	
129	*	*	29.5	5		*			
130	*	*	25	3.5					
131	流 木	*				*			
132	*	*				*			
133	*	*				*			
134	*	*				*			
135	*	*				*			
136	板 材	*	34	4					
137	流 木	*				*			
138	*	*				*			
139	*	*				*			
140	*	*				*			
141	*	*				*			
142	*	*				*			
143	*	*				*			
144	流 板?	*	25	3		*			
145	流 木	*				*			
146	*	*				*			
147	*	*				*			
148	*	*				*			
149	丸 板	*	42	4					
150	*	*				*			
151	*	*				*			
152	*	*				*			
153	流 板?	*	39		2.5				
154	板 材	*	24.5	6					
155	*	*	22	4					
156	丸 指	*	42	4					
157	*	*	49		7.5				
158	板 材	*	15	8	カ シ				
159	丸 板	*	32		4.5				
160	*	*	64		4.5 カキノキ				
161	板 材	*	70		8.5 シイノキ 半カツ板				
162	*	*	105	6	ク リ				
163	板 材	*	36	4.5					
164	丸 板	*	72		8.5 シイノキ				
165	板 材	*							
166	*	*	26.5	3					
167	丸 板	*	47		3.6 カキノキ				
168	*	*	78		5.5				
169	*	*	48		5				
170	*	*	33	4					
171	流 木	*							
172	*	*							
173	板 材	*	55	5					
174	丸 板	*	31.5		3.5				
175	*	*	37.5		2.5				
176	丸 板?	*	未標	10					
177	丸 板	*	*		3.5				
178	*	*	*		4				
179	流 木	*							

No.	種別	出上位置	法規 長さ	幅 幅員	材質 断面	備考	F _{kg}	P _{kg}	No.	種別	出上位置	法規 長さ	幅 幅員	材質 断面	備考	F _{kg}	P _{kg}
180	板 材	第 1 号 清	83	13	シイノキ 充孔あり				238	板 板	第 3 号 清	43	6	カシ			
181	*	*	51.5	9.5	*	*	*	*	239	*	*	45	6	*			
182	*	*	90	10.2	*	清掃施工 止め	*	*	240	流 木	*	65.5	13				
183	*	*	95	5			*	*	241	板 板	*	30	6				
184	*	*	52	3.5			*	*	242	*	*	3					
185	*	*	26.5	6			*	*	243	*	*	35	7	カシ			
186	*	*	90	11	シイノキ 清掃施工 止め	*			244	板 材	*	56	8				
187	*	*	56	13.5	*	*	*	*	245	*	*	50	6.5				
188	*	*	49	8			*	*	246	流 木	*	80	3				
189	*	*	49	5			*	*	247	*	*	107	5				
190	丸 板	*	60	4.5	清掃施工 止め	*			250	板 板	*	24	4.5				
191	*	*	51.5	8			*	*	251	杭 黒色粘質土質中	*	29	3				
192	*	*	59.5	4.5			*	*	252	丸 板	*	14	1.5				
193	*	*	56.5	4	シイノキ	*	*	*	253	板	*	未記	1.5				
194	流 木	*	31.5	7.5	清掃施工 止め	*			254	*	*	34	5.5				
195	*	*	27.5	4.5			*	*	255	丸 板	*	90.5	6.5				
196	*	*						*	256	板 板	*	17.5	3.5				
197	丸 板	*	未記	4.5			*	*	257	*	*	30	3				
198	板 板	*	117	9	シイノキ	*			258	丸 板	*	13.5	1.5				
199	丸 板	*	90.5	5.5		*	*	*	259	*	*	25.5	2.5				
200	*	*	149	10	シイノキ	*			260	*	*	40	4.5				
201	*	*	72.5	7	モチノキ	*			261	板 板	*	7	3.5				
202	板 板	*	65.5	5.5			*	*	262	丸 板	*	20	1.2				
203	板 材	*	24.5	7.5			*	*	263	*	*	未記	2				
204	流 木	*					*	*	264	*	*	未記	1.5				
205	流 板	*	58.5	2			*	*	265	*	*	94	3.5				
211	流 木	*					*	*	266	板 板	*	38	?				
212	*	*					*	*	267	*	*	29	5				
213	丸 木	*	100	35	溝地豆繩附	*			268	杭	*	未記					
214	丸 板	*	100	7.5	モチノキ No.231固定	*			269	板 板	*	36.5	2				
215	*	*	175	9	シイノキ	*	*	*	270	*	*	29	6				
216	*	*	137	7	*	*	*	*	271	板	*	26	3.3				
217	*	*	104.5	7	タブノキ?	*	*	*	272	丸 板	*	26	4				
218	*	*	100	5	シイノキ	*	*	*	273	板 板	*	19.5	5.5				
219	*	*	65.5	7	カシ	*	*	*	274	*	*	26.5	5.5				
220	*	*	85	6.5	エノキ	*	*	*	275	丸 板	*	22	3				
221	流 板	*	38	3			*	*	276	*	*	20	2.5				
222	流 木	*					*	*	277	板 板	*	46	7	カシ			
223	板 板?	*	60	2.3	No.231固定?	*			278	丸 板	*	35.5	4				
224	横 板	*	124	7	ユズリハ 溝地豆繩附	*			279	*	*	38	4				
225	*	*	66.5	10.5			*	*	280	板 板	*	19	3				
226	底 板	*					*	*	281	丸 板	*	40	3.5				
227	*	第 3 号 穴	50.5	4.5			*	*	282	杭	*	14.5	1.5				
228	*	*	65.5	4			*	*	283	板 板	*	24	3.5				
229	*	*	55.5	2.5			*	*	284	丸 板	*	15.5	3				
230	流 木	*	51.5	5			*	*	285	杭	*	35.5	3.5				
231	板 板 第 3 号 穴	15.5	4.5				*	*	286	*	*	15.5	2				
232	*	*	19.5	3.5			*	*	287	板 板	*	36.5	7.5				
233	*	*	20	3.5			*	*	288	杭	*	39	7				
234	*	*	29.5	6.5			*	*									
235	*	*	33	4.5			*	*									

*杭の長さは、発掘時の長さである。

III 包含層出土遺物

表採・第1層～第4層まで多数の遺物が出土したが、一時期の単純層は、第3・4層であり、第2層は前述したように、土層がレンズ状に複雑に堆積していたので、出土土器・出土石器・石製品・土製品・木製品と分けた。また、溝状遺構出土の土器・石器・土製品は、直接的に遺構にかかわり合うとは考えられないので、土器は器形別、石器は器種別に詳述する。

1 出土土器

甕 (Fig. 3・6, 3・7, 3・8, 3・9)

前期の土器（1～60）、口縁部の突帯のある方（森・岡崎1961）から、突帯が口縁端と同高のもの（1～10・12・13）、突帯が口縁端に接して下向するもの（16・17）、突帯が口縁端より下るもの（18～23）、突帯が口縁端より高いものの（11・14, 15）がある。他に、胴部に刻目突帯をめぐらし、口縁にかけて内向・直立するものがある（24～29・42）、器面は、横あるいは斜めの条痕を施しており、20では、条痕断面が太いU字形を明確に示す。21は、丹塗りの痕跡をもつ。突帯の刻目は、棒状器具（11）、指頭・棒状器具（5・8・9・12・14・21～23・29）、篦を利用している。胎土には砂粒を含み、大半の焼成は良好である。ほとんどが暗褐色、黄褐色を帯びる。以上は夜臼式である。

43は、如意状口縁の端部を、棒状器具で刻目を巡らし、外面に斜めの細刷毛目を施している。口縁部内面には、強い横なでを施し、指の押えなでが見られる。外面に煤が付着する。3点とも、砂粒を含み焼成良好。暗褐色・黄褐色を帯びる。30・31・43は板付I式である。

如意状口縁端の下半に刻目をもつものと、もたないもの（49・53）がある。51は口縁部に比べ胴部が張る。刻目は口縁端の下半に巡らすものを特徴とする。33は刻目に棒状器具を用い、他は篦を利用している。調整は刷毛目・横なで、指の押えなでを施している。44は内面に、46・48は外面上に煤が付着する。32～35・44～53は前期中葉であろう。

54～56は如意状口縁部に刻目をもち、口縁下に断面三角形の突帯を一条巡らし、刻目をもつものともたないものとがある。59は口縁部が肥厚し、内側で明瞭な段状部をもつ。60は口縁部外側の張りが小さい。56・57は外面に煤が付着する。胎土には砂粒を含み、焼成良好。黄褐色、灰褐色を帯びる。36～38、54～60は、前期後葉～前期末のものであろう。

中期の土器（61～82） 61は逆L字状口縁部の口縁上面が内傾し、口縁端を棒状器具による刻目が巡っている。62、63の口縁外側の張りは小さい。62は丹塗りである。これらは中期前葉であろう。

64～70は口縁上面が平坦、68・70はやや内傾するものである。65は胴部が内向する。69は、口縁端に篦の刻目を巡らし、口縁上面と口縁直下に丹塗り暗文が描かれている。突帯はM字状である。64は丹塗り、65, 66には刷毛目調整がみられる。これらは砂粒を含み、焼成良好。黄褐色、暗褐色を呈する。以上は中期中葉であろう。

71～82は逆L字状口縁の上面が内傾するものと、外端が垂れるものがある。胴部はふくらむが、77はふくらまない。74, 79, 82は口縁下に断面三角形、75は断面M字形の突帯を一条巡ら

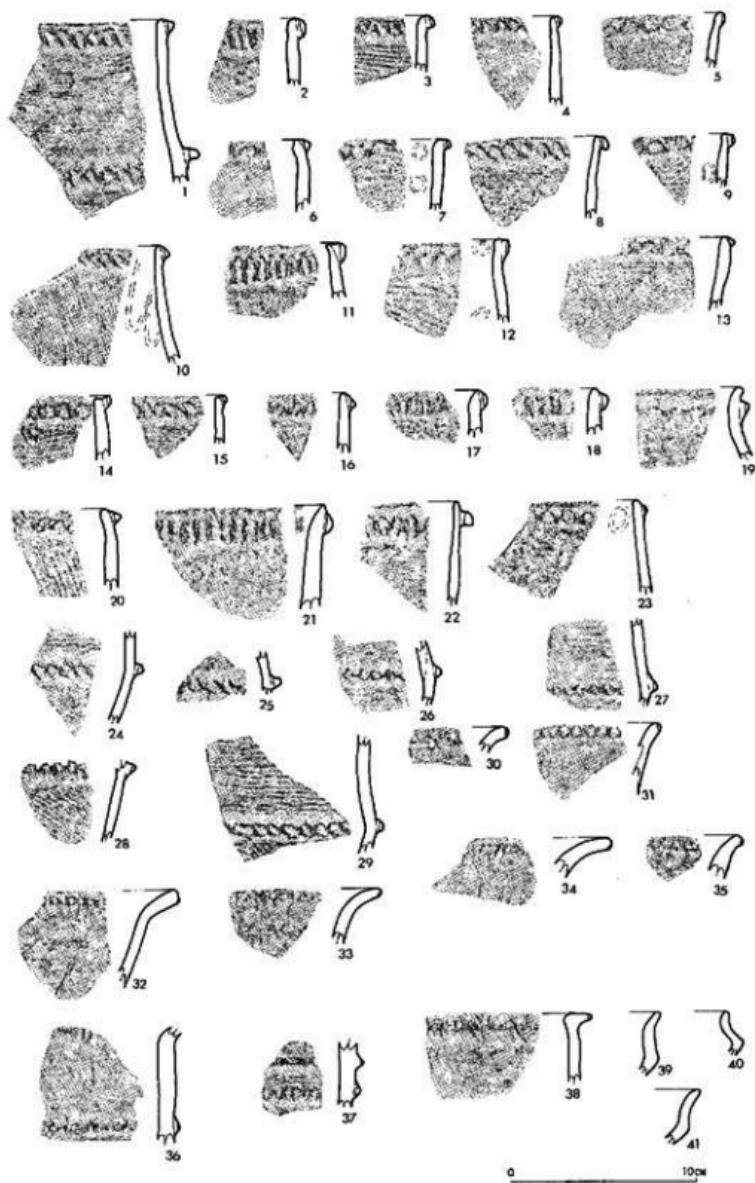


Fig. 3 · 6 包含層出土土器実測図(1)

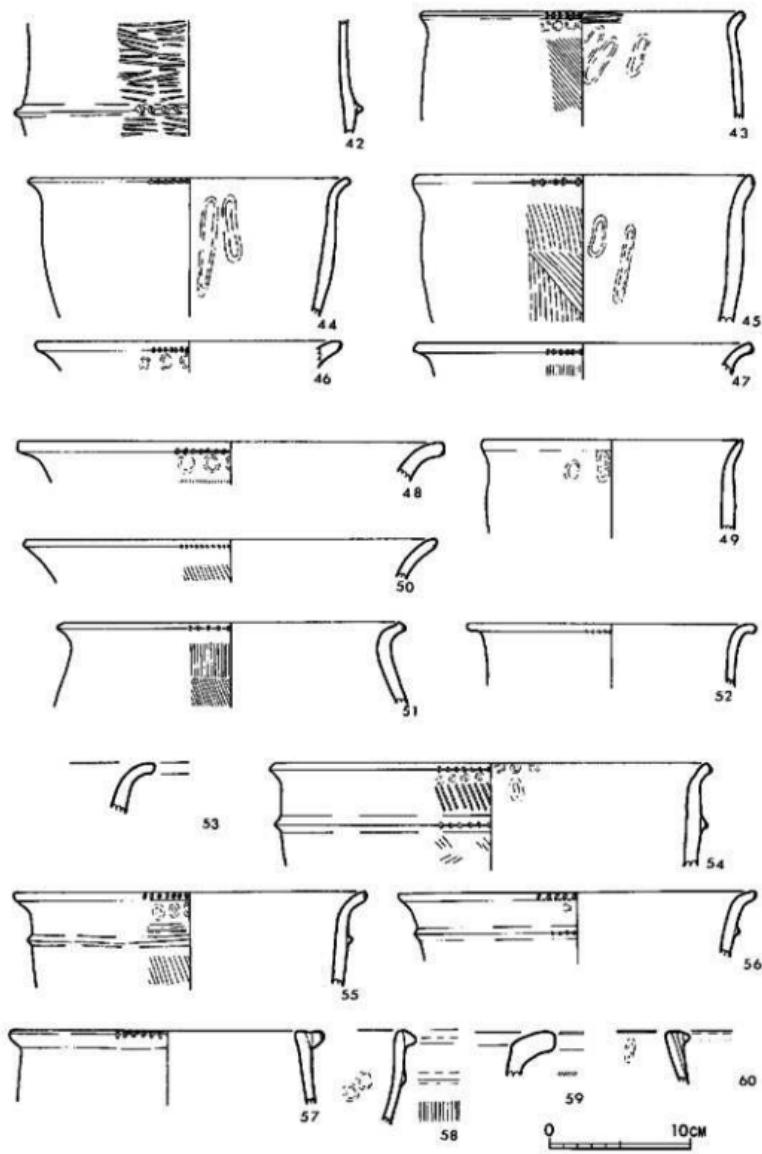


Fig. 3-7 包含出土土器実測図(2)

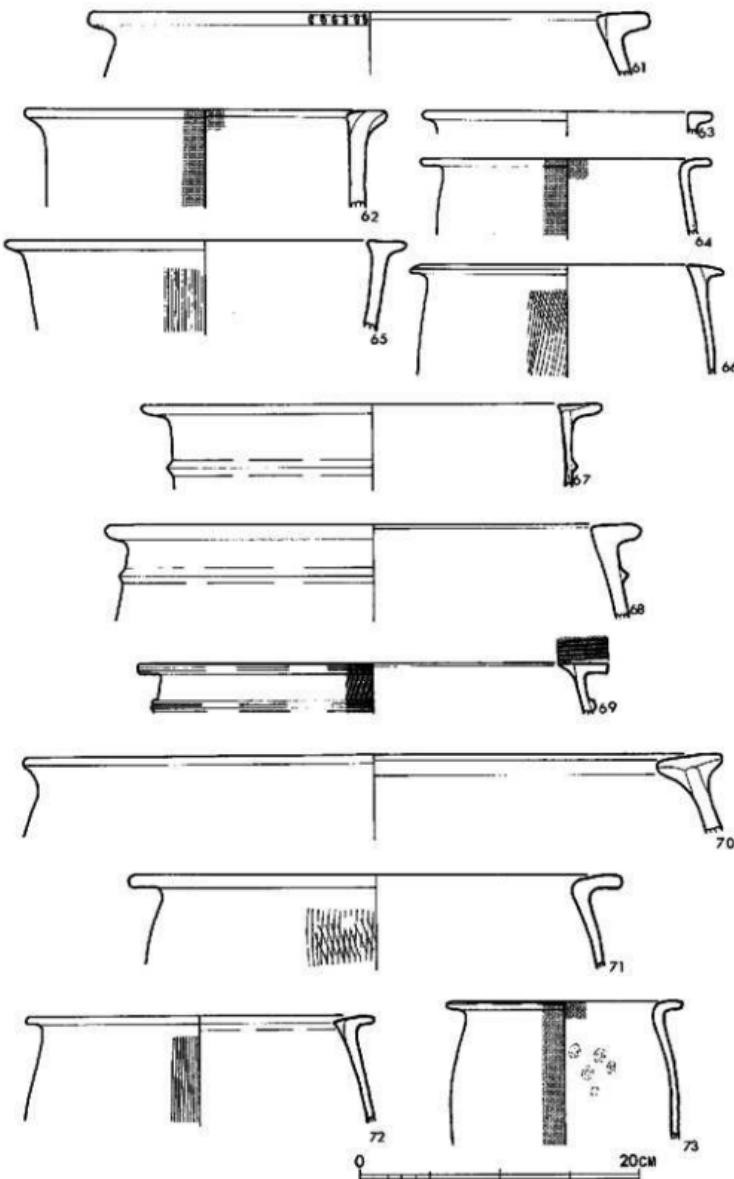


Fig. 3・8 包含層出土土器実測図 (3)

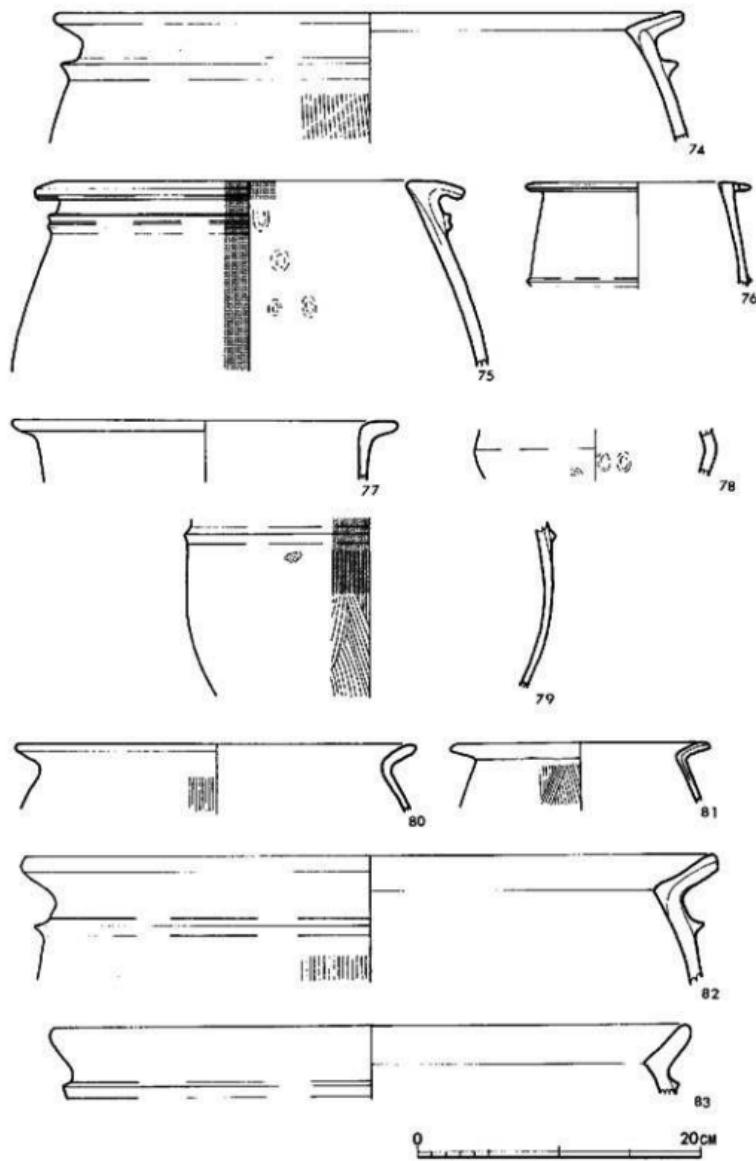


Fig. 3·9 包含層出土土器実測図(4)

している。78は、口縁部に孔径4mm、間隔2.9cmを1対として、2対、計4個の小孔を焼成前に穿っている。胴部には、断面三角形の突帯が一条巡る。78は口縁部を欠くが、胴部が屈曲し、内向して立ち上がる。外面は棹状器具による横磨研調整。煤を付着するもの(71, 74, 77, 82)と丹塗りのもの(73, 75, 78, 79)がある。いずれも微細砂粒を含み焼成良好。黄褐色、暗褐色を帯びる。これらは中期後葉であろう。

80~82は、口縁部が逆L字に近く、80, 81は、内側に明瞭な稜をもたない。これらは器面を刷毛目調整を施している。細砂粒を含み焼成良好。黄褐色、暗褐色を帯びる。中期後葉~中期末であろう。

後期の土器(83) 逆L字状口縁の上面が少し凹む。口縁直下には断面三角形の突帯を一条巡らす。細砂粒を含む。焼成不良。暗褐色を帯びる。後期初頭であろう。第1層出土。

74, 82, 83は中期後葉から後期にかけての変化がよくわかる。

臺(Fig. 3・10, 3・11, 3・12, 143~146)

前期の土器(84~134) 126は口径10.4cm、丹塗りである。細砂粒を含み焼成良好。黄褐色を帯びる。夜白式である。

84, 85は彩文土器である。84は口縁直下に複合鋸歯文を、12~13本を単位にして描いている。下部に2本の横向きの線が走る。彩文は器面をていねいにととのえた上に描いている。胎土に径1mmほどの砂粒を多く含み、焼成は良好。暗褐色を帯びる。85は肩部に有軸羽状文が巡る。器表面に黒斑をみとめる。胎土は細かく精良である。焼成良好。黄褐色を帯びる。86~89・94・97は複線山形文、複線八字形文にあたる。91~93は有軸羽状文。90・95・96は複線弧状八字形文。98は平行横線に類別できる(森・岡崎1961)。93は丹塗りの痕跡を認める。127は範磨研調整。丹塗りである。129は外面に刷毛目調整を施している。130~132は口縁部外面に明瞭な段状部を形成する。130・134は器面を範磨研調整。131は丹塗りである。

以上の土器は砂粒を含み、焼成良好。板付I式である。101は板付II式の可能性があり一部黒斑を認める。99・100は範描の下弦重弧文、103~108は貝殻腹縫による羽状文である。103は無頸窓に近い形態を示す。108は範描縦線文を併用している。他の土器は、羽状文、平行横線文の形態をもつものである。133, 134は口縁外側に明瞭な段状部をもたない。以上の土器は砂粒を含み、焼成良好。黄褐色、暗褐色を帯びる。板付II式である。

中期の土器(137~146) 137は口縁部が肥厚して、内側に段状部を形成する。細砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。中期初頭である。136~139は、朝顔状口縁臺である。137, 139は、器面を範磨研調整。136, 137は丹塗り、暗文を施している。微細砂粒を含み、焼成良好。褐色、黄褐色を帯びる。中期前葉~後葉である。

140~144は、鉛先状口縁臺である。141は口縁端を棹状器具で横にならぎ目を施している。口縁下には範の暗文を施している。144は器面を範と指のなで調整。外面は細刷毛目調整。以上は細砂粒を含み、焼成良好。黄褐色、暗褐色を帯びる。140~142は中期中葉。143, 144は中期後葉である。

145は断面M字形の突帯は張りが弱い。丹塗りである。146は外面を範磨研調整。内面にな

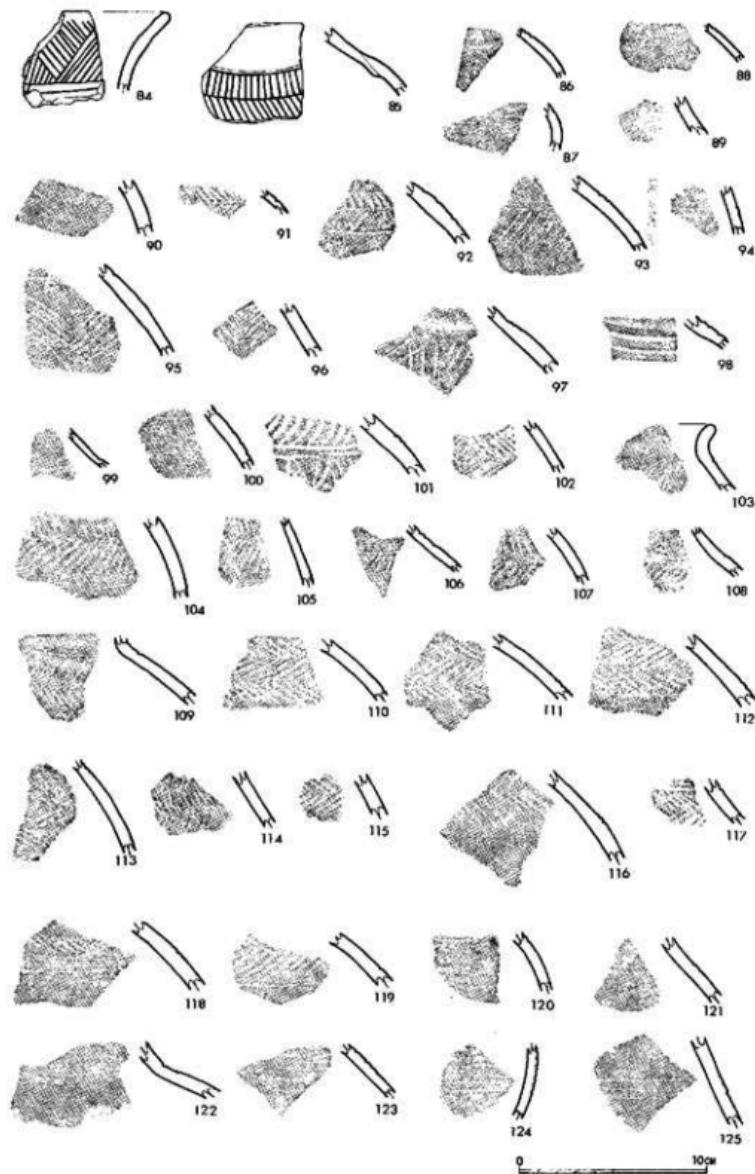


Fig. 3・10 包含層出土土器実測図(5)

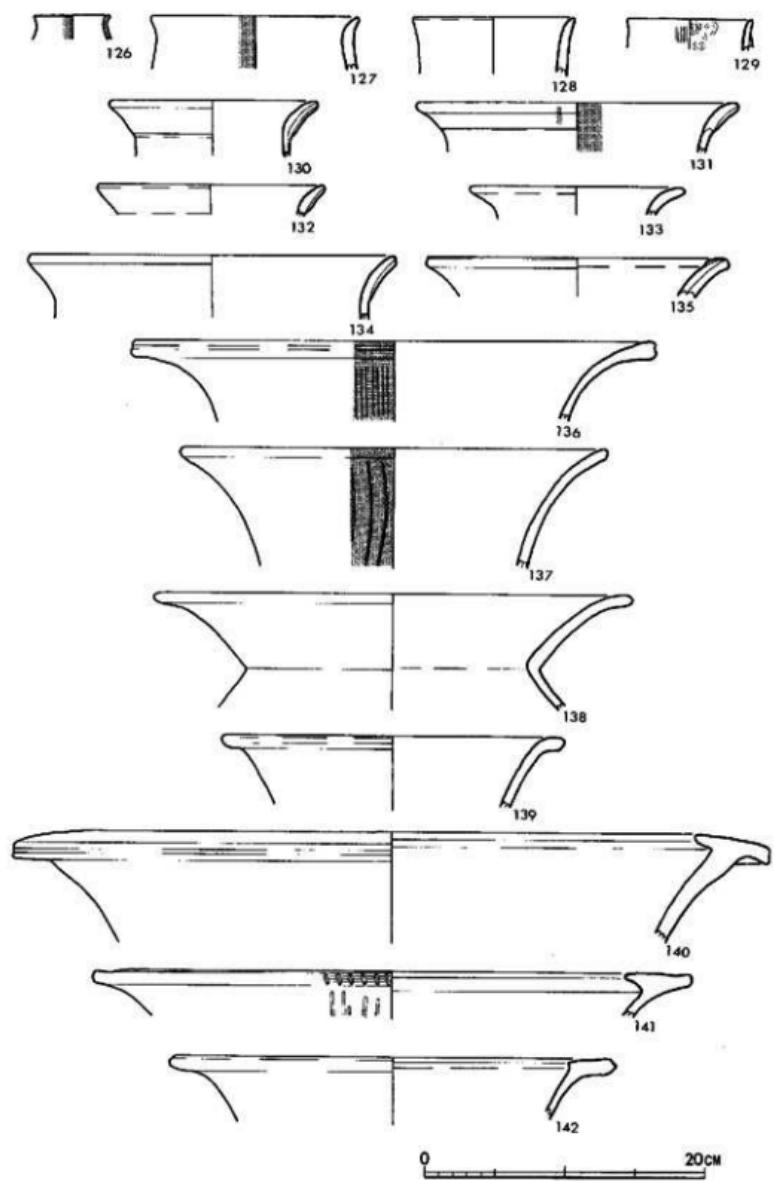


Fig. 3-11 包含層出土土器実測図 (6)

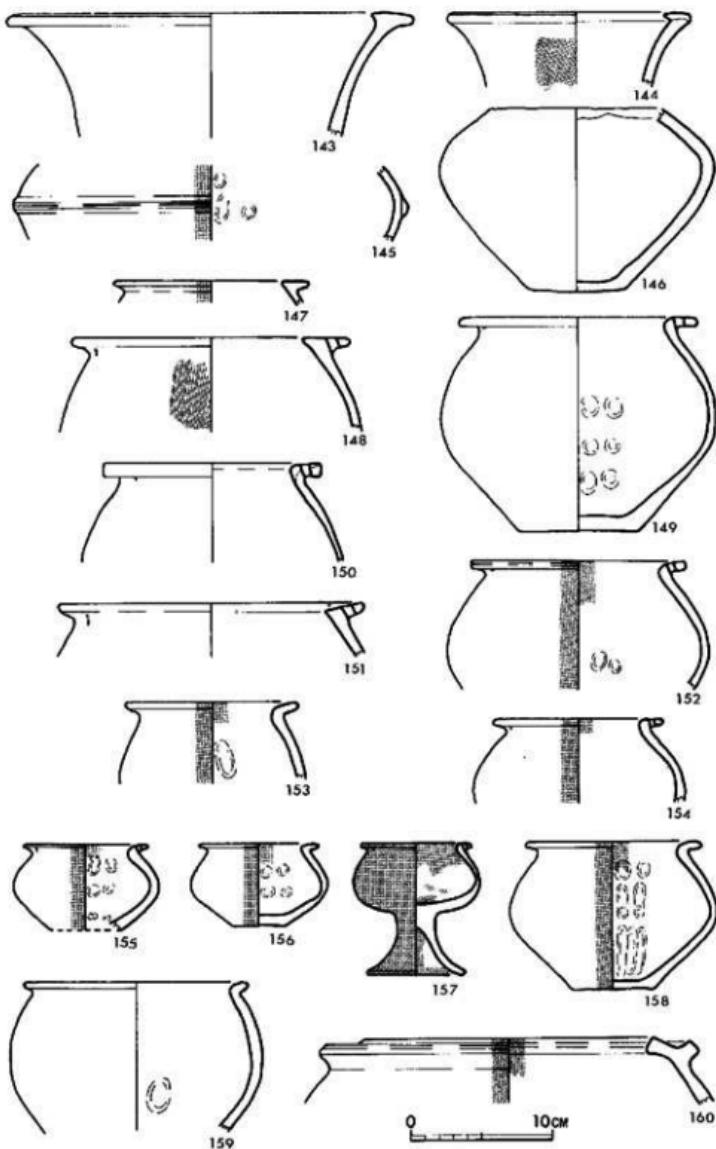


Fig. 3-12 包含層出土上器実測図(7)

で調整を施している。器面には砂粒が目立たず、ていねいな調整である。焼成良好。全面に黒色を帯びる。

無頸壺 (Fig. 3・12, 147~160, 3・13, 165)

147~149は平坦口縁をもつもので、148, 149は焼成前の穿孔がある。150は口縁部が胴部に比べ肥厚する。151は内傾する口縁上面は平坦である。155は丹塗り。鏡磨研調整。口縁部に焼成前の穿孔を1つもつが、原状では4つの孔が考えられる。内面は指押えとなでの調整を施す。微砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。156は破片のため口縁部に穿孔は確認できなかった。外面は鏡磨研調整。内面をなでにより調整を施す。細砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。157は脚付無頸壺である。内外面ともにていねいな、なで調整。脚部外面ではたてなで調整。内面は箝けずりと思われる。その上に横なで調整。口縁部は15cmの間隔を1対として2対の穿孔をもつ。外面丹塗り、内面にも丹がたれている。少量の砂粒を含むが良好な胎土で、焼成は良好である。淡赤褐色、黄褐色を帯びる。口径8cm。器高9cmを計る。160は口縁下にコの字突帯を巡らすもので、器面は荒れている。細砂粒を含み、胎土は軟かい。焼成良好。赤褐色を帯びる。165は内窓する体部の立上がりがそのまま口縁部となるもので、胎土、焼成とともに堅緻である。暗褐色を帯びる。以上のものは、中期前葉～中期後葉である。

短頸壺 (Fig. 3・13, 161~163)

161は外面を丹塗り後、箠による縦及び横方向の磨研調整を施している。内面は頸部を箠の横なで調整。胴部以下を指によるなで押さえ調整。底部に黒斑。砂粒含み、焼成良好。暗褐色を帯びる。163は丹塗り磨研調整。これらは中期後葉のものである。

小型壺 (Fig. 3・13, 164)

口縁部横なで調整。外面を粗い刷毛目調整。底部近くに黒斑がある。細砂粒を含み、焼成や不良。灰褐色を帯びる。中期後葉。

袋状口縁壺 (Fig. 3・13, 167)

器面は荒れている。口縁内窓部で明瞭な稜はもない。砂粒を含み、焼成不良。黄褐色を帯びる。後期の初頭であろう。

二重口縁壺 (Fig. 3・13, 168)

167同様に口縁先端部を欠くが、口縁屈曲部に明瞭な稜が走る。頸部には断面三角形の突帯を一条巡らしている。細砂粒を含み、焼成不良。黄褐色を帯びる。後期の上器である。

蓋 (Fig. 3・13, 171~175)

171は外面を折なでと粗い刷毛目調整。内面には絞りが見られる。172~175は4つの穿孔を焼成前に成し、外面を丹塗り、鏡磨研調整。微～細砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。中期後葉のものであろう。

鉢 (Fig. 3・6, 39~41, 3・13, 176~183)

39~41は夜臼式の鉢であるが、41は高环の可能性をもつ。39, 40は内面を棒状器具の磨研調整。3点とも細砂粒を含み、焼成良好。暗褐色、黒褐色を帯びる。177, 178は脚付鉢で全体に調整がていねいで、器面を横鏡磨研調整を施し丹塗りであり、脚内面にも丹塗りが見られる。

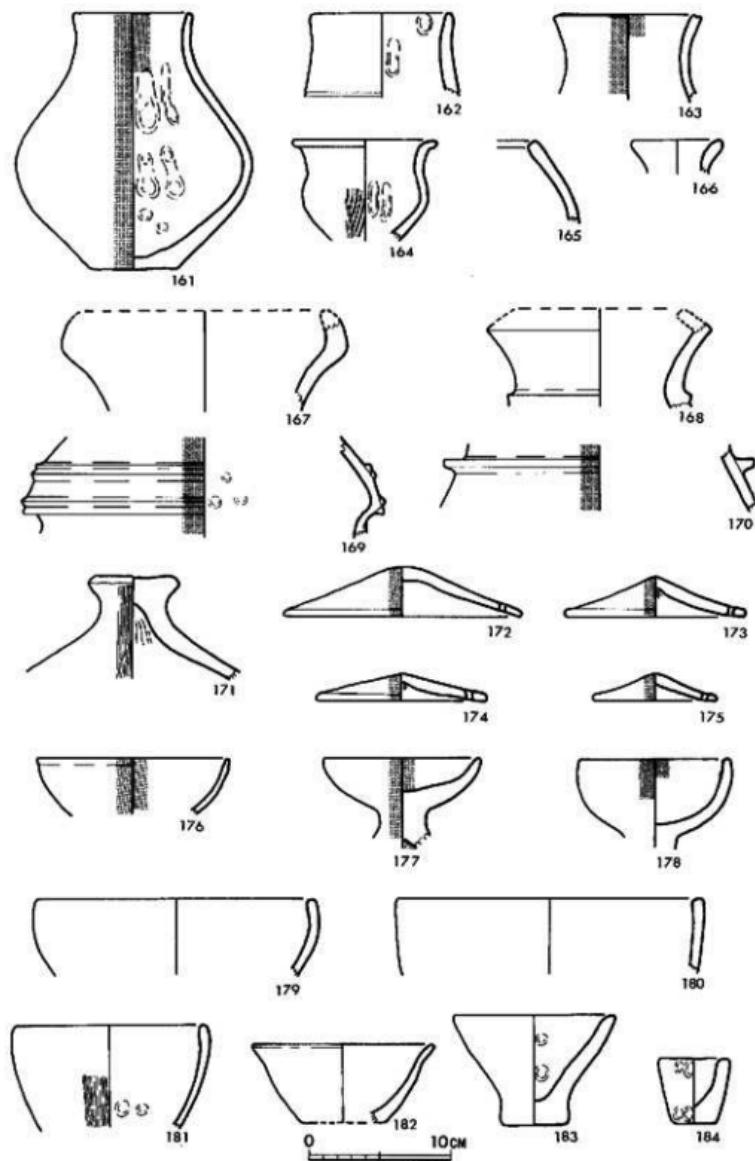


Fig. 8-13 包含層出土土器実測図 (8)

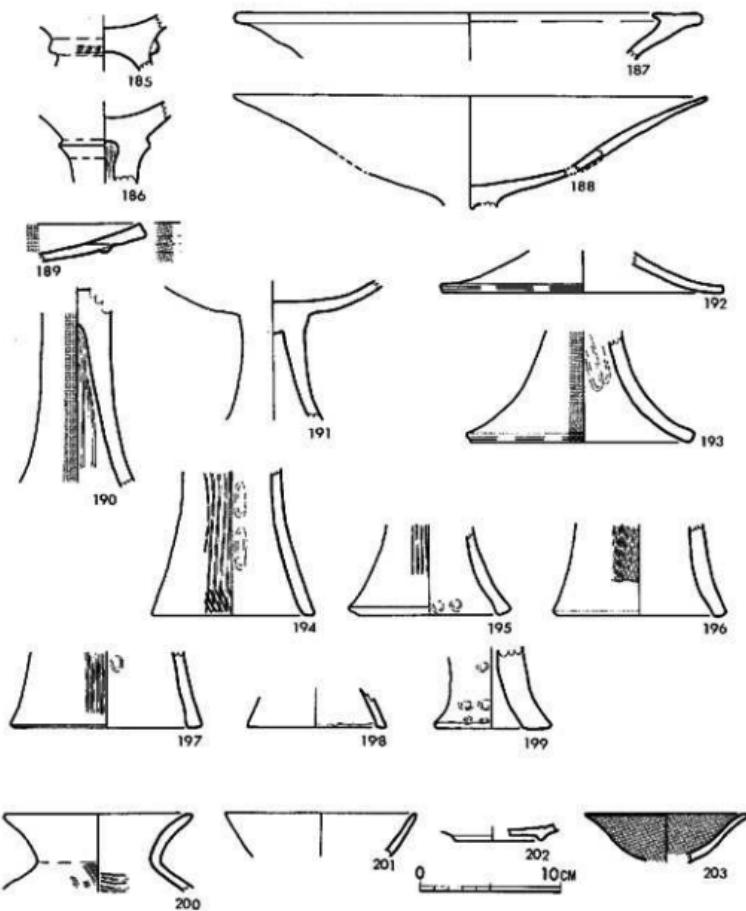


Fig. 3-14 包含層出土土器尖削図 (9)

胎土・焼成とも堅緻である。黄褐色を帯びる。182は小型鉢で全体をていねいな、なで調整。粗砂粒を含むが、焼成良好。暗褐色～赤褐色を帯びる。183は器面を指と窓によるなで調整。一部に黒斑がある。全体に凹凸がある。細砂粒を含み、焼成良好。灰褐色である。口径11.6cm。これらは中期中葉～後葉のものであろう。

高坏 (Fig. 3-14, 185-193)

185は突帯を一条巡らし刻目を施している。細砂粒を含み、焼成良好。暗褐色を帯びる。夜白式である。186は突帯を一条巡らし、内面には絞りがある。細砂粒を含み、焼成不良。赤褐

色を帯びる。前期である。

188は破片接合であるが、接続部で小さな彎曲が考えられる。口縁端にかけてゆるく外反して立上がる。外面は窓による縦磨研調整と斜め刷毛目調整。内面は外面に比べていねいな調整である。細砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。弥生終末のものであろう。189はゆるく外反して立上がる口縁は、内外面を丹塗り。口縁直下に一条の突帯を巡らす。粗砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。平坦口縁をもつ。187は中期中葉、189～193は中期のものであろう。

器台 (Fig. 3・14, 184-189)

194は外面を縦刷毛目調整。内面には指の押え痕が見られる。細砂粒を含み、焼成はやや不良。暗褐色を帯びる。195は器の凹凸が目立ち、外面は上半を粗刷毛目、下半を指による強い横なで調整。内面は指の押えとなでの調整を施している。細砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。196は外面に刷毛目調整。197は外面を刷毛目調整。内面には、指押えと棒状器具と思われる縦のなで調整。微砂粒 (196)、細砂粒 (197) を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。198は器壁は薄く、立ち上がりは直線的である。器面は強いなで調整。粗砂粒を含み、焼成良好。暗褐色を帯びる。199は厚手で凹凸が目立つ。外面には下半部に窓のなでと、全体に指の押えなで調整。内面は絞りとなでの調整。砂粒を含み、焼成良好。194～197は中期中葉～後葉のものであろう。199は支脚と思われる。

その他の土器 (Fig. 3・13, 166, 169, 170, 184)

166は小型壺で胴部以下を欠く。器壁は肥厚して、器面はなで調整。砂粒を多く含み、焼成良好。褐色を帯びる。169, 170は、いわゆる瓢形土器の器形をもつものと考えられる。169は胴部くびれ部の破片で、三条の貼り付けM字突帯が巡らされている。その内二条は、断面三角形の複合突帯である。突帯部は横なで調整。内面は指の押えとなでの調整が施されている。器面は調整後の丹塗りであり、内面にも丹が重ねているが、剥落している。微砂を含み、胎上、焼成とともに精良。黄褐色を帯びる。170は内傾する立ち上り部に一条のコの字突帯をめぐらして、横なで調整を施している。微砂を含み、焼成良好。黄褐色を帯びる。184はやや厚手に作成されているさかずき形をしたもので、器面を指の押えなで調整。底部に一部黒斑がある。粗砂粒を含み、焼成良好。暗褐色を帯びる。

土師器 (Fig. 3・14, 200, 201)

200は外反しながら立ち上る口縁部と胴部とのくびれは明瞭な稜はもない。外面には細刷毛目、内面には胴部に粗刷毛目調整をして、その上からなで調整を施している。細砂粒を多く含み、焼成やや不良。灰褐色を帯びる。201は器面磨減しているが、輪縁痕をもつもので、石英粒砂を含み、焼成良。淡灰褐色を帯びる。

青磁器 (Fig. 3・14, 202)

203は青磁であり、底部を欠く。釉は全面に緑色をかけている。

まとめ

出土土器は、総数500近くの個体を確認した。

ローム層直上に堆積する4層は、破片の出土ではあるが、すべて前期のものでありこの層を
弥生時代 前期の単純層と考えてよい。

3層では10数片の個体数を出土している。夜臼式～中期後葉のものであり、この層は、弥生
時代 後葉を下限とする。

2層では80%近くの個体数を出土している。須恵器、土師器各1片を含み、夜臼式～後期初
頭に至るもので、大半は中期の上器である。また、2層としてあつかった1号溝内の土器は20
数点出土し、夜臼式～弥生時代 中期後葉までの土器を包含している。弥生時代 後期以後の土器
は2層上部出土である。

1層では50片程出土し、土師器、磁器を含む、夜臼式～弥生時代 後期初頭までの上器を主体
としたものである。

前期の土器群の中で板付I式上器は、夜臼式や板付II式上器の出土量に比較して少なく、20片
程の出土であり、特に甕では3点しか確認しておらず、検討する必要がある。

最も多く出土した土器は、中期後葉のものであり、特に、丹塗り土器の出土が多く、注目さ
れるとこどである。小型の無頸壺や脚付鉢がみられ、中でも小型無頸壺は3点見られ、破片も含
めると、10点近く想定でき、脚付のものが1点出土している。また、この甕と丹塗りの蓋がセッ
トとして考えられる。朝顔状口縁壺は、台地北側において集中して出土している。

鉢も多く出土して、その中に、丹塗り鉢の脚付のものが2点出土している。

丹塗りの脚付無頸壺や鉢は、他にあまり例をみない土器であり、丹塗り土器の多さとその器
種から、環濠がめぐる台地の北西部に位置するこの遺跡が、中期後葉の時期に、何らかの意味
で水に対する、祭祓的性格をもったものと想定することができる。

(原)

2 出土石器・石製品・土製品(Fig. 3・15～3・22, Tab. 3・2)

遺物は、G・H-5地点と同じように石斧類、収穫具、利器、魚獵具、その他と分けたが、
ナイフ形石器は、前記の遺物と明らかに時期的に異なるため独立させた。

ナイフ形石器 (Fig. 3・15)

1は古銅輝石安山岩製の縦長剥片を素材とし、すべての縁辺に表面から刃溝し加工を加えて

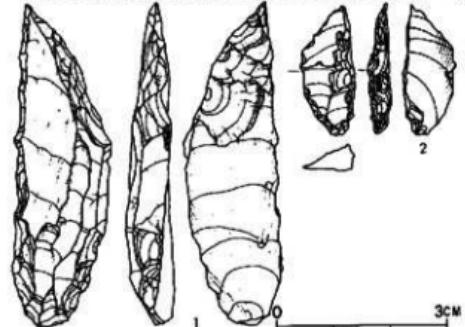


Fig. 3-15 ナイフ形石器実測図

いる。また先端部の裏面にも剥離加工を加えて、鋭い先端部をつくり出
している所から刺突具的な用途をも
つと考えられる。重さ7.75g。2は
良質の黒曜石製剥片を素材として、
右縁辺・左縁辺下半に刃溝し加工を
加え先端部を刃部としているが、全
体的に磨成している。重さ0.8g。1
は第3層、2は第2層の出土。以上2点
は先上器時代ナイフ形石器文化期の

造物で、ほぼ同時期のものと思われる。

石斧類 (Fig. 3・16, 3・17)

抉入石斧 (3・4)

3は灰褐色珪質シルト岩製で、敲打整形後、刃部、裏面、抉入部に入念な研磨が加えられている。側面は研磨されているが、敲打痕が残っているところもあり、背部、頭部は敲打のままである。刃部の角度は約60°で横断面は背部が盛り上がっている。重さ570 g。4は石英質粘板岩製で、敲打・剥離加工で整形し、刃部・両側面・背部は研磨が加えられているが、抉入部は敲打のままである。刃部の角度は約50°で、横断面は3と異なり台形を呈している。重さ255 g。3は第1号溝下底密着、4は第3号溝穴下底部密着である。

扁平片刃石斧 (5)

珪質板岩製で、剥離加工整形し、刃部・裏面に研磨を加えている。刃部の角度は約45°で、横断面は台形を呈している。重さは60 gで、第3号溝の肩密着で出土した。

片刃石斧 (6)

6は暗赤色凝灰質頁岩製で、刃部と考えられるところは入念に研磨が加えられている。ノミ形石器の類か。第1号溝出土。

蛤刃石斧 (7~20)

7は凝灰岩礫質砂岩製、8・16は安山岩製、15は赤紫色安山岩質凝灰岩製、17・18・20は玄武岩製、19は暗黒色中粒砂岩製の蛤刃石斧で、20を除き、敲打整形後、研磨を加えている。7・8・19の横断面は卵形をしており、16は楕円形で、15・18・20は長円がつぶれている形をしている。20は一部研磨されているが、敲打の部分が多く、下部にも敲打痕があり、敲打器と考えられる。7は刃部が欠損しているが455 gで、8は570 gであり、20は208 gである。15が第1層、7・17が第2層で、8は第1号溝上部、19は第1号溝最下部、16・18・20は第3号溝穴下部の出土。

9~14は今山産出玄武岩製の大型蛤刃石斧で、いずれも敲打整形後、入念に研磨が加えられている。9が頭部片、11・12が体部片、10・13・14が刃部片である。横断面は、10を除きいずれも梢円形で、刃部の角度は60°前後である。10は横断面は長円のつぶれた形で、刃部はつぶれており、頭部片の可能性もあり、重さは305 gある。14が表採で、13が第2層、9が第3層、10~12が第1号溝出土である。

取扱具 (Fig. 3・18)

石錐 (21)

安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で、敲打整形後、入念に研磨されている。刃部は両刃で内弯しているが、基部、先端部は欠損している。重さは42.8 gで第1号溝上部出土である。

石庵丁 (22~31)

31が、赤紫色凝灰質頁岩製で、他は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で、27以外は半月形石庵丁と考えられる。刃部はいづれも両刃で、穿孔は表裏から行なわれている。28は約半分欠損しているが、穿孔は3ヶ所にあったと考えられ、刃部は磨耗が激しく丸くなっている。重さ25.8 g。27は杏仁形と考えられるが、2点接合例で、重さは28 gである。30は刃部がつくり出さ

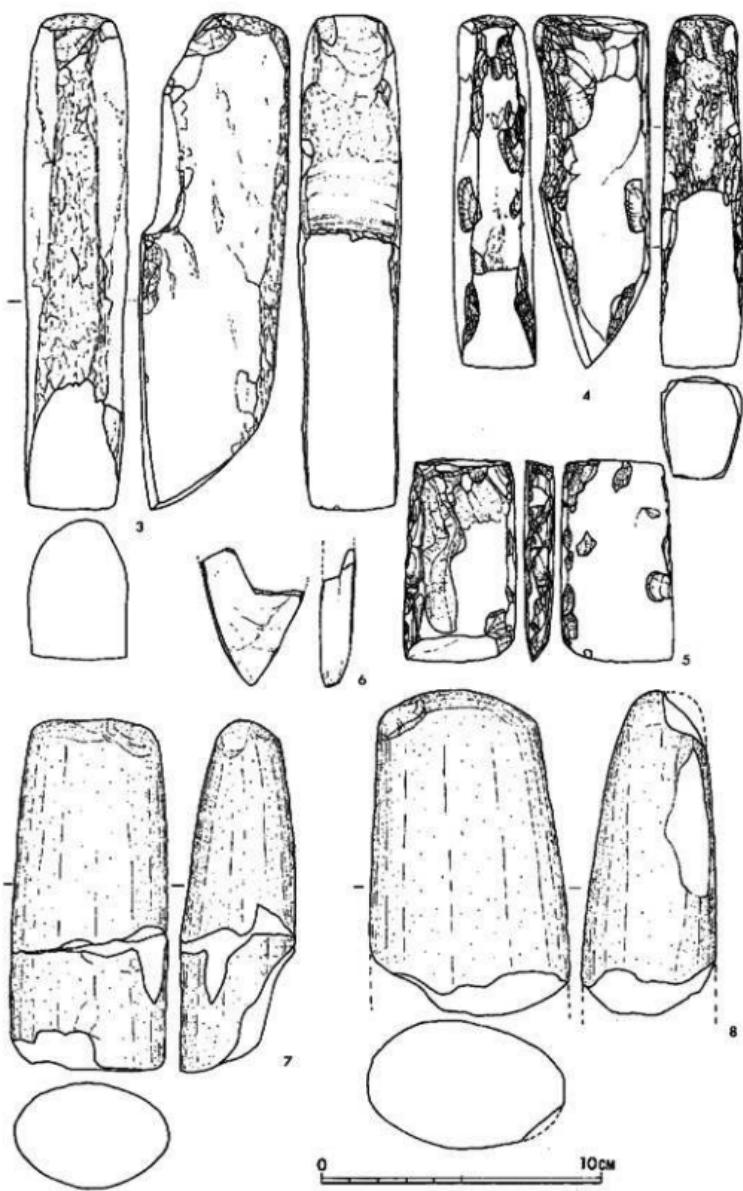


Fig. 3-16 包含层出土石斧实测图 (1)

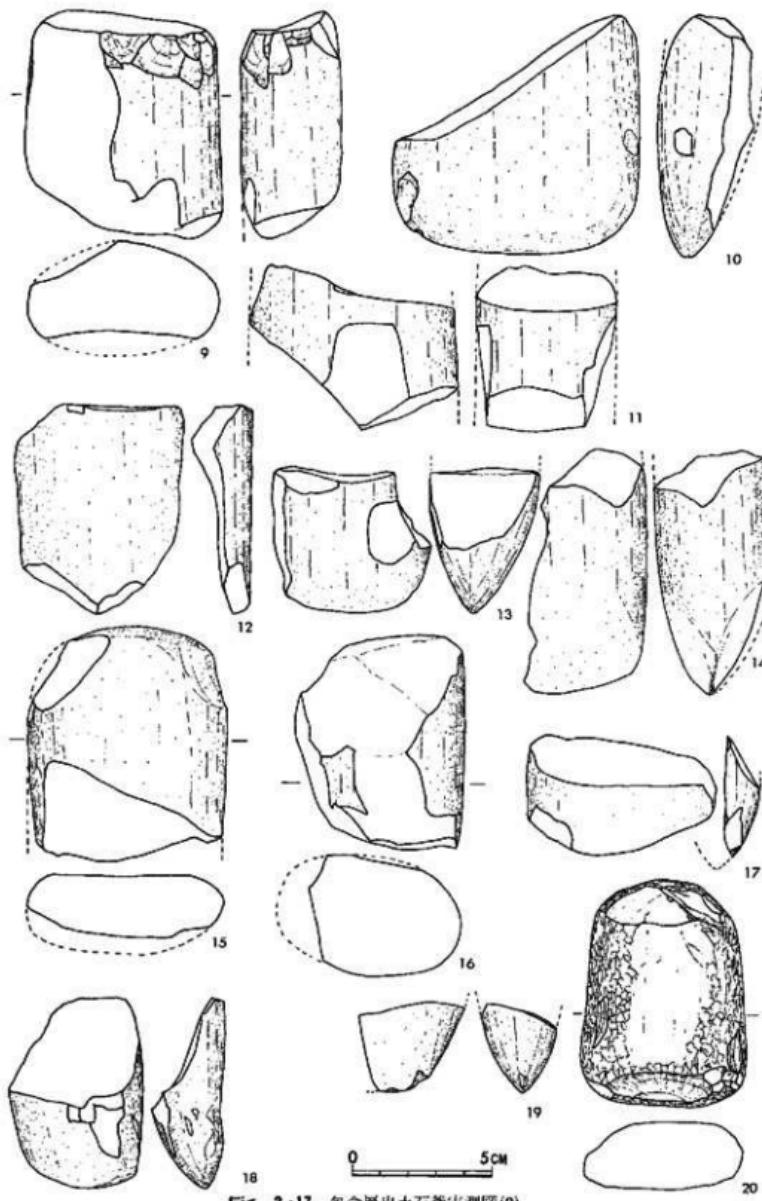


Fig. 3-17 包含层出土石斧尖测图(2)

れていないところから未製品と考えられる。22・24は第1層、23・25は第2層、26～28・31は第1号溝、29・30は第3号竪穴最下部の出土である。

利器 (Fig. 3・18～3・21)

磨製石剣 (33・34・36)

33は黒色珪質頁岩製、34は黒色シルト岩製、36は片岩製で、いずれも入念に研磨が加えられている。33は基部破片と考えられ、茎断面は長方形と考えられるが破片のため形状は分らなく、

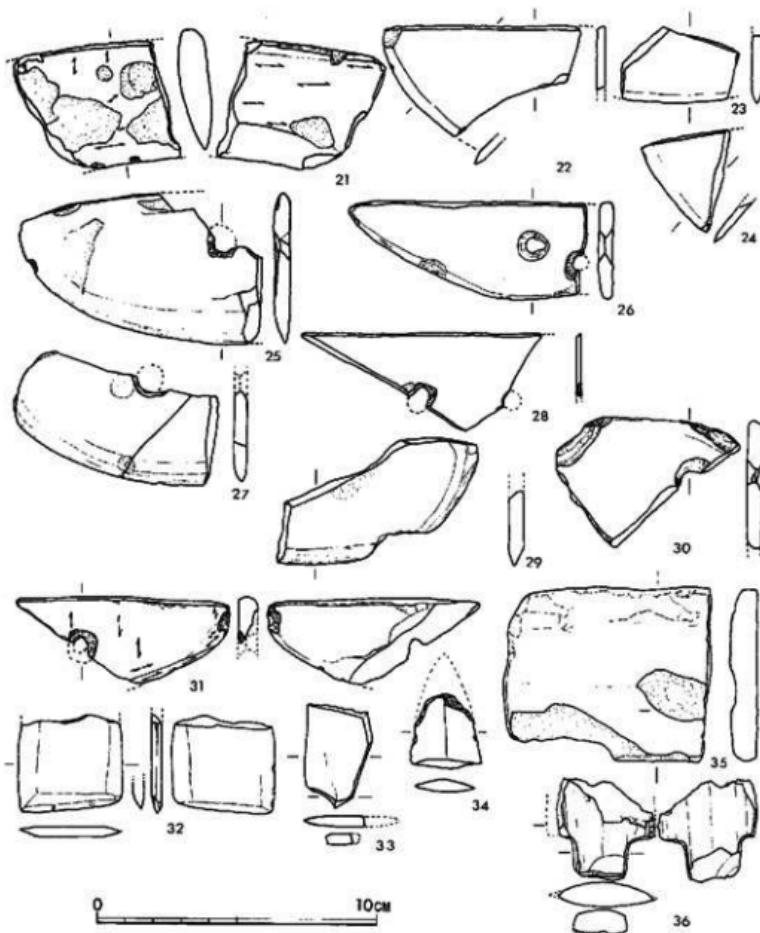


Fig. 3-18 包含層出土石庖丁・石鏃・石剣実測図

石劍でないかもしれない。34は中央部に鋸が走る鋒で、36は基部片である。34は第2層、33は第1号溝、36は第2号溝出土である。

石鎌 (37~51)

38・50が古銅輝石安山岩製で、51が黒色シルト岩製の他はすべて良質の黒曜石製である。また51が磨製石鎌で、他は打製石鎌である。38~41・44~49は基部が内弯する石鎌で、37は三角鎌、50は有茎石鎌で、39が最も抉りが入っており、44は内弯した基部中央に舌状のとび出しがある。43は不定形剝片の打面部に剥離加工を加え先端部としてつくり出しているが、他の鎌のように、表裏に入念な剥離加工が加えられてないところから未製品とも考えられる。51は入念に研磨されており、断面菱形の先端部であるが、鋒は欠損している。重さは37~0.5g、38~0.7g、39~0.8g、40~0.9g、41~1.1g、42~1g、43~2.2g、44~0.4g、45~1.2g、46~0.7g、47~0.6g、48~0.7g、49~0.8g、50~1.6g、51~0.4gである。37~46は第2層、47~51が第3号竪穴出土で、46~51は最下部の出土である。

尖頭状石器 (54)

良質の表皮の残る分厚い黒曜石製剝片を素材として、表裏に剥離加工を加えて整形しているが、先端部は尖っていない。重さは13.9gで第3号竪穴最下部出土である。

土製投弾 (102~109)

褐色~黒灰色を呈し、胎土には石英、砂粒を含み、手づくねで紡錘形に整形し、焼成も良好である。107・109が破片、他はすべて完形である。102の下端には繊維痕がついている。重さは102~21.3g、103~14.2g、104~13.4g、105~12.5g、106~20.1g、107~13.1g、108~17.5g、109~4.3gである。102が第2層、103~106・108が第3号竪穴、107・109が第1号溝出土である。

スクレイパー (52・53・64~68)

52・53は良質の黒曜石製で、64は安山岩、66~68は古銅輝石安山岩製、65は灰暗青色石英質細粒砂岩製である。52は破片であるが、一部に刃溝し状の加工が加えられている。53は剝片の縁辺に刃溝し状の加工が加えられている母指状搔器である。65・66とも粗い剥離加工を加えて刃部をつくり出し、つまみもつくり出されており石匙といえる。67は粗い加工が加えられている搔器で、68は縦長剝片の左縁辺に二次加工を加えて刃部をつくり出している。53は表採、52・66~68は第2層出土。

使用痕ある剝片石器 (55~63・69~70・73)

59が褐色チャート製である他はすべて良質黒曜石製である。いづれも縦長剝片の縁辺の一部に二次加工を加え、使用痕がみられる。削器的用途を持つものと考えられる。55・56・58・60・63・70は第2層、57は第3層、59・73は第1号溝、61・62は第3号竪穴出土である。

剝片 (71~72・74~83)

72が淡褐色珪質泥岩製の他はすべて良質の黒曜石製である。71・75は縦長剝片の好例で、74・82は寸ばかりの剝片の例である。71・72・74~78・81~83は第2層、79・80は第1号溝出土である。

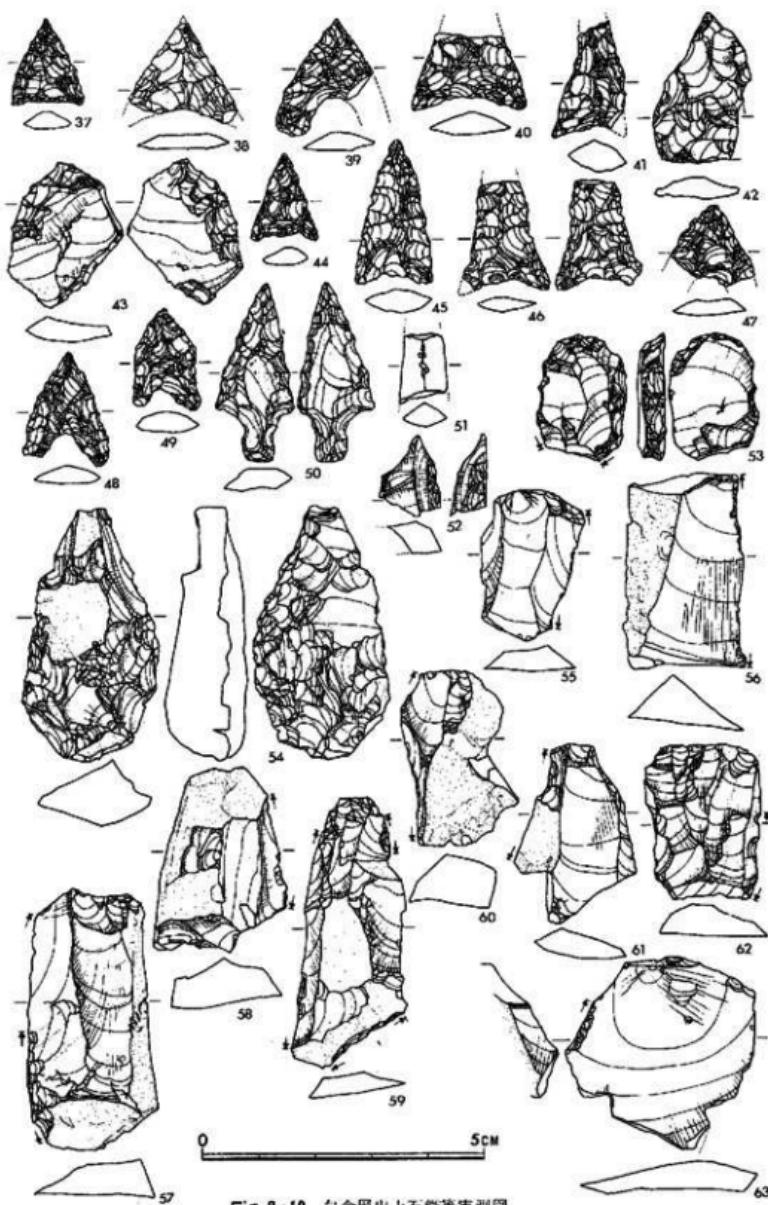


Fig. 3-19 包含磨出上石器等实物图

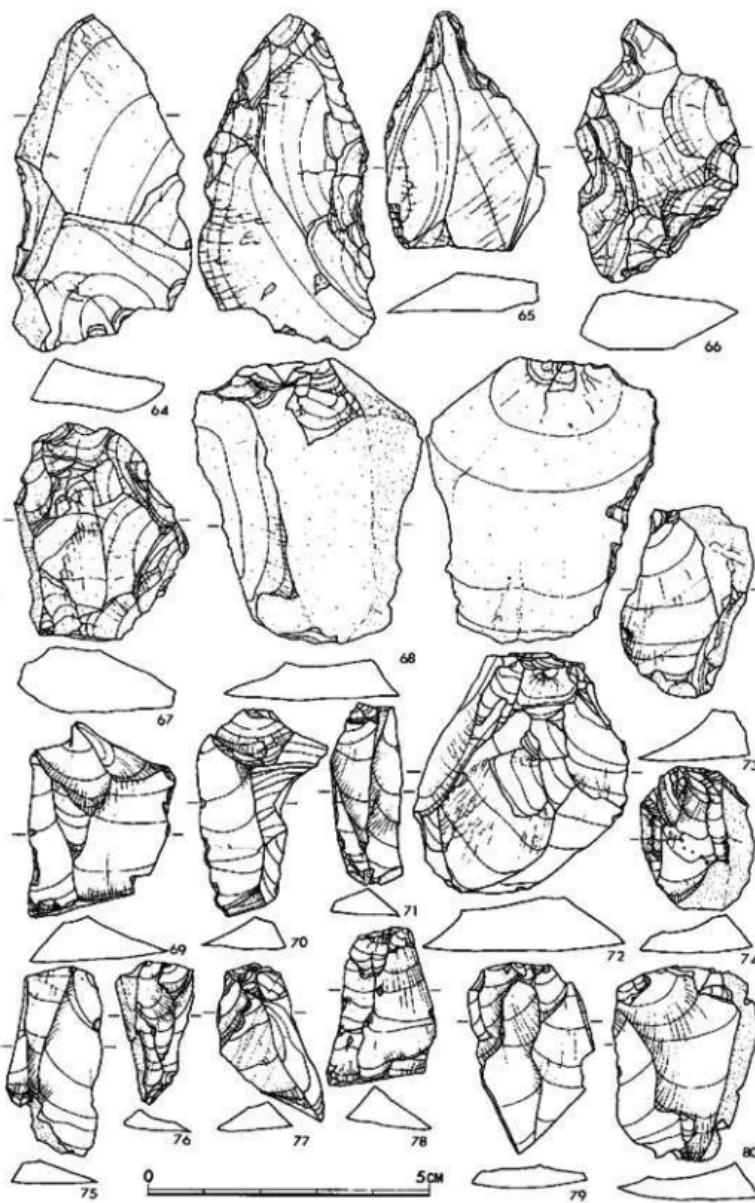


Fig. 3-20 包含层出土石器实测图

石核 (84・85)

石器ではないが、利器と直接的にかかわりあるため、ここでふれる。84・85とも、良質の黒曜石角礫を素材としており、2点とも、平坦な自然面を打面として、剥片剥取が行なわれている。85は第2層、84は第2号竪穴出土。

不明石器 (32)

安山岩質凝灰岩ホルンフェルスを素材として、すべての面が入念に研磨されている。上半分が欠損しているので、全体の形状は分からぬが、基部は直線的で片刃の刃部がつくり出されている。さらに両側縁も両刃で鋭い。重さは10.1gで第2層出土。

漁獵具 (Fig. 3・22)

土鍤 (101)

灰褐色を呈し、胎上には細砂・石英粒を含み堅硬で、手づくねで整形し表から棒状工具で穿孔し、その後、裏面から同工具で調整し、焼成も良好である。重さは26.1gで、第1号溝出土である。

その他 (Fig. 3・18, 3・21, 3・22)

勾玉 (95)

滑石片岩製で、入念に研磨され、穿孔は表裏から行なわれている。重さは4.1gで、第2層出土である。

穿孔石器 (96・97)

1点とも滑石片岩製で、穿孔が行なわれている。97は約半分欠損しているが、穿孔が行なわれ、表裏に比較的深い溝が掘られている。重さは38.6gで第2層出土である。G・H-5出土の60と同種のものと考えられる。

紡錘車 (98~100)

98・99は土製で、100は絹雲母滑石片岩製である。98は赤褐色を呈し、胎土には石英・砂粒を含み、手づくねで円盤状に整形し、表から穿孔している。焼成も良好で、重さは16.5gである。第4層出土。99は淡褐色から灰色を呈し、胎土には、石英粒を含み手づくね整形で、分厚い円盤をつくり、裏から穿孔している。焼成も良好で、重さは19.8gである。100は表裏・周縁とも入念に研磨されているが一部剥落している。穿孔は表裏の穿孔線上に細かい打痕があるところから表裏から行なわれたと考えられる。重さは31.5gで、98とともに第2層の出土である。

四石 (89)

花崗岩製で、周縁部には磨痕がみられ、表裏に円錐状の浅い凹みがある。重さは811gで、第5号竪穴出土。

磨石 (90・91)

二点とも花崗岩製で、磨痕がみられる。91は半制品で、右に打痕がみられるが、火をうけており、その際の欠損とも考えられ、半剖面には灰の付着がみられる。重さ287g。90は第1号溝、91は第3号竪穴出土である。

砥石 (92~94)

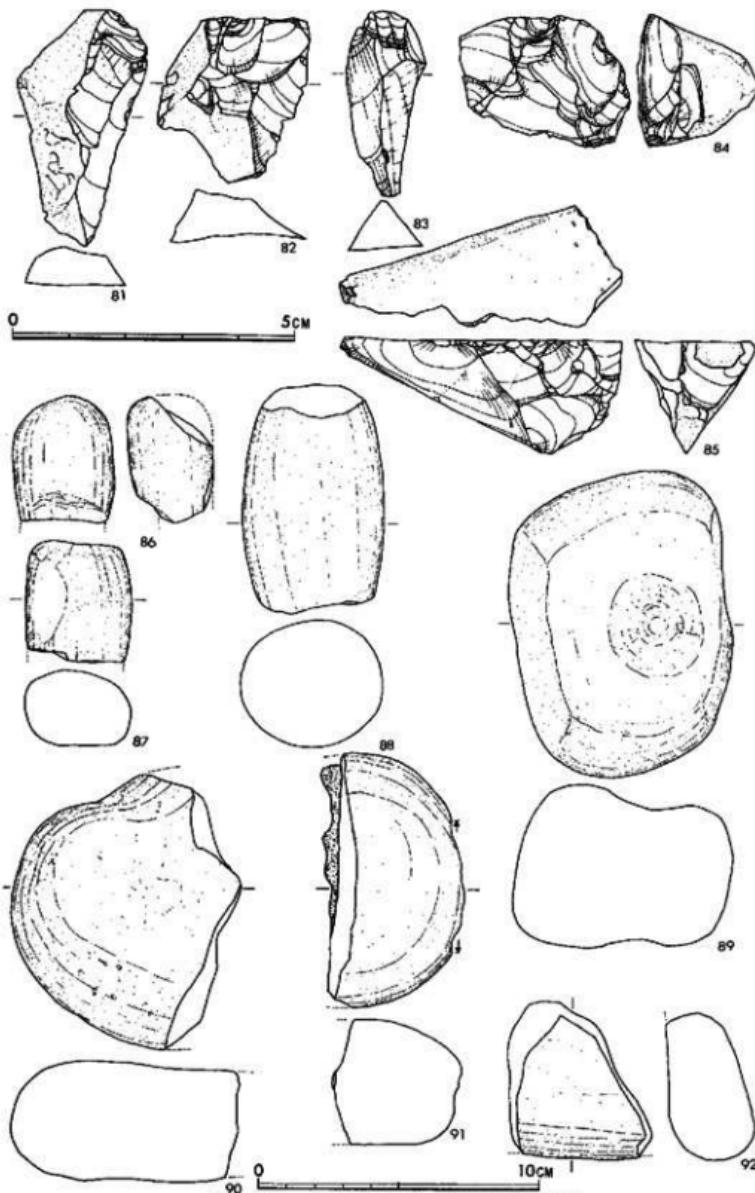


Fig. 3-21 包含层出土剥片·石核·磨石等实测图

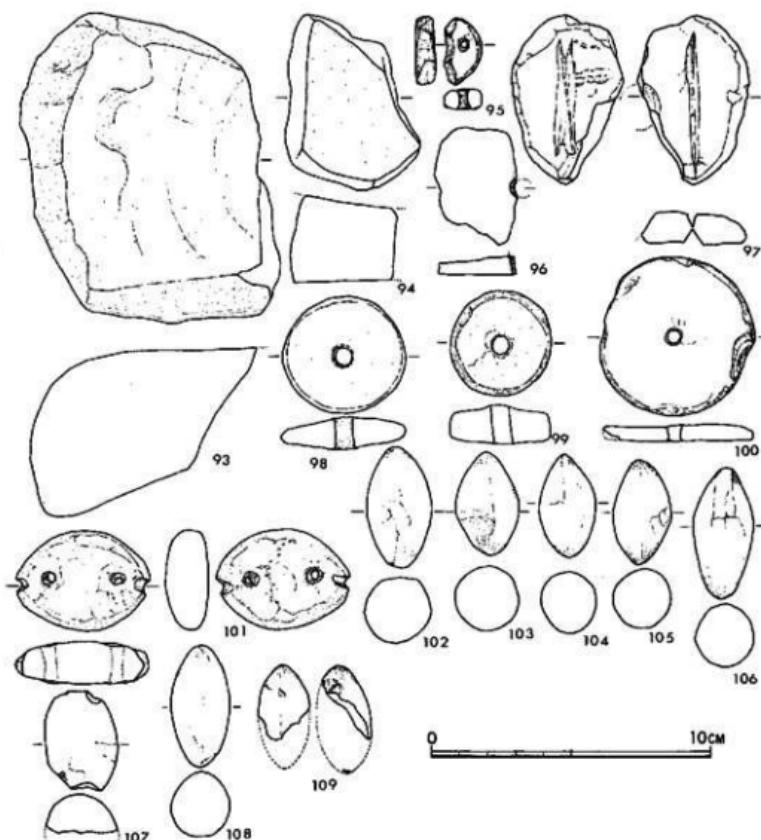


Fig. 3-22 包含層出土石製品・I: 製品実測図

すべて砂岩製で、92・93は一面の砥面を持ち94は表裏に砥面がある。94は第2層、92・93は第3号竪穴出土。

以上、109点について略述したが、これらを含めて、石器109点、滑石製品4点、土製品11点、剥片105点、削片288点、石核38点、黒曜石礫・石英礫・小円礫等231点で、総数726点が出土している。

石斧類は土器・木器を除いたすべての遺物の割合は3.9%で、石器109点中の割合は25.7%である。石斧28点は蛤刃石斧が最も多く24点で、蛤刃石斧の中で8点が今山産出玄武岩製の大型蛤刃石斧である。石材としては片刃石斧の4点はいづれも堆積岩を原材として、蛤刃石斧は2点が堆積岩で、他は火成岩を原材としている。

収穫具としては石庖丁9点、石鎌1点で、石庖丁木製品が1点であり、石器の中での割合は10.1%である。石材としては31が赤紫色凝灰質頁岩製の他はすべて、安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製であり、原材料はすべて閑門層群中の脇野原層群に含まれる堆積岩を素材としており、筑豊地方に原材料をもとめていることは興味がもたれる。(注1)

利器の中では飛道具(ナイフ形石器を除く)が、最も多く、土器・木器を除いた遺物総数の3.3%をしめている。もし、小円礫が、投弾として使われたとすると、28%をしめている。石鎌は1点が磨製で堆積岩を利用している他すべて打製で、12点が良質の黒曜石を原材料としている。打製石鎌の重さは未製品と考えられる43が2.2gあるが、成品では50の1.6gが最も重く、44の0.4gが最も軽い。0.7g前後が6点で、1.1g前後4点である。十製投弾は紡錘形のものが8点出土しており、2点が破片で他は完形である。さらに、5点は第3号竪穴から出土している。まとまって出土した例は小郡市の津古中の台遺跡で1軒の住居跡から55~60個出土の例がある(江上1971)が、ほとんどは単独で出土している。本地点では大きさは最も大きいのが102で4.2cm×2.3cm、重さ21.3g、軽いのが、105の3.65cm×2.1cm、重さ12.5gである。完形品6点の平均値は3.97cm×2.17cm、重さ16.4gで、日本では福岡県を中心として、東は愛知県まで、30箇所の遺跡で出土しているが、他遺跡のものより、やや小さい。また出土地は湿地帯または川のそばの遺跡が多い点は本遺跡の出土例も考え合せて興味がもたれる。

スクレイバーは9点出土しているが、7点が火成岩を素材としている。

32は、3縁辺に鋭い刃部があり、類例をみない石器で、用途等は不明であるが、今後の類例をまちたい。

その他の石器を除いた石器出土総類は86点で、磨製石器が、54.7%である。

石器等は第1~3号溝、第2・3・5号竪穴から出土しているが、いづれも直接的にかかあり合うとは考えられないところから流れ込んだものと考えられる。上層も、第3・4層以外は動いており、良好な堆積状態といえない。又、第4層は弥生時代前期の層であるが、第1・3号溝間に残っているのみで、土製紡錘車が1点出土した。しかし石器は出土しなかった。第3層は弥生時代中期後葉の包含層と考えられるが、すくなくとも北部九州では弥生時代中期後葉まで、今山産出玄武岩製の大型蛤刃石斧が残った例がないところから、前時期の混入と考えられる。

本地点出土の石器は抉入石斧・扁平片刃石斧・黒曜石製品を除いて、いずれも、福岡県内産出の原材料を用いており製作・使用時期は弥生時代の前期から中期後葉のものが主体をしめているといえよう。

(山口)

注1 石材及び石材供給地は大田正道氏の鑑定、教示を得た。

Tab 3-2 H-5 地点 出土石器・石製品・土製品一覧表(石材鑑定は太田正道博士による)

No.	品種	石材	層位	備考	Fig.	PL	No.	品種	石材	層位	備考	Fig.	PL	
1	ナガワヒメ	古銅鑄造安山岩	第3層	重さ7.8g	3-15	III	56	Uフレイク	黒曜石	第2層	重さ3.19g			
2	*	黒曜石	任第2層	重さ0.6g	3-15		57	*	*	第3層				
3	投入石刀	黒色砂質粘土岩	第1号溝下部	重さ370g	3-16	III	58	*	*	第2層				
4	*	石斧質石	岩第3号溝下部	重さ235g	*	III	59	*	褐色チャート	第1号溝下部		*	III	
5	墨玉石	社質板石	石第3号溝上部	重さ80g	*	III	60	*	黒曜石	石第2層		*		
6	石斧?	赤褐色砂質粘土岩	第1号溝上部		*		61	*	*	第3号溝下部		*		
7	石斧	赤褐色砂質粘土岩	第2層	重さ455g	*	III	62	*	*		*			
8	*	安山岩	岩第1号溝上部	重さ576g	*	III	63	*	*	第2層	*			
9	人型埴輪矛	今止美安武若	第3層		3-17		64	擦	安山岩?	第3号溝穴		3-20		
10	*	*	第1号溝上部	重さ305g	*	III	65	石	砂質板石	第2層	*	*	III	
11	*	*	*		*		66	(様若?)	占浦産石	安山岩		*		
12	*	*	第1号溝		*		67	搔	器	*	*	*		
13	*	*	第2層		*		68	削	器	*	*	*		
14	*	*	表	採	*		69	Uフレイク	黒曜石	第3号溝穴	*			
15	蛤刃石斧	赤褐色砂質粘土岩	第1層	*	*		70	*	*	第2層	*			
16	*	安山岩	第3号溝穴		*		71	剥	片	*	*	*		
17	*	玄武岩	第2層		*		72	*	淡褐色砂質粘土岩	*	*			
18	*	*	第3号溝穴		*		73	Uフレイク	黒曜石	第1号溝上部	*			
19	*	暗黒色中粒砂岩	第1号溝下部		*		74	剥	片	*	第2層	*		
20	蛤刃石斧	褐色砂質粘土岩	第3号溝下部	重さ206g	*		75	*	*	*	*	*		
21	石錐	安山岩質板石	第1号溝上部	重さ42.6g	3-18	III	76	*	*	*	*	*		
22	石砲丁	*	第1層		*		77	*	*	*	*	*		
23	*	*	第2層		*		78	*	*	*	*	*		
24	*	*	*		*		79	*	*	第1号溝上部		*		
25	*	*	*	重さ40.1g	*	III	80	*	*	*	*	*		
26	*	*	第1号溝上部	重さ25.2g	*	III	81	*	*	第2層		3-21		
27	*	*	*	重さ28.0g	*		82	*	*	*	*	*		
28	*	*	*	*	*		83	*	*	*	*	*		
29	*	安山岩質板石	第3号溝穴		*		84	石核	*	第2号溝穴		*		
30	(未製品)	赤褐色砂質粘土岩	第3号溝大下部		*		85	*	*	第2層				
31	石砲丁	赤褐色砂質粘土岩	第1号溝上部	重さ17.8g	*	III	86	砂	岩第2号溝		*			
32	*	赤褐色砂質粘土岩	第2層	重さ10.1g	*		87	*	*	第2号溝大下部		*		
33	磨製石剣	黑色砂質粘土岩	第1号溝上部		*		88	*	*	第1号溝	重さ227g	*		
34	磨製石剣	*	第2層	*	*		89	凹	石花崗岩	第5号溝穴	重さ811g	*		
35	*	*	*	*	*		90	磨	石花崗岩	第1号溝上部		*		
36	磨製石剣	片岩	第2号溝	*	*	III	91	(敲打跡)	閃綠石花崗岩	第3号溝穴	重さ287g	*		
37	打製石核	黒曜石	第2層	重さ0.5g	3-19		92	砥	石	*	*	*		
38	*	古銅鑄造安山岩	*	重さ0.7g	*		93	*	*	*	3-22			
39	*	黒曜石	*	重さ0.8g	*		94	*	*	第2層	*			
40	*	*	*	重さ0.9g	*		95	勾	表	滑石片	岩第2層	重さ4.1g	III	
41	*	*	*	重さ1.1g	*		96	穿孔石	滑石片	岩第2層	重さ38.6g	*		
42	*	*	*	重さ1.0g	*		97	(勾玉未製)	藍色母岩石	*	重さ38.6g	*		
43	(未製品)	*	*	重さ2.2g	*		98	磨	青玉	第4層	重さ16.5g	*		
44	打製石核	*	*	重さ0.4g	*		99	*	*	第2層	重さ19.8g	*		
45	*	*	第2層	重さ1.2g	*		100	*	滑	石片	*	重さ31.5g	III	
46	*	*	*	重さ0.7g	*		101	上	鐵	土	製	第1号溝上部	重さ26.1g	III
47	*	*	第3号溝穴	重さ0.5g	*	III	102	投	彈	第2層	重さ21.3g	*		
48	*	*	第3号溝大下部	重さ0.7g	*	III	103	*	*	第3号溝穴	重さ24.2g	*		
49	*	*	*	重さ0.8g	*		104	*	*	第3号溝大上部	重さ13.4g	*		
50	*	古銅鑄造安山岩	*	重さ1.6g	*	III	105	*	*	第3号溝大下部	重さ12.5g	*		
51	磨製石核	黑色砂質粘土岩	*	重さ0.4g	*		106	*	*	第3号溝大上部	重さ20.1g	*		
52	搔	器	黒曜石	第2層	*		107	*	*	第1号溝上部	重さ13.1g	*		
53	*	*	表	採	*		108	*	*	第3号溝大上部	重さ17.5g	*		
54	尖頭石斧	*	第3号溝大下部	重さ13.9g	*		109	*	*	第1号溝上部	重さ4.3g	*		
55	Uフレイク	*	第2層	*	*		110	角	礫	黒曜石	心	第1号溝最下部		III

1 木製品 (Fig. 3・23~3・26)

長柄鎌 (Fig. 3・23, W-1) 1号溝北側の、東壁で段状部を造る位置の床部近くから、横位の状態で出土し完形を保つ。全長95.6cm。鎌身部は長さ39.7cm。最大幅14.1cm。最大厚さ3cmを測る。平面は、肩部でやや狭く中央部が若干ふくらむ感じもあるが、ほぼ同程度の幅をもち、刃先部は丸くなっている。縦断面は基部が最も厚く、刃先に向けてゆるやかに薄くなり、刃先は鋭く尖るのが原状と考えられる。横断面では使用面が少し凹み、裏面がふくらむ。いわゆる三日月形をなしているのがわかる。整形は、原木の中心をはずした板材利用で肩部では削り面を明瞭に認め、身部では、端部に近く弱い削りによる稜をみるとめる。全体にていねいな削り仕上げが見られる。柄部は、長さ55.9cm。直徑2.5~3.0cmを測る。柄先端は4つの弱い切削面をもつが全体に丸味をもって整形されている。この端部では、板付（後藤・沢1976）のフォーク状木器に見られるようなT字形か、それに近い柄の握りを装着するための明確な加工は見ることはできず、T字形をしたままの柄の使用方法が妥当と考えられる。横断面はほぼ円形に近く、削り面は明瞭に見られず、ていねいな調整で丸みをもっている。刃部使用痕や柄部の手すれは、明確にできないが全体として磨耗の跡はあまりなく、ほぼ良好な状態を残している。

二又鋤 (Fig. 3・24, W-3) 棒状造構の北側の1号溝内出土。全体の $\frac{1}{2}$ 程を欠損し、刃先と頭部を欠いている。現長41.4cm。厚さ1.9cmを測る。平面形はまっすぐのび、ふくらみはあるみられない。断面は刃部で内側に向けて砲弾形をして、内側には加工稜をもつ。中央部は長方形、頭部は方形をなし、着柄のための方形の穿孔をみるとめ、その大きさは不明だが、着柄角は約65°である。加工は刃部の根本では、小さな削りのあとをみるとめ、他は全体にまとまりのある加工を行って整えている。これはW-2084（後藤・沢編1976）に類似するものである。板材利用。

鎌 (Fig. 3・24, W-2, W-5)

W-2は1号溝内の棒状造構の西側、壁の立ち上がりに近いところより刃部を下にして立位で出土する三又鋤である。柄、刃部、体部の一部を欠く。現長27.2cm。厚さ2.5cmを測る。これは板付（後藤・沢1976）のW-2026に類似するものと思われる。柄部の断面は 1.9×3.3 cmの隅丸長方形で、削りのあとに磨きかけたような調整がみられる。身部は柄と鈍角に肩が左右に張り出す。この端部では厚さ1.2cmを測り、やや丸味を帯びる。推定肩幅18cmである。身部の中央では鋭くえぐられる。端部の厚さ2.1cm。推定幅11cm。刃部は3本とも欠けている。断面は中央の刃が 1.9×3.5 cmのはば古形呈をする。全体に削り面をよく残している好資料である。原木の板材利用。樹種はカシ。W-4は1号の西壁の上部より横位で出土する。現長35.9cmを測る。腐植があり、原状を詳しくとらえることができない。柄は欠損し現長9cm程残存する。断面は不整形であるが、原状は1片2cm程の四角形と思われる。身部のはじまるところで、残存状態から、肩部が張るものと思われ、厚さ2cmを測る。刃部は先端と基部を欠損するが、原状では17cm前後と考られる。加工痕は全く明瞭にすることできない。刃の傾きから、この面は使用面ではなく裏面であろうか。原木の中心をはずした板材利用。樹種はカシ。W-5は1号溝の北側で、溝西側の肩部から横位で出土した。二又もしくは三又の鎌であろう。腐植があり、残り

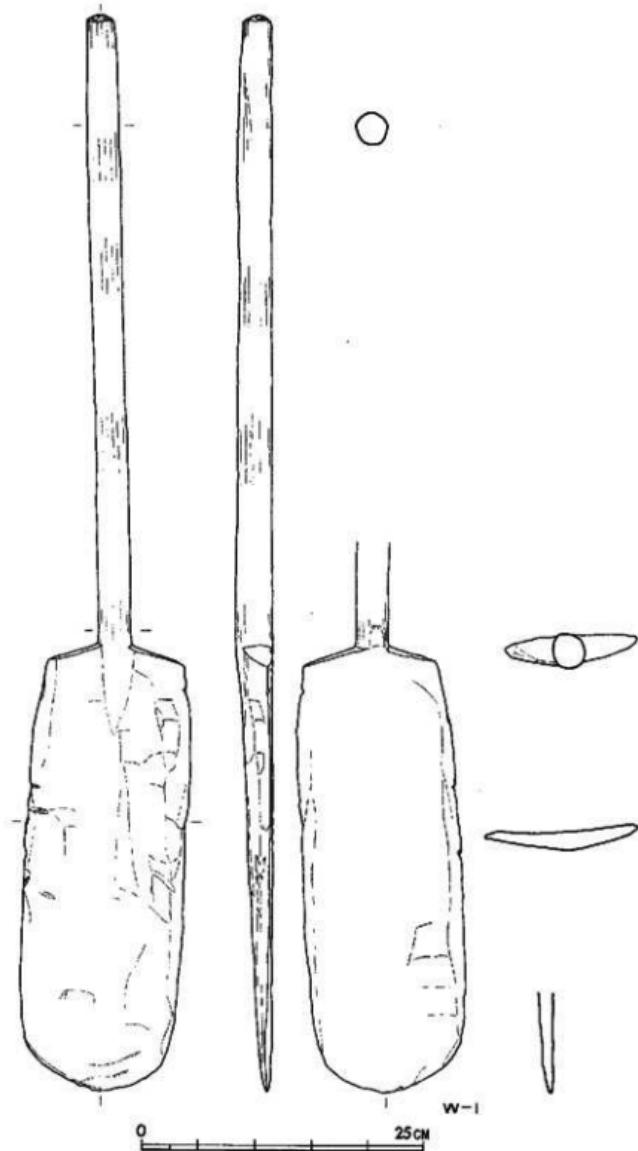
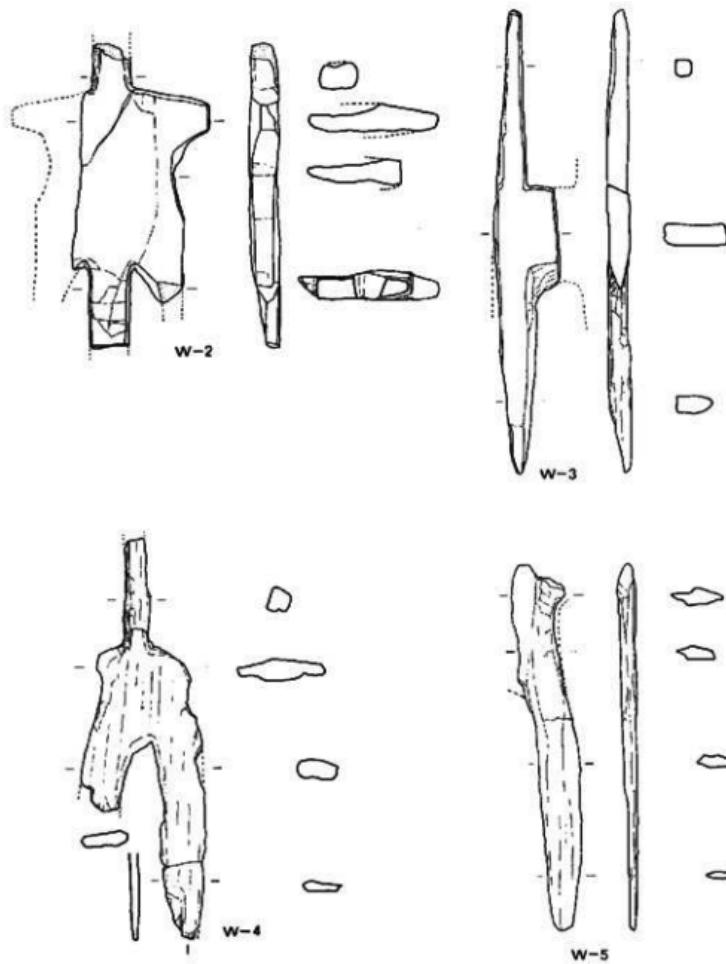


Fig. 3-23 出土鐵実測図



0 25 CM

Fig. 3-24 出土施・鉢実測図

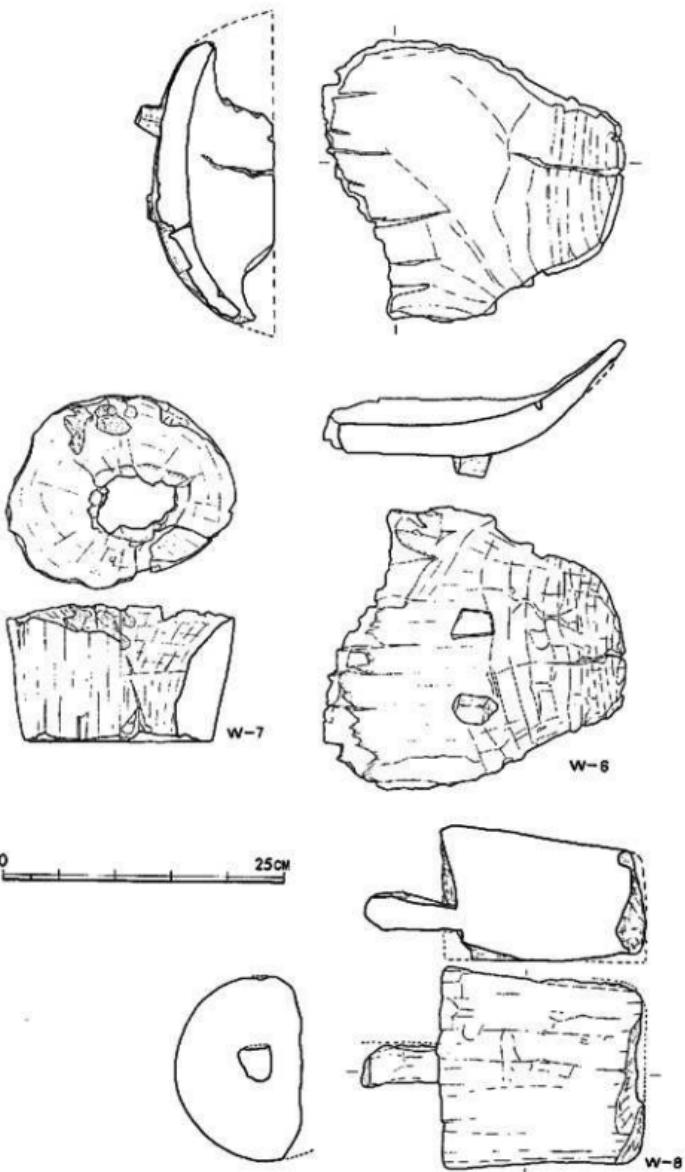


Fig. 3-25 出土容器・口状容器・椭圆测图

はよくない。現長32.6cmを測る。身部の半分を欠損しており全体を復原し得ないが、基部の方では左右の肩が張るものであろう。厚さ1.6cm。刃部の先端は磨耗もあり、明確にできない。刃は3.5×1.2cm程の扁平なものでありW-4に近い。加工の状態はわからない。原本の板材利用。

脚付容器 (Fig. 3・25, W-6) 半分ほど欠損しているが、平面形は隅丸長方形である。体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上がる。全体にはていねいな調整がみられ、口縁端もゆがみがない。容器内の深さ7.5cm、底の厚さ2.5cm、口縁で1cmを測る。脚は底部に2個埋存しており、間隔は5.5cmで、外側に開いている。約2cm×2.5cmの横断面方形で先端は欠損しているが、長さは3cm内外と思われる。復原すると、長径40cm～50cm、短径30cm前後と考えられる。この容器は唐古遺跡や伊豆山木遺跡の例に似ているが、大きさは両者の中間くらいである。整形は口縁面が木目に平行するように削られている。現状で、長径27cm、短径25cm、高さ12.2cm。材質は堅く。時期不詳。

小型臼形木器 (Fig. 3・25, W-7) W-7は1号溝内の桶状造構北側に横位で出土した。高さ10cm、最大径20cmを測る。腐植しており加工面を明瞭にできないが、内面をていねいに削り仕上げしたものと思われる。底部は孔をもつが、原状では臼型をしていたと推定できる。口縁面はそろっていない。原本の輪切りを利用している。

椎形木器 (Fig. 3・25, W-8) W-8は1号溝内の北側で、東壁段状部の第3号竪穴が落ち込んだ位置から出土する。現長25cm、幅18cm、厚さ12cmを測る。把手部は欠損し、断面2.8×3.2cm程であるが、形を明瞭にできない。把手を整形時に身を少しえぐり込んでいる。身の把手より左で先端部が狭くなっている。腐植あり。原本の輪切り材を利用し、外面では樹皮を残している。

杭 (Fig. 3・26, W-10～14) W-10は丸杭で1号溝内北側で溝の修復に利用したものであろう。現長91.5cm、最大径7cmを測る。先端の削りは4つの面をもち、約29cm程の削りの長さであり、自然面を一つもっている。削りは鋭い。体部は樹皮を残している。

W-11は1号溝西側の4層に打ち込まれた丸杭で、体部欠損。先端は杭利用時にぶれている。現長47.4cm、最大径6cmを測る。削り面は先端から15.5cmの長さで5つの面をもち、自然面は一つある。体部には、節を削った3面の加工面をもっている。削りは細かい加工をもつ。樹皮を残す。

W-12は1号溝内の桶状造構の西側で床面に打ち込まれた板杭で、原本の縱割りの板材の自然面を残し、中央部を縱割りしてはすしている。現長46.6cm、最大幅10cm、最大厚さ4.5cmを測る。基部の方には加工面をもつ。先端部には穿孔を明瞭に5つ認める。孔径は4mmと2mmの2つが考えられ、ほぼ円形に近い孔である。使用目的は判らない。孔は現面を出口としてあけられている。

W-13は3号溝出土の板杭で、原本の縱割りにより自然面を残し、さらに中心部を割りとっている。現長25.6cm、先端はぶれている。削りは端部から7cmの長さで、5つの面をもち自然面は1つである。腐植がやや目立つ。

W-10は1号溝内の東壁立ち上がり部分に打ち込まれた丸杭で、体部腐植が目立つ。現長38.4

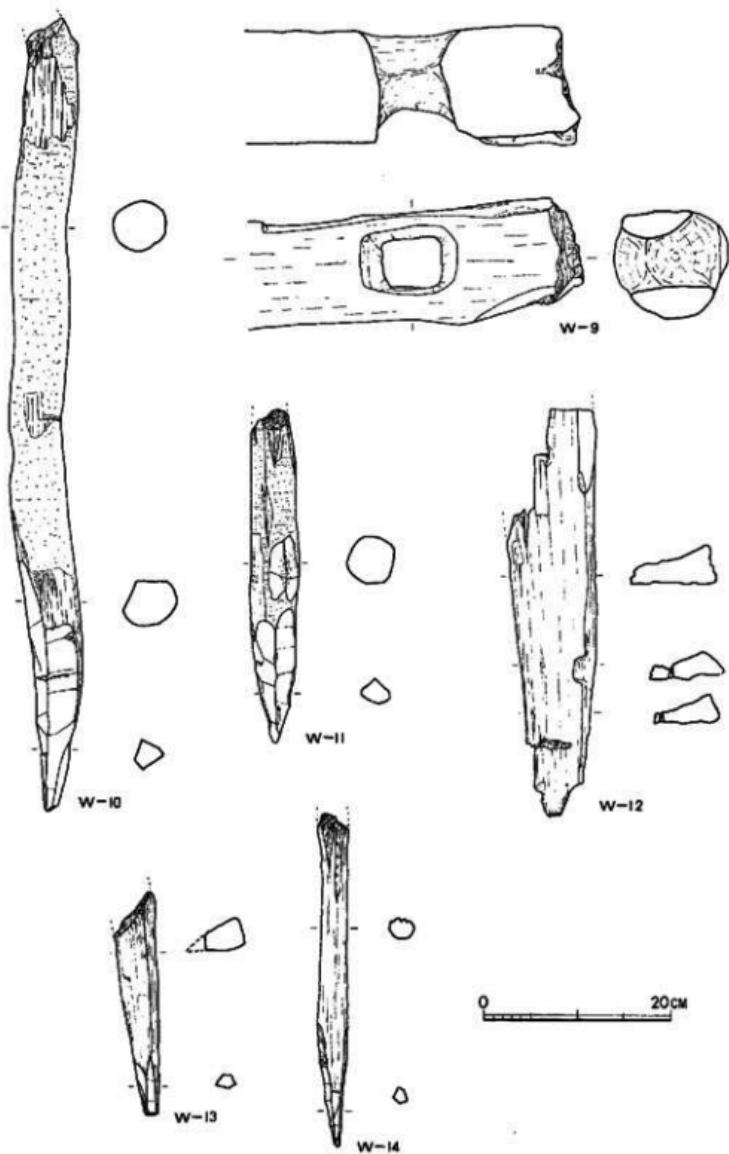


Fig. 3-26 杭州測圖

cm、先端部は杭利用時のつぶれあり。削りは端部から14cmの長さで、6面の全体加工である。削りは細かい。樹皮はもたない。

W-9は1号溝内北側で、穿孔内に丸木の加工杭を通した状態で出土したもので、基部は原木を輪切りしたままで、細加工をしてない。現長1.4mを測るが、加工部のみ実測する。原木の輪切りの痕は、切断面を明瞭に残していない。輪切り後、2面の加工面をつくり断面が四角形に近い状態にし、穿孔を行っている。平面形は隅丸長方形である。削りの痕は明確でないが、孔の上下から横方向の削りを加えながら、孔を穿っている。孔径は最小5.8cm、最大9.5cmを測る。削りそのものは粗いが、穿孔部は細かい削りである。丸木の加工杭を差し込んでおり、その意図するものはわからない。

まとめ

農具は長柄鋤1点、又歛1点、叉鍬3点を出土し未製品かと思われるものが2点出土したが明確にはできない。この内、W-1~3は、第1号溝使用当時の流れ込みと考られるので、使用時期は、弥生時代中期後葉頃と考えられる。これらの木器は、G-24、G-26トレンチにおける中期後葉～後期初頭出土の木器と時期を一にしており（後藤・沢1976）、追加資料となるものである。この両地点の中央東側の台地上に立地するG-5a地点の調査により、弥生時代前期末～中期中葉の墓地とともに中期後葉の井戸が検出された（山口1976）ことから、この一帯がその当時の生活地であったことが知られる。

今回の出土木器は、調査面積が狭く出土品も少いため、機種や出土数の比較はできないが、板付（後藤・沢1976）同様に全体として鋤、鍬は長柄鋤以外は、全て刃部が又状のものである。

生活用具としては、脚付容器1点、小型臼形用具1点、槌形用具1点を出しているが、形態から見た機能を詳細にはできない。

杭の中では、1号溝内出土の一木に隅丸長方形の穿孔をもち、中に丸木の加工杭を通している遺物と、櫛状造構近くの板杭に小さな穿孔を数個もつものが注目される。

杭は、1本を利用した丸杭と、縦割りの板材を利用した板杭に分けられ、板杭は、櫛状造構部が多く、北側では、長さ1mをこえる、上留め用の杭が目立っている。 (原)

注1 第6章 木器類及び植物製品 D 132

方盤形木器 北方砂層出土 (3・4様式下限) 長径23cmを測る。(末永・小林・藤岡1943)

注2 木下忠 第7章 「木器」 P. 58 大形の片口形の容器 長径88cm幅50cm。(後藤1962)

IV まとめ

本地点は、台地際の確認、台地際の生活の場がどのような状態であるかを調査の主目的として行なった結果、II・IIIで述べたような成果をあげることができた。要約すると次のようになる。

1. 台地の西際が確認され、この台地際線はG-24・G-25トレーナーで確認された（後藤・沢 1976）台地際線につながると思われる。
2. 第2・4号竪穴は、弥生時代前期のもので、板付周縁部に位置するG-5a地点の第2号竪穴など（山口 1976）、G・H-5地点（本書収録）の竪穴が同時期と考えられ、弥生時代前期の生活の場は、台地周縁部まで広がっていたと考えられる。
3. 弥生時代中期以降の3本の溝状遺構が確認されたことによって、少なくとも本地点では、弥生時代中期中葉以降に沖積地の利用のしかたが変化するのでないだろうか。
4. 本地点は石器が多数出土し、弥生時代の石器の磨製石器と打製石器の比がほぼ1:1であり興味がもたれる。また石材利用の面では、片刃石斧類では、外国産と考えられる堆積岩をもちいており、収穫具類は筑豊地方に石材をもとめている（太田正道氏鑑定）ことは、他遺跡との比較ができれば、石材などの同定が可能になろう。
5. 弥生時代中期後葉と考えられる。方盤形木製容器、鋤などの出土も特記できる。

(山口)

〔参考文献〕

- 江上幹幸（1971）弥生時代の投彈 考古学ジャーナルNo54
後藤守一（1962）伊豆山木遺跡
後藤直・沢臣編（1976）板付市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971～1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集
未永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎（1943）大和唐古弥生式遺跡の研究 京都帝国大学文学部考古学研究報告書第16冊
山口謙治編（1976）板付周辺遺跡調査報告書（3）福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集



G・H-5地点出土イノシシ歯(実大)

あとがき

1973年以来、今年度も板付遺跡周辺地域の緊急調査を実施した。

今回の調査は三ヶ所ともに板付遺跡環溝の西側および北西側に集中しており、板付台地から沖積地へ移る地点の状態が観察された。G-6a地点では、台地端はみつからず、厚い粗砂層の堆積があった。この層が弥生時代前期の層で、完形の丹塗り壺などの出土があり、単なる二次堆積とは言い難い。

G・H-5地点では、昨年度調査のG-5a地点と、一昨年度調査の板付北小学校校庭との間の調査で、この地点が鞍部になっていることが判明した。また弥生前期と思われる竪穴造構や、中期中葉の性格不明の溝などとともに、包含層中から、多量の土器・石器が出土した。

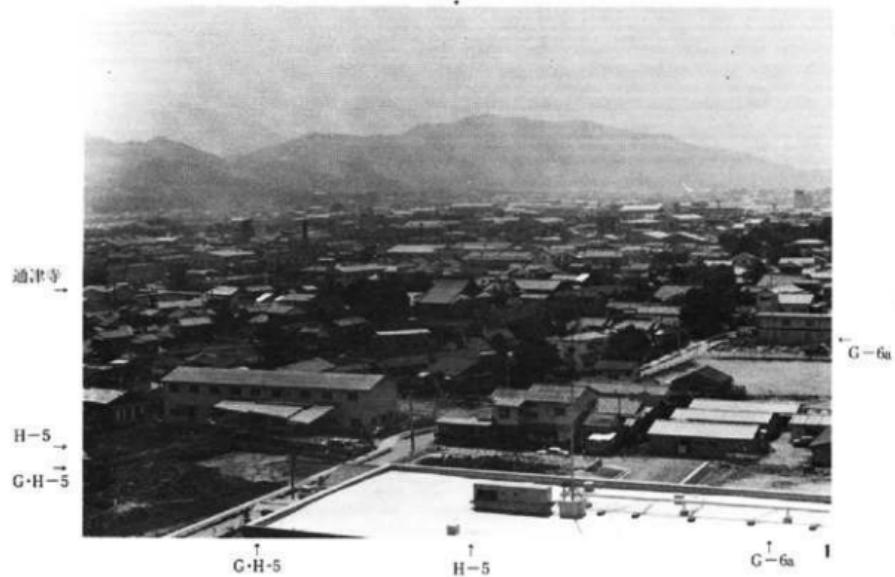
H-5地点では、台地端に存在する弥生中期後葉の溝とそれに付着する隧状造構や杭列とともに、木製品や多量の土器・石器が出土した。

このG・H-5地点とH-5地点は5mの道路をはさんだ地点でもあり、当時の生活用地と生産用地との関連を知るうえで重要な地点であったが、惜しむらくは、H-5地点の盛土が厚く、予算などの関係で小範囲の調査にとどまつたことである。

前述したように板付遺跡周辺の調査も今年度で4年目を向かえたが、今までがそうであったように今回も重要な遺跡が、緊急調査という名目で消えさせていくことは残念というより、むしろ一種の恐しさを感じる。

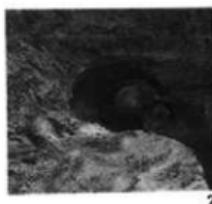
(次)

通津寺

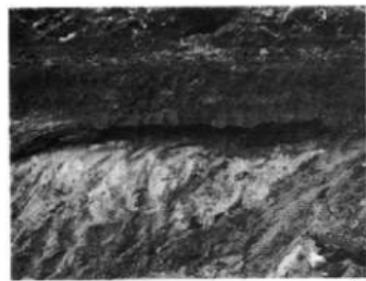


1 : 板付遺跡全景（北西から）

2 : G-H-5, H-5地点全景



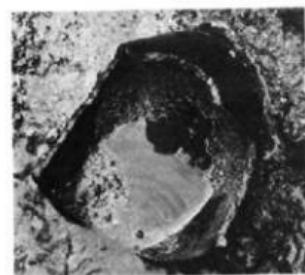
2



3



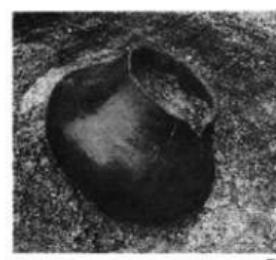
4



5



6



7



8

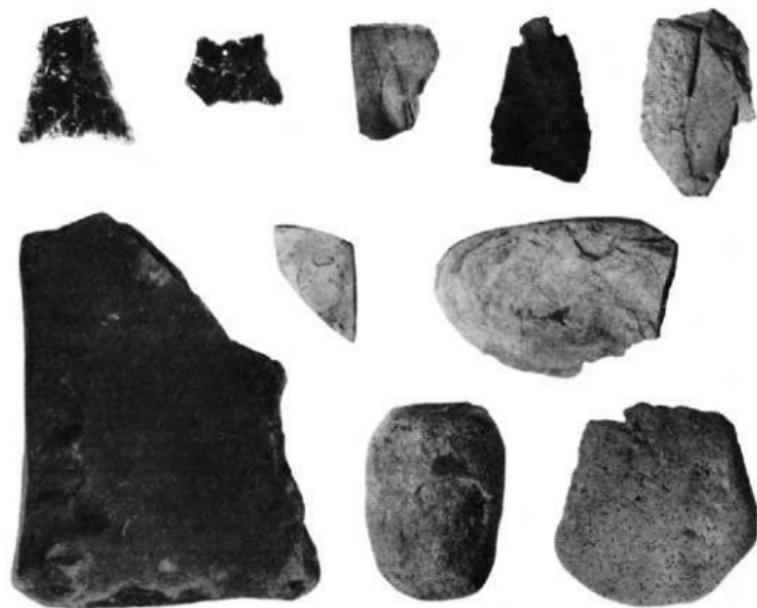
G-6a地点 1：免耕作風景(南から) 2,4：弥生時代前期壺出土状態(同一土器) 3：東壁断面
5-6：夜白式土器出土状態(同一個体) 7-8：弥生時代前期壺出土状態



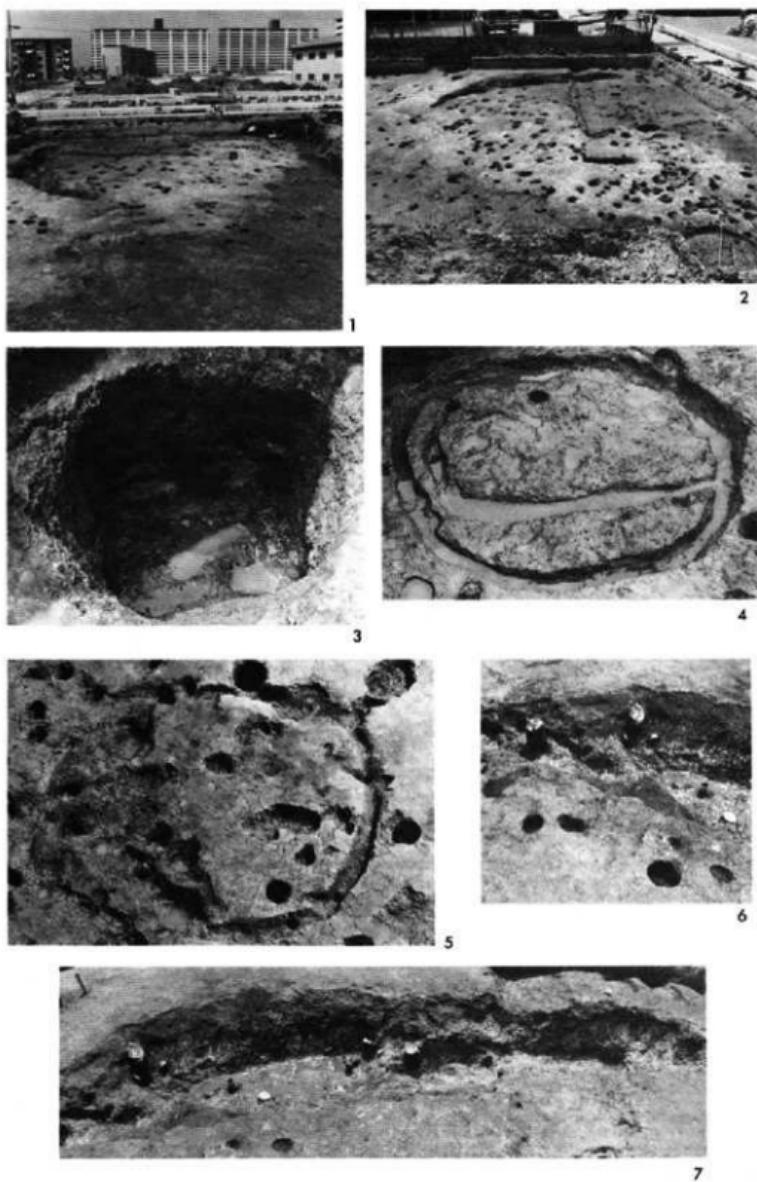
G-6a地点出土土器



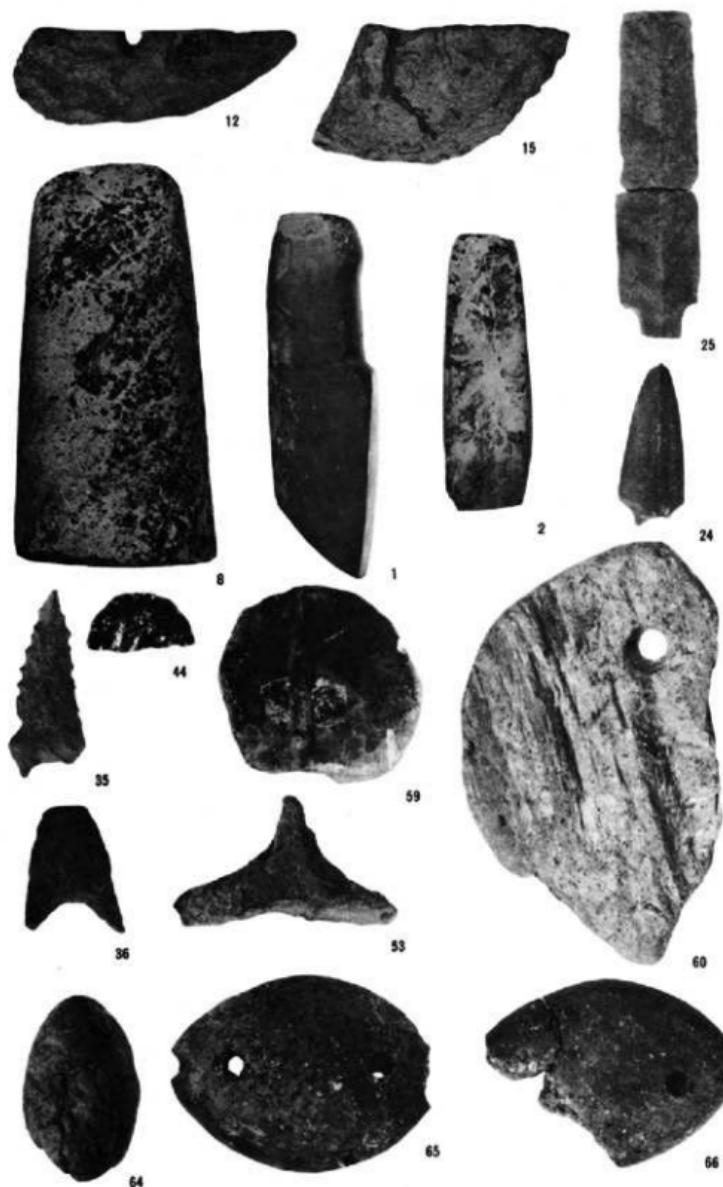
1. G-6a地点出土土器



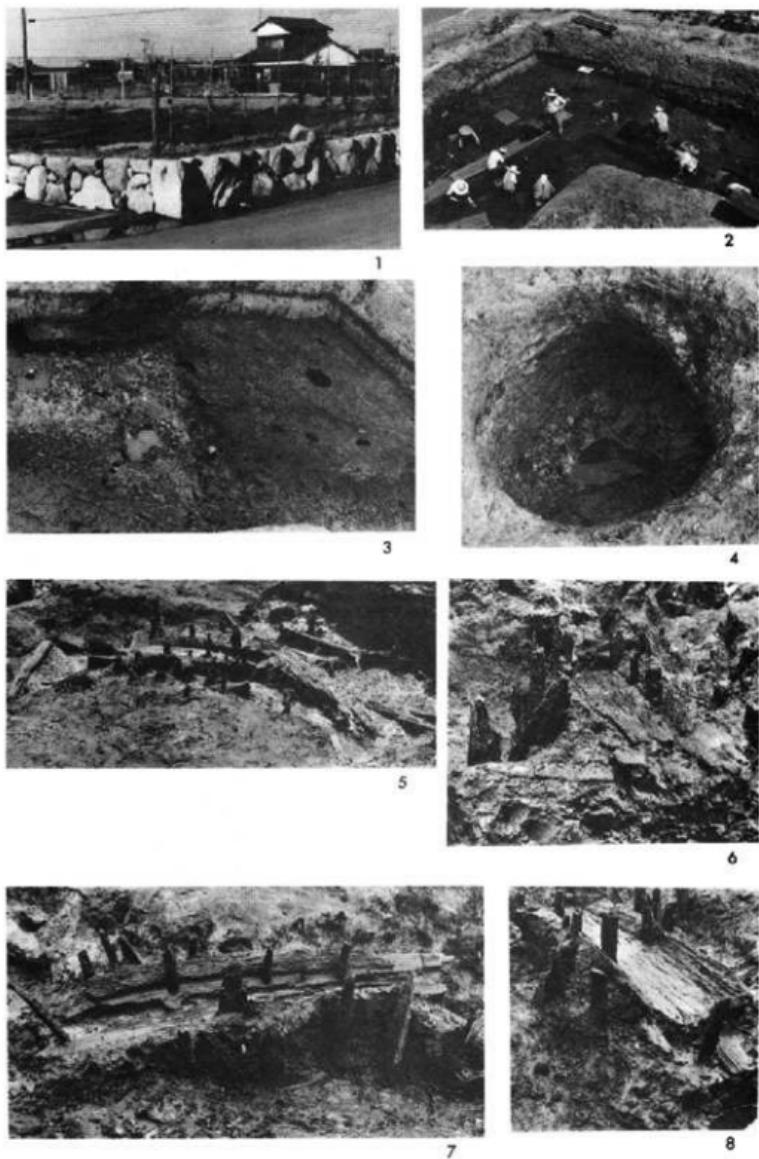
2. G-6a地点出土石器



G-H-5地点遺構出土状態 1:全景(東から) 2:全景(北西から) 3:第2号縫穴 4:第5号縫穴
 5:第6号縫穴 6-7:第1号溝状道構



G·H-5 地点出土石器、石製品、土製品



H-5 地点(1) 1: 全景(南から) 2: 発掘作業風景(北西から) 3: 古地(北西から)
 4: 第4号整穴 5: 第1号溝状遺構縫(東から) 6: 第1号溝状遺構縫(南から)
 7: 第1号溝状遺構縫(西から) 8: 第1号溝状遺構縫(北から)



1



2



3



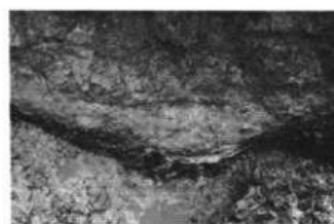
4



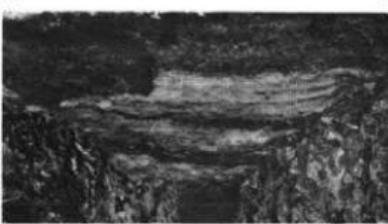
5



6

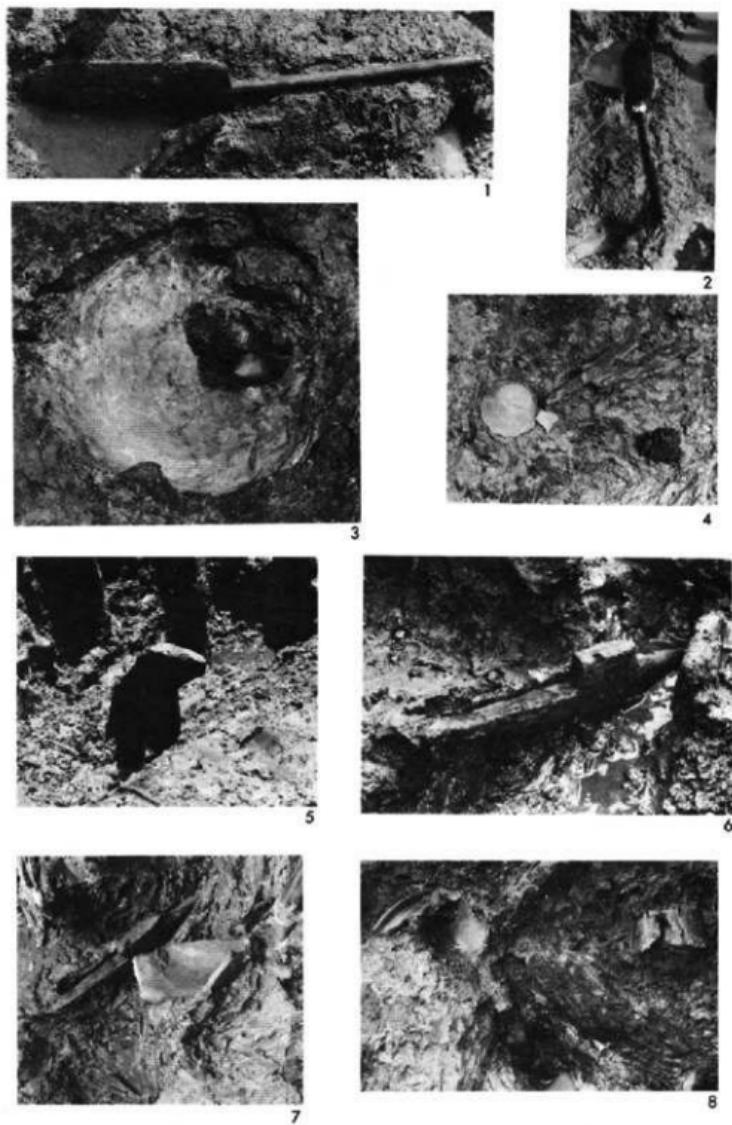


7

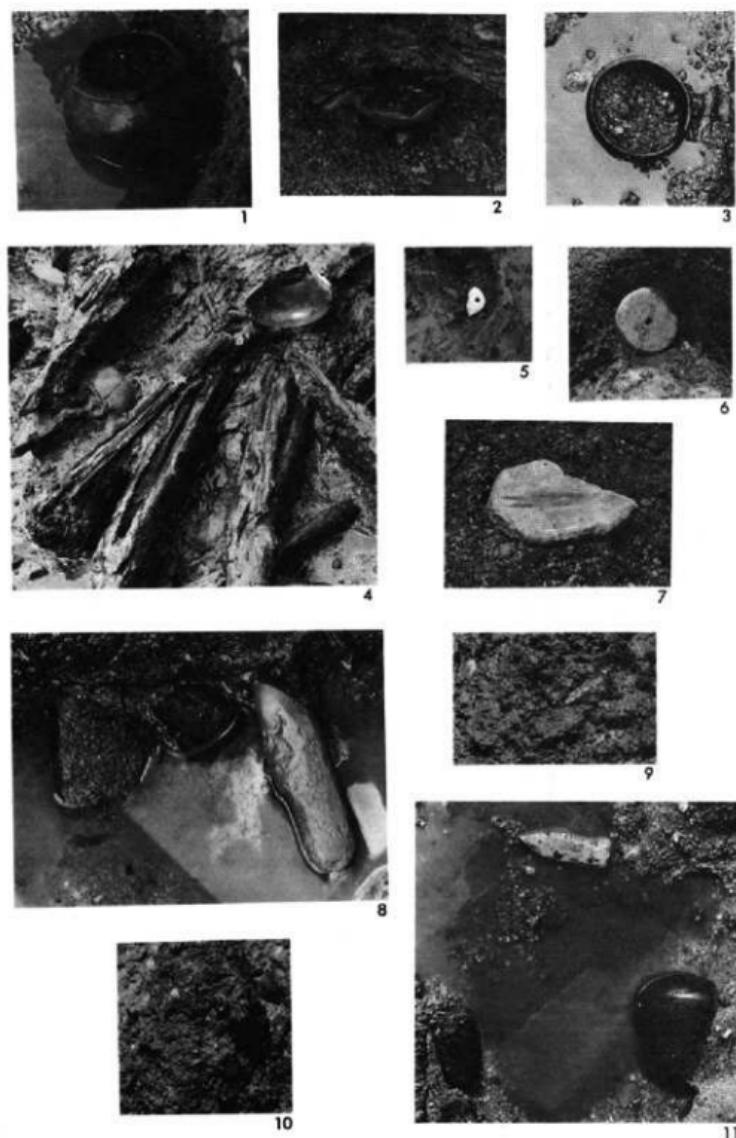


8

H-5 地点第 1 号溝状遺構(2) 1: 境目補強(北から) 2: 境目補強(北西から) 3: 境目補強(西から)
4: 境目補強(東から) 5: 溝補強 6: 溝補強? 7: 南断面
8: 北断面



H-5地点木器出土状態(3) 1・2:長柄器 3:蓋付木製容器 4:二又器 5:三又器
6・7:二又器 8:白状容器



H-5 地点遺物出土状態(4) 1:無頸壺 2-3:脚付鉢 4:第1号溝状遺構の無頸壺出土状態
 5:勾玉 6:石製纺錐車 7:不明石器
 8:第1号溝状遺構最下部の抉入石斧出土状態
 9-10:打製石器 11:抉入石斧、壺



1



2



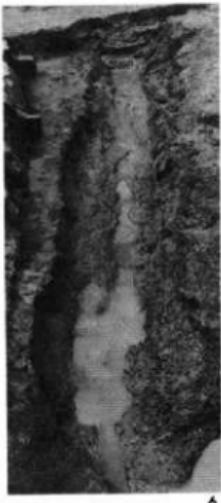
3



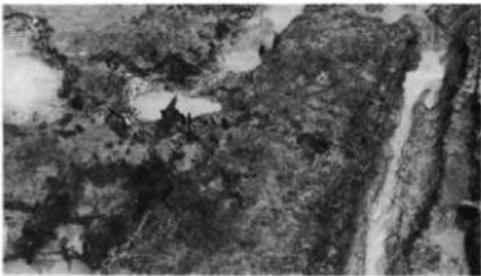
4



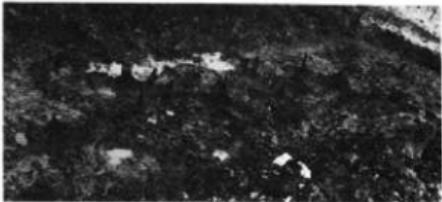
5



6

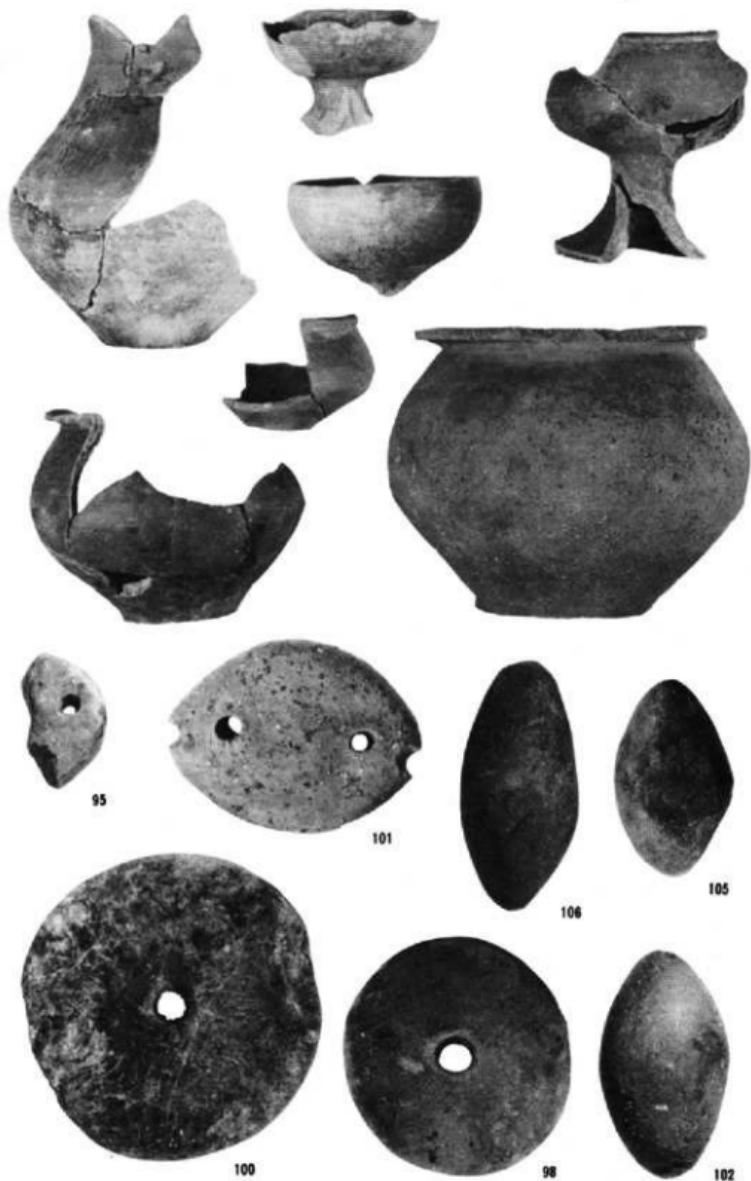


7

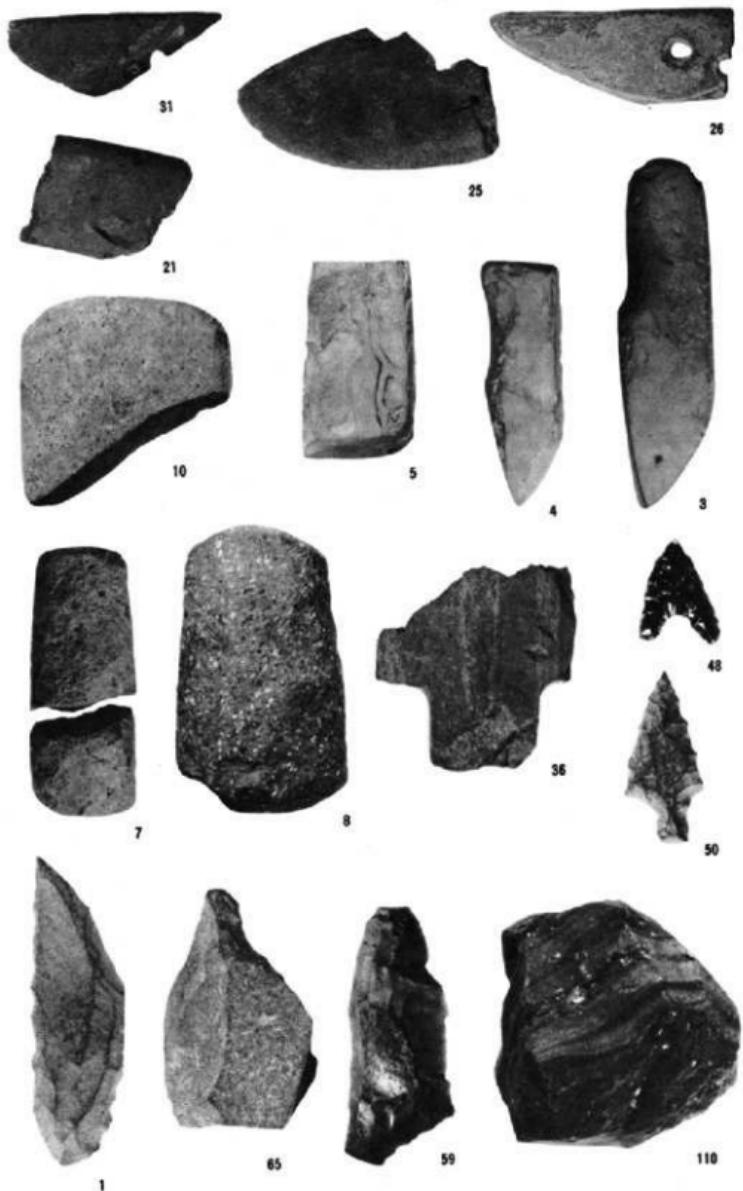


8

H-5地点(5)
 1:小円盤(石蓆?)出土状態
 2:第3号溝状遺構中の杭列
 3-4:扁平片刃石斧出土状態(同一石器)
 5:第1号溝状遺構杭出土状態
 6:第3号溝状遺構(南から)
 7:第1-3号溝状遺構(北西から)
 8:黒色粘質土中杭出土状態(東から)



H-5 地点出土土器・石製品・土製品



H-5 地点出土石器



H-5 地点出土木器



W-6



W-43



W-7



W-12

H-5 地点出土木器·杭·桶板

板付周辺遺跡調査報告書（4）

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第38集

福岡市教育委員会発行

1977年 3月31日

付編第1

福岡市板付遺跡H-5地点から出土した 木質品の樹種について

嶋倉巳三郎

板付遺跡H-5地点から出土した木質遺物44点について樹種の識別を行った。各資料は、木口（横断面）板目（放射縦断面）板目（切線縦断面）の3方向の切片をつくり、解剖学的にしらべたが、その結果は下表のようになつた。

No.	器種	出土層位	樹種	備考
2	三叉脚	第1号溝	カシ	
4	又脚	第1号溝上部	カシ	
6	菅器	第1号溝穴	ユクノキ?	
8	鍬	第1号溝	クスノキ	
9	枕?	*	ク	リ
10	丸枕	*	シイノキ	
11	丸枕	黒色土層中	ユズリハ	
42	檜上板	第1号溝	ク	リ
43	檜換板	*	シイノキ	
46	檜下板	*	シイノキ	
122	板枕	*	カ	シ
123	*	*	カ	シ
124	*	*	カ	シ
125	*	*	カ	シ
126	*	*	シイノキ?	圧縮変形
127	*	*	カ	シ
158	*	*	カ	シ
160	丸枕	*	カキノキ	
161	枕	*	シイノキ	
162	*	*	ク	リ
164	丸枕	*	シイノキ	
167	*	*	タイミンタケナツ	

No.	器種	出土層位	樹種	備考
180	枕	第1号溝	シイノキ	
181	*	*	シイノキ	
182	*	*	シイノキ	
186	*	*	シイノキ	
187	*	*	シイノキ	
193	丸枕	*	シイノキ	
198	板枕	*	シイノキ	
199	丸枕	*	?	圧縮変形
200	*	*	シイノキ	
201	*	*	モチノキの類	
214	*	*	モチノキの類	
215	*	*	シイノキ	
216	*	*	シイノキ	
217	*	*	タブノキ?	
218	*	*	シイノキ	
219	*	*	カ	シ
220	*	*	エノキ	
224	横枕	*	ユズリハ?	
238	板枕	第3号溝	カ	シ
239	*	*	カ	シ
243	*	*	カ	シ
277	*	黒色土層中	カ	シ
				圧縮変形

これらの結果を器材の種類別にまとめると次のようになる。

木器具類

樹種名	器具			計
	菅器	三叉・三叉脚	檜	
カシ		2		2
ユクノキ?	1			1
クスノキ			1	1

樹材・杭材・板材等

樹種名	種			板杭	杭	横杭	丸杭	根	計
	上板	横板	下板						
クリ	1				2				3
カシ				10			1		11
シイノキ	1	1	2	1			7	5	17
エノキ							1		1
タブノキ							1		1
ユズリハ					1	1			2
モチノキ							2		2
タイミンタチバナ							1		1
カキノキ							1		1
不明							1		1
計	1	1	1	12	3	1	16	5	

上の表をみると、種にはクリやシイノキのような耐朽性のある材が用いられている。杭材のうち、板杭にはカシ類が圧倒的に多く、シイノキがいくらか含まれている。丸杭ではシイノキが比較的多いものの、いろいろの種類の木が用いられており、その中にはタイミンタチバナのような小高木や、板を作るのにあまり適当でないものがかなり含まれている。しかし試料の数が少ないので断定することはできない。

次に各資料の解剖学的特徴と所見を略記する。

1. クリ *Castanea crenata S. et Z.* (ブナ科)

試料: No.42 (種上板)、Nos. 9、162 (杭)

環孔材で早材道管は大きく 1-2 (3) 環、晚材では急に小さくなり、多数集合して火焔状に並ぶ。放射組織は単列で同性。これらの特徴からクリの材とした。

2. カシ類 *Quercus (Cyclobalanopsis) sp.* (ブナ科)

試料: No.2 (三叉筋) ; No.4 (二叉筋) ; Nos. 127, 158, 238, 239, 243, 277, (以上板杭); Nos. 122, 123, 124, 125, 219 (以上丸杭);

放射孔材で、広放射組織がある。カシ類には多くの種類があり、ここにもアラカシやイチイガシなどと思われるものもあるが、解剖学上の決定はむずかしいので単にカシ類とした。

3. シイノキ *Castanopsis sp.* (ブナ科)

試料: Nos. 43, 46 (種横板、下板)、Nos. 126, 198 (板杭)、Nos. 10, 161, 164, 193, 200, 215, 216, 218 (杭) ; Nos. 180, 181, 182, 186, 187, (板) ; No. 161 (杭)。

放射孔材であるが早材の道管は大きく、晚材に移るにつれ急激に小さくなり斜線状に並ぶ。放射組織は主として単列のものばかり多いスグシイ型と、単列のものと集合あるいは広放射組織に近いものとの両者をもつコシイ型とがある。

4. エノキ *Celtis sinensis PERS. var. japonica NAKAI.* (ニレ科)

試料: No.220 (丸杭)

環孔材で晚材部の道管は小さく、多数集合して斜線状または切線波状に並び、早材からの移行部に中くらいの道管があり、晚材道管の側壁にラセン肥厚がみられる。放射組織は 8 細胞巾

に達し、えり細胞がある。これらの特徴はケヤキよりもエノキに近い。

5. クスノキ *Cinnamomum camphora* SIEB.

試料：No.8

散孔材、周囲状柔細胞が著しい。放射組織は1-2(3)細胞巾で、階段状に並ぶ傾向がある。当時クスノキは杭材のほか、器具、彫刻品、棺材、舟材などいろいろの方面に使われておった。

6. タブノキ(?) *Machilus thunbergii* S. et Z.

試料：No.217(丸杭)

散孔材であるが道管は放射方向に数回連結することがある。周囲状および切線状柔細胞が多い。放射組織は1-3細胞列で殆ど同性。クスノキ科の材であるが、そのうちタブノキに近いように思われる。タブノキはシイノキと共に暖温帯林の主要構成植物である。

7. ユクノキ(?) *Cladrastis sikokianum* MAKINO. (マメ科)

試料：No.6(容器)

散孔材、道管は大きく、単穿孔、単独または放射方向に2-3個連結することもある。側壁には小有縁紋孔が密に並ぶ。木質纖維は著しく材の主要部を占め、木柔細胞は、はっきりしない。放射組織は大きいものが多く(2)3-8細胞巾に達し、殆ど同性であるが、端にえり細胞状のものの見られることもある。

ユクノキによく似た材である。同属のフジキにも近いが、早材の道管の配列や放射組織がやや異なるようである。

ユクノキもフジキもやや稀な高木で、材は器具・旋作・建材・土木・薪炭などに用いられるという。この試料はわが国最初の出土と思われ、とにかく珍らしい。

8. エズリハ *Daphniphyllum macropodium* Miq. (トウダイグサ科)

試料：Nos. 11, 214(丸杭)

散孔材で道管は小さく、階段穿孔で階段数は多く、細い。放射組織は異性で1-3細胞巾のものが多い。試料No.214はやや異なる点もあるが、はっきりしないので一応ここに含めた。

9. モチノキの類 *Ilex* sp. (モチノ木科)

試料：No.201(丸杭)、No.224?(横杭)

散孔材、道管は小さく単独に散在し、階段穿孔で、段数は多く、細い。側壁にラセン肥厚があり、No.201では著しいが、No.224では極めてかすかである。放射組織は異性で、1-4細胞巾、時に8細胞巾に達することもある。

10. タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* LEV. (ヤブコウジ科)

試料：No.167(丸杭)

輻射孔材、道管は小さく、単独または放射方向に数個連結する。単穿孔。放射組織は異性で、3-5細胞巾であるが、軸方向に長くのびる。暖地に多い小高木。

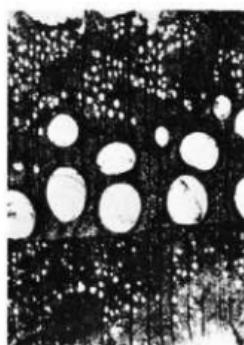
11. カキノキ *Diospyros kaki* THUNB. (カキノキ科)

散孔材で道管はやや大きいが、比較的疎に分布する。単穿孔。切線状單列の柔細胞が著しい。

放射組織は1—2列で殆ど同性。

道管や柔細胞の特徴からカキノキと思われるが、その中のヤマガキであるかも知れない。しかし解剖学的には区別できない。

図版説明のうち、Cは木口（横断面）、Rは柾目（放射継断面）Tは板目（切継断面）を意味する。



クリ (No.42) C ×20



クリ (No.9) T ×50



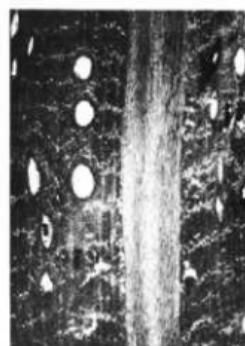
クリ (No.162) C ×20



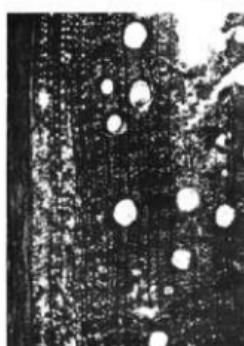
カシ (No.2) C ×20



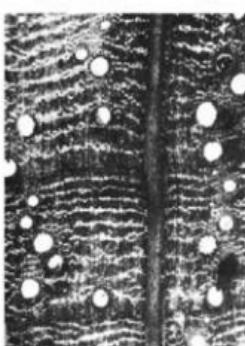
カシ (No.2) T ×50



カシ (No.239) C ×20



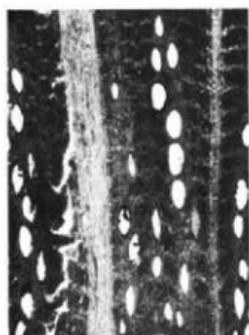
カシ (No.4) C ×20



カシ (No.219) C ×20



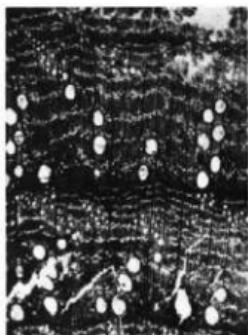
カシ (No.219) T ×50



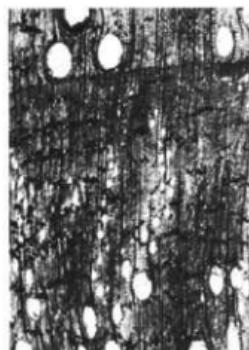
カシ (No125) C × 20



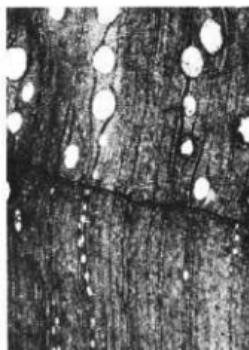
カシ (No125) T × 20



シイノキ (No193) C × 20



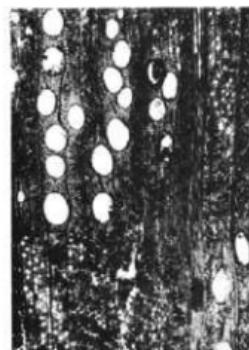
シイノキ (No43) C × 20



シイノキ (No46) C × 20



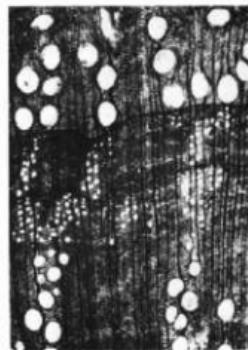
シイノキ (No46) T × 50



シイノキ (No198) C × 20



シイノキ (No180) C × 20



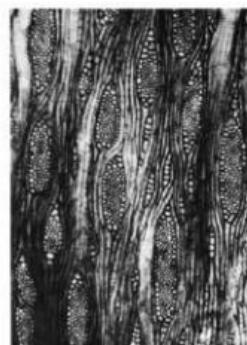
シイノキ (No215) C × 20



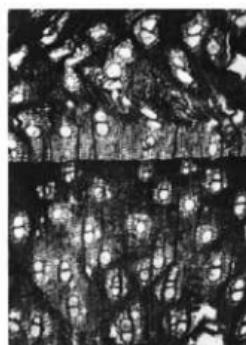
エノキ (No.220) C × 20



エノキ (No.220) R × 50



エノキ (No.220) T × 50



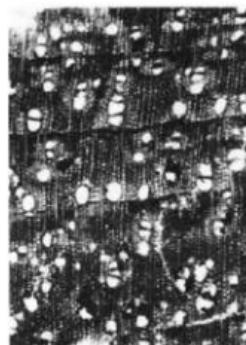
クスノキ (No.8) C × 20



クスノキ (No.8) T × 50



モチノキ類? (No.224) C × 20



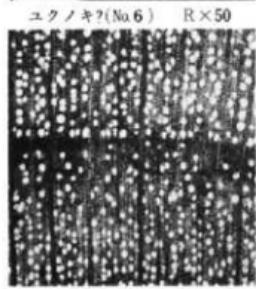
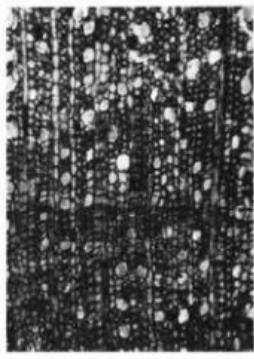
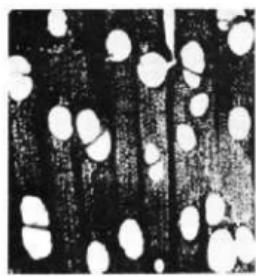
タブノキ? (No.217) C × 20



タブノキ? (No.217) R × 50



モチノキ類? (No.217) T × 50



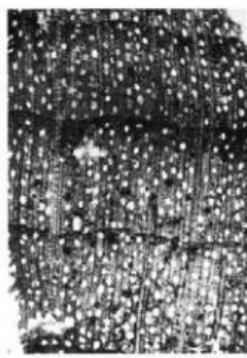
ユズリハ?(No.214) C×20

ユズリハ?(No.214) T×50

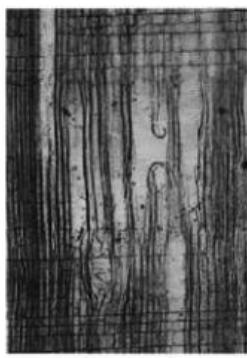
ユズリハ?(No.214) C×20

ユズリハ?(No.214) T×50

ユズリハ(No.11) R×100



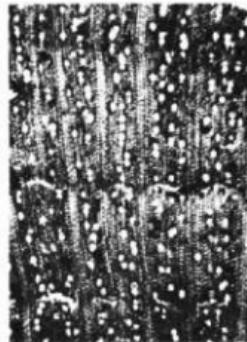
モチノキ類 (No.201) C×20



モチノキ類 (No.201) R×100



モチノキ類 (No.201) C×50



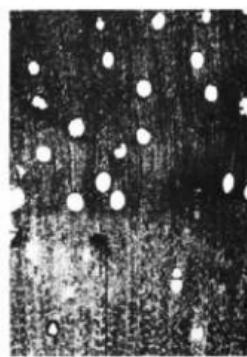
タイミンタチバナ (No.167) C×20



タイミンタチバナ (No.167) T×20



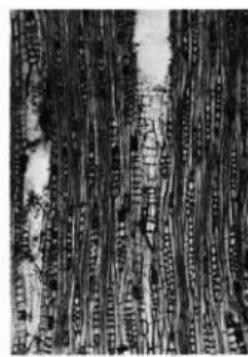
タイミンタチバナ (No.167) T×50



カキノコ (No.160) C×20



カキノキ (No.160) C×50



カキノキ (No.160) T×50

板付周辺遺跡調査報告書(4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第38集

福岡市教育委員会発行

1977年3月31日

付編第2

諸岡遺跡14号墓近傍出土の

炭化種子について

粉川昭平

諸岡遺跡については、すでに次の二つの報告書にくわしく報告がなされている。

- A. 板付周辺遺跡調査報告書(1)、福岡市埋蔵文化財調査報告書29集(1974、福岡市教育委員会)の第2章、諸岡遺跡の項。
- B. 板付周辺遺跡調査報告書(2)、福岡市埋蔵文化財調査報告書31集(1975、福岡市教育委員会)第3章、諸岡遺跡の項。

問題の炭化種子は、上記文献Aの60頁～61頁にわたる「祭祀遺構」の項に、横山邦雄氏が報ぜられている資料である。同氏によると、14号墓に近く一ヶ所、33号墓に近く二ヶ所に、丹塗り破碎土器群がみられ、出土状態や位置から、墓地に対する祭祀行為と考えられた。14号の北の小形壺形土器(丹塗り磨研)に近い黒色上層中から、栽培種らしい炭化種子が数粒検出されたが、供獻内容物と直接関連あるやは明らかではなく、混入の可能性がつよいとの事である。この資料は、板付水田遺跡の植物性遺物調査の節、筆者が預って調査する事となったが、報告がおくれて、上記報告書には間にあわなかった。おそらくなってしまって申しあげないが今回報告する。

資料は二つのタッパ・ウェアに入れてあり、「諸岡墓S、No.18」とよび「諸岡墓S」とある。ともに焼けて炭化した穀粒である。ムギ・イネ・マメ類と見えたので、大阪府立大学農学部の松本豪氏にみて頂き種々御教示をえた。

先づ「墓S、No.18」の資料には24個の粒と破片が3つあった。そのうちムギは5個と破片が3つあり、松本豪氏の検定ではオ・ムギ(*Hordeum*)であり、カワオ・ムギ(穀麦)の品種群に属する。穎がくっついたま、炭化している。第1図と図版1とを参照。スケール・ルーペで長さと巾とを計測した結果は次のようであった(単位はmm)。5.5×2.8、6.0×2.0、5.7×2.1、5.6×2.6、5.0×2.1、7.2×3.2、5.6×2.0、5.8×2.6、5.8×2.6、5.6×2.6、5.4×2.4、5.3×2.2、4.9×2.9、4.2×1.8、4.5×2.3。

また同じ資料中にはイネ(*Oryza*)が5個あり、計測値は4.5×2.6、4.6×2.8、5.0×3.2、4.6×2.6、4.8×2.6であった。これは、ジャボニカ種である。またマメ類は3個あり、計測値は、5.5×3.5、6.3×4.0、5.6×3.8であった。アズキ(*Phaseolus*)のように見えるが、へそ

(勝点)の状況がよくわからないので断定できない。さらに径3.5mm程度の球状のものが1個あったが、モロコシ(*Sorghum*)ではないかと検定された。

第二の資料「諸岡甕棺S」と記されたものには、12個の粒と、不完全な破片2個があった。前記と同様のオ、ムギ(カワオ、ムギ)が8個(うち2個は破片)あった。その計測値は、 6.5×2.0 、 5.6×2.4 、 5.3×2.0 、 4.5×2.0 、 6.0×3.0 、 6.0×2.7 。イネ(ジャボニカ種)は6個あり、その計測値は、 4.5×2.9 、 5.0×2.9 、 4.0×2.5 、 $? \times 3.0$ 、 $? \times 3.2$ 、 $? \times 2.3$ であった。

以上のように、資料は破片も含めて41個の穀粒であるが、カワオ、ムギ・イネ・アズキ?・モロコシ?の4種類よりなる。わづかの資料の中に4種類もの穀類がある事は注目すべき事である。供獻物とするとあるいは理解できるのかもしれないが、それが焼けている事はどういう事か解釈できない。

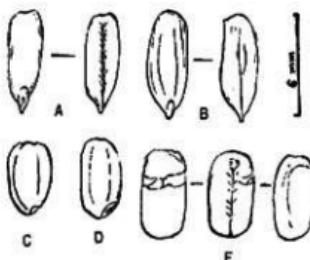


図1

A, B カリヤムズ。それを丸むし器のあと所産。右は横断のある穀粒。
Aは「油酰穀粒」、Bは「油酰穀」。
C, D, Eは「豆豆穀粒」。C, D, Eは「油酰穀」。
アズキ? 稲葉穀粒。N. 6.0, 6.0, 6.0を、食・竹筒。
腹側には、茎丸(茎部丸い)と、その下に細胞のくみがある。

諸岡遺跡出土炭化穀粒 ($\times 5$)

1. イネ (諸岡櫛棺、S)
2. イネ (諸岡櫛棺、S、No18)
3. オオムギ (カワオオムギ) (諸岡櫛棺、S)
4. 全上、裏面
5. オオムギ (カワオオムギ) (諸岡櫛棺、S、No18)
6. 全上、裏面
7. アズキ? (同一物の表裏) (諸岡櫛棺、S、No18)
8. アズキ? (諸岡櫛棺、S、No18)
9. 全上、裏面 (二分している。)

調査主体

福岡市教育委員会

戸田成一、矢野正喜、青木崇、志鶴幸弘、清水義彦

三島格、後藤直（市立歴史資料館）

柳山純孝、飛高憲雄、塙屋勝利、折尾学、山崎純男、力武卓治、柳沢一男、二宮忠司、

井沢洋一、浜石哲也、池崎謙二、山崎龍雄（埋蔵文化財係）

横崎幸利、草場九男、安田正義、沢賀臣、横山邦雄、山口謙治（板付遺跡調査事務所）

**福岡市埋蔵文化財調査報告書 第38集
板付周辺遺跡調査報告書（4）**

1977年3月31日

編集 福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所

福岡市博多区板付2丁目11-1

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 西日本新聞印刷

板付周辺遺跡調査報告書

4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第三十八集

一九七七